糸使いちゃんの逆行物語

96ごま

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある地方の大商人には、三人の息子と一人の娘がいた。

しかし、その末っ子である娘は、〝元息子〟だった。

「なんで俺がこんな目に……」

これは、死んだら何故か女に変わっていた一人の糸使いが奮闘する逆行物語である。

【進行状況】

十二話：オリキャラ登場

二十三話：ナイトレイド編突入

三十五話：オリ帝具登場

目次

プロローグ
少女になった元少年 1
帝国兵士時代編
苦戦を斬る 3
誘惑を斬る 8
邂逅を斬る 14
不法侵入者を斬る 22
誘拐を斬る 30
人助けを斬る 37
噂話を斬る 42
誤解を斬る 47
猜疑心を斬る 53
悪魔を斬る 59
兄を斬る 66
夢を斬る 72
拘束を斬る 78
修羅場を斬る 84
悪々戯を斬る 91
密談を斬る 98
交渉を斬る 103
勧誘を斬る 109
待ち合わせを斬る 115
雨宿りを斬る 121
再会を斬る 128

ナイトレイド編

新たな出逢いを斬る ―― 133
新入りを斬る ―― 138
奇襲を斬る ―― 146
正義と悪を斬る（前編） ―― 150
正義と悪を斬る（後編） ―― 154
悪夢を斬る ―― 159
感謝を斬る ―― 166
嘘を斬る ―― 171
真実を斬る ―― 177
自覚を斬る ―― 182
会議を斬る ―― 188
ガールズトークを斬る ―― 192
獣を斬る（前編） ―― 199
獣を斬る（後編） ―― 209

プロローグ
少女になった元少年

――アレを思い出したのは、まだ１０歳にも満たない年だった。
裕福だけど退屈な日常から一転。一人の女性への一目惚れで始まった、生と死の境目での人生。
突然夢に出てきた遠い過去の記憶に、俺はひどく混乱していたのをよく覚えている。……いや、当時はまだ『私』だったか。
この先に起こる未来と運命。そしてそんな自分の最期。その全ての記憶が毎晩夢に出て、『ナイトレイドのラバック』という人格を取り戻した。
一番印象的で、今も何度も夢に出てくるのは、月に手を伸ばす己の血に染まった右手。あの人の綺麗な白銀色の髪とそっくりな満月に伸ばした最期の瞬間。
殺し合って、他者を殺して、殺され掛けて。仲間もたくさん殺されて、大勢の人間が傷付いた。
いつ訪れてもおかしくない死の恐怖と戦って抗い続けたけれど、結局自分も、呆気なく殺されてしまった。
それは殺し屋である自分の報いだとわかっている。それでもやっぱり、まだ死にたくなかった。どんなに苦しくてもまだ、俺は生きていたかったんだ。

もちろん、最初はその記憶を信じられなかった。
自分はどう見ても女だ。なのに夢の中の自分は男で、よく可愛い女の子をナンパしたり、女湯を覗いたりしていたなんて……。
確かに自分は可愛い女の子が好きな自覚はある。でも、今は恋愛対象として見ることは出来ない。だって……
夢の中で一目惚れしていたはずのあの人と遂に出逢えたのに、俺の胸にはトキメキがなかったから……。

でも、それと同時に夢の出来事が現実に起きていく事によって、その記憶は前世の自分なのだと信じざるを得なくなっていた。
「ってことは……俺はこれから、帝国の兵士になるのか…？」
夢で見た出来事は、不思議と今も鮮明に思い出せる。楽しい事も、辛くて苦しい事も全部。
あの人……ナジェンダさんに出逢った俺は、二つの選択肢を選ばなければならない。
夢で見た前世という血だらけの暗い泥道を歩くか、その未来から逸脱して、このまま地方商人の娘として退屈で明るい箱庭の中での日々を過ごすか。
でもその答えは、『お嬢様のラバック』ではなく、『ナイトレイドのラバック』としての人格が甦った時からもう決まっていた。

もう一度、この退屈な日々を抜け出して、ナジェンダさんと……ナイトレイドのみんなとまた出逢いたい。一緒に笑っていたい。
だから、今度は俺がみんなを護ってみせる。誰一人死なせたりなんてしない。そして今度こそ、俺自身も生き残ってみせる。あの先にある筈の朝日を、みんなと一緒に見るために……！

その決意が、何故か女になって逆行した俺の物語の、始まりの鐘音だった。

帝国兵士時代編

苦戦を斬る

「ん、きっつ…。女ってのはほんと苦労するんだな……」

兵士個人に与えられる私室で、俺は一人、下着を身に付ける事に苦戦していた。

前世の記憶を遡りながら、俺の予想を裏切ってデカくなった自分の胸を触ってみる。

「……アカメちゃんと同じくらいか？」

女湯の覗きに失敗しながらも、俺は普段から観察していた女子達の胸のサイズと今の自分のそれを比較すると、そこそこあるアカメちゃんに並ぶくらいの大きさだった。

記憶を思い出してからは、可愛い女の子は今も好きだ。でも、自分が、というのはまた別の話である。

マインちゃんには失礼だと思うが、元男として溜め息を吐いてしまうのは仕方ない。こんなデカい胸をぶら下げた自分なんて見たくなかった、と俺は鏡に映る女物の下着姿の自分を心底恨めしそうに睨む。

鏡の自分とにらめっこしていると、軽いノック音が自室の扉から聞こえてきた。

「え!?ちょっ、ちょっと待って！」

突然の事に驚き、慌てて服を着ようとする。

しかしその次に聞こえてきたのは、昔から大好きなあの声だった。

「ラバ？何かあったのか？」

扉越しに心配してくれるその声の主は、まだ右目と右腕を失っていない、風になびく美しい銀色の密編みがよく似合うナジェンダさんだ。

「なんだ、ナジェンダさんですか……」

男の声ではなく、慣れ親しんだものだとわかってホッと胸を撫で下ろし、そのまま「入ってどうぞ」と伝えて彼女に入室を促す。

「なんだとはなんだ……って、まだ着替え中だったのか」
扉を開けて不満そうな表情を見せるが、俺の状況を見て納得してくれたらしい。
でもナジェンダさんには、俺みたいに前世の記憶はないらしい。それは、兵士になった俺と再会した彼女の反応を見て確信した。
もしあの記憶があれば、彼女は女の俺に驚く筈だ。なのにそんな素振りは一切なく、むしろ妹のように俺を可愛がり、男だった俺に対しての態度とは全く別の対応をしてくれるのだ。それがなんだか虚しい気分にもさせられているのは気のせいだと切に願いたい。
そして気が付くと俺の胸をジッと見ていたナジェンダさんは、俺にとっては深く突き刺さるような爆弾発言を投下してくる。
「ラバ、その下着のサイズ合ってないんじゃないか？」
「……やっぱりそーですか」
はぁ、と溜め息を吐き、観念するように現実と向き合う。
俺みたいなヤツは、マインちゃんくらいの小さいサイズのままだと思っていたのに……。いや、別に事例とかがあったわけじゃないんだけどさ、ただなんとなくね。だから気のせいだと信じて小さいサイズの下着をずっと身に付けていたっていうか……。
「胸が大きくなるのがそんなに不満なのか？全く、贅沢な悩みだな」
溜め息を吐いた俺に、ナジェンダさんはクスクスと意地悪そうに笑いながら俺の背後に回って、窮屈な下着に覆われた胸に触れる。
「ひゃうっ!!?」
「ふむ、やはり少し大きくなったみたいだな」
どうやら彼女は俺の胸をふにふにと触って、大体のサイズを確かめているらしい。
急過ぎて思わず変な声が漏れた自分にも驚いて、咄嗟に口を塞ぐ。前世の男だった時とは違って、今の自分は声が高い事をすっかり忘れていた。
「ナ、ナジェンダさんっ!!触るなら先に言ってくださいよ……！」
「す、すまん」
羞恥で頬を赤らめながら文句を言う。

これで相手がナジェンダさんではなく男だったらクローステールで八つ裂きにしていたところだった。だが生憎その相棒はまだ所持していない。
「そのままじゃ胸が苦しいだろ。下着を買いに行くのが恥ずかしいなら、私が代わりに行こうか？」
どうやらナジェンダさんは、俺が下着を買いに行くのを恥ずかしがっているのだと勘違いしているみたいだ。でも、女物の下着を買いに行くのには少し抵抗があるのもたしかで……。

結局、彼女の言葉に甘えて、後日ピンク色のフリフリした下着を渡された時は自分の舌を噛んで死んでしまおうかと本気で思った。

「――一級危険種の土竜、ですか」
「ああ、ここ最近、また被害が増えたらしくてな」
常に忙しい上司であるナジェンダさんに頼まれた仕事は、馬車で遠出する帝都の貴族サマを、帝都付近で出没する一級危険種の土竜から守って護衛しろという仕事だった。
もちろん俺はこの事も知っていて、持ち前の器用さで苦戦することなく任務をこなしていた。……筈だった。
「うおおおお!!!こっちくんなこのモグラ野郎おぉーッッッ!!」
ただでさえタツミやブラートさんと比べて非力だった俺は、女になってより一層その弱さを痛感する。こんな細腕では、あんなに大きな危険種に傷を与えるのは厳し過ぎたのだ。
ナジェンダさんや姐さん、アカメちゃん達がこれ以上の強敵と戦い続けていた事を思い返すと、改めて凄いと実感した。それと同時に、人間離れしている彼女達が恐ろしくも感じる。
当然、剣を振る訓練も受けてきた。でも実戦というものはそう簡単に上手くいくわけでもなく、それは前世で嫌というほど身に染みている。だからこの程度で音を上げるわけにはいかなかった。
だけど、見た目に反して素早い土竜の攻撃を避けるためにまだ新人

であろう護衛達と共に全力で走り続けていると、こんな愚痴が零れてしまう。
「くっそ、こんなハンデがなけりゃお前なんか瞬殺してやるっつーのに…！あー！せめてクローステールがあれば!!」
今は無いものをねだっていても仕方がないとわかっていてるが、これくらいは許してほしい。
しかしそこで、ふと大事なことを思い出す。
「あれ？そういや土竜って、頭が脆かったような……」
それだ。そこを狙えば、仕留める事が出来る筈だ。
そうと決まればあとは実行するのみ。走り続けていた足を止めて、土竜へと振り向く。
そんな俺の行動に、他の兵士達は走りながらも驚きの声を上げていた。
「死ぬ気かお前!?」
「へっ、俺はこんなモグラごときにやられるタマじゃねぇぜ！」
女らしくない発言をしながら、昔を思い出す。
ナイトレイドの仕事と比べたら、一級危険種の討伐なんて簡単だ。本当に怖いものは、人間という皮を被った化け物だけなのだから。
こちらに詰めよってくる土竜の勢いは増すばかりで、他の護衛達はもうダメだと叫ぶ。でも俺は、その勢いを待っていた。
「そんなに急いでるなら、今すぐに逝かせてやるよ！」
言い終えたと同時に、俺を喰らおうと向かってくる土竜の頭目掛けて剣を突き出す。突き出した剣は、向かってきた土竜の勢いによって頭に深く刺さっていった。
土竜は悲鳴のような鳴き声を上げて暴れ回り、血を浴びた俺は反射的に剣から手を離し、その反動で尻餅をついてしまう。
数秒程土竜を見上げていると、断末魔の叫びは収まり、土竜は地面に倒れた。
「……はぁ～、やっと一匹目かぁ……」
土竜が死んだと確認して、安堵する。
しかしこの仕事は貴族サマの護衛が目的なのであって、一匹討伐す

れば終わり、というわけではなかった。
「こりゃあ、先行きが不安だな……」
一級でも十分強いとはいえ、危険種ごときで苦戦してしまうなんて。
このままでは革命軍に入る前に死んでしまうかもしれない。そう直感した俺は今まで以上に努力しなければと思い、この先必ず出逢うであろう相棒のクローステールに頼らずとも戦えるように、剣の腕をもっと磨くことにした。

誘惑を斬る

あれからなんとか護衛任務を完遂した後。仕事の報告を終えると、ナジェンダさんはもう我慢ならないといった様子で怒鳴り声を上げていた。

「なんだその汚れは⁉お前は自分が女だという事を自覚しろ！せっかくの可愛い顔が台無しだろう⁉」

「いや、それって俺が可愛いかどうかは全く関係無いですよね…？」

「とにかく今すぐ風呂に入れ!!」

「……はい」

会話が噛み合ってないし、そもそも俺は元男です。なんて言えるわけがなく。何故かこんな些細な事で怒り出した上司の威圧に負けて、俺は泥と土竜の血で汚れた格好のまま、深夜の暗い廊下を歩いて大浴場へと足を運んだ。

――サァー、とシャワーの水が流れる音が浴場に響く。

泥はすぐに落ちてくれたけど、染み付くように髪や身体に掛かった土竜の血は簡単には落ちてくれなかった。生臭い血の匂いには慣れているが、自分の身体からずっと臭うのはさすがにキツい。それに、周りにも迷惑を掛けてしまう。

「あーくそっ、全然落ちねぇ…！」

舌打ちしながらもう見慣れた自分の身体をタオルでゴシゴシと強く擦っていると、背後から女性の声がした。

「そんなに強く擦ると、その白い肌に傷が付くだけだぞ？」

「んな事言われても、これが落ちてくれねぇんだから仕方な……」

途中まで言ってからピタリと手を止めて気が付く。この声にはどこか聞き覚えがあると。けれどそれは、聞きたくない声でもあるような気がして、振り向くのを躊躇した。

「そうか、なら私が手伝ってやろう」

背後から白く細い腕が伸び、俺が手にしていたタオルをすんなりと

奪っていく。かと思えば、それは俺の背中をなぞるようにタオルを上下に動かし、汚れを拭い始めてくれた。
「えと……あ、ありがとう、ございます」
「なに、返り血がなかなか落ちないという悩みは私にもよく理解出来るからな。それと、そんなに縮こまるように緊張しなくても良いぞ」
いや無茶言わないでくださいよ。あんた自分がどれだけ恐ろしい存在なのか理解してんのか？
喉まで出てきそうになった言葉を呑み込み、覚悟を決めて後ろにいる女性の正体を恐る恐る横目で確認する。するとそこにいたのは、外れて欲しかった自分の予想通りの人物だった。
「まさか、こんなところでエスデス将軍とお会いするとは……」
「いつもは一人でこの時間に入るのだがな。珍しく先客がいて私も驚いたぞ」
艶やかな長い青髪を揺らしながらクスリと妖艶に微笑むその姿は、やはりあの帝国最強の女。ドＳとしても名高いエスデス将軍である。白くきめ細かい彼女の素肌は、女になった今の俺でも目に毒だと思った。
暫くの間沈黙が続くと、エスデスは最後の仕上げというようにシャワーで俺の髪や身体に付いた汚れを洗い落としてくれた。
「よし、これで汚れは全て落ちたな」
「ありがとうございます、エスデス将軍……」
「礼には及ばん。それよりも……貴様、たしかナジェンダの部下だったな？」
ギクリ、と思わず身体を震わせて強張る。
今はまだ彼女と俺達は敵対していない。だが、もしこの女に前世の記憶があったら？前世でも顔を合わせた事が兵士時代の僅かな回数しかないとはいえ、ナイトレイドでの俺の顔を知っていたら、今ここで殺されるかもしれない。
人を確実に殺せる凶器のないこの場所では、俺は圧倒的に不利である。しかし彼女は別だ。武器も衣類も、何もなくても戦える。人を一度に何人も殺せる。まさに彼女自身が凶器……いや、帝具そのもの

だ。
　今ここで俺を殺さないとしても、俺を介してナジェンダさんの殺害を試みる可能性だってある。そんな事はこの命に代えても絶対にさせないが。
　どちらにせよ、なるべくこの女を刺激しない方がいいのは確かだ。慎重に言葉を選ばなければ、この先の未来に支障が出る。
「そうですけど……それがどうかしましたか？」
「いや、女兵士は少ないからな。以前からナジェンダの隣にいるのを見掛けて、少々気になっていたのだ」
　エスデスに前世の記憶があるのかはまだわからない。でも、そんな理由で目に留められていたのには驚いた。
「そうでしたか……。エスデス将軍にお目掛けして頂けただなんて恐縮です」
「そう改まらんでも良い。今は二人きりなのだから無礼講だ。最初の砕けた口調で話せ」
　んなこと言われても怖ぇからやだよと言いたい。大声で叫びたいけどただでさえエスデスと二人きりっていう緊張で心臓が破裂しそうなんだから我慢しろ俺。
「案外ナジェンダに似て堅いヤツだな貴様。そんなだとナジェンダのように彼氏が出来ないぞ？」
「ナジェンダさんは美人でイケメンだから本人がやろうと思えば彼氏なんてすぐに出来ますよ。むしろ俺が彼氏になりたいくらいでしたよ。……あ」
　しまった、と口を塞ぐがそれは手遅れで。
「ふふっ、そんなにナジェンダが好きか。あいつが女にもモテるとは意外だな」
「ち、ちがっ……！い、今のはその……」
「最初の口調を聞いた時はてっきり少女とはかけ離れた性格かと思っていたが、なかなか可愛いところがあるではないか」
　俺が赤面する一方で愉快そうにクスクスと笑うエスデスは、その白い人差し指をつ、と喉から滑らせるようにして俺の顎を上げ、そのま

ま親指で唇をなぞる。
何をされるのか全くわからないという恐怖で、エスデスの一挙一動にビクリと肩を揺らすけれど、その様子すらも楽しんでいるのか、エスデスの笑みは一切絶えない。
「貴様、名はなんという？」
「……ラバックです」
名乗るのは危険だと承知しているが、今ここで名乗らなければ不自然に思われ、それこそ危険だ。
覗き込むように見つめてくるその瞳から目を逸らしたい。でも俺はこれでも前世では暗殺稼業を生業にしてきた殺し屋だ。いつか必ず、今度こそ挑むであろう最大の脅威に、今ここで負けるわけにはいかない。
そんな対抗心のような俺の強い意思が殺気に変わり、彼女に負けじと睨むように見つめ返す。
「……ふふっ、私に殺気を向けるとは面白い事をするな、ラバック。私は貴様を気に入ったぞ」
「……へ？」
思わぬ発言に、間抜けな声が漏れる。
「これも何かの縁だ。ラバック、ナジェンダの下で働くのは辞めて、私に従わないか？」
「……はぁぁ!!?」
何故かエスデスに気に入られてしまったらしい俺は、この信じ難い状況に目眩がした気がした。

――大浴場でエスデスに遭遇してから数日後。あれから出会う度に俺を勧誘してくる彼女に、俺は頭痛を感じていた。
「ラバック、私の下に来い。たっぷり可愛がってやるぞ！」
「ですから、俺はナジェンダさん以外に仕える気は全くありませんってば！」
目の前で堂々と俺を引き抜こうとするエスデスとのやり取りに、そ

の光景を見慣れてしまったらしいナジェンダさんは溜め息を吐いてしまっている始末だ。
本当になんで俺の事を気に入ったのやら……。殺気を向けられたから、みたいな事を言われたけど、それはむしろ怒りを買うであろう行動だった筈なのに……。
あ、別にエスデスに怒られたかったわけじゃないからな？俺はそんな変態じゃねぇ、今も昔も華麗なイケメン紳士だ。あれは無意識にやっちゃった事だから正直冷や冷やしてたって言いたいんだよ、わかったか？異論のあるやつはその場で一時間正座な。
「エスデス……いい加減ラバックを引き抜こうとするのはやめないか？彼女は私が一番信頼している部下なんだ」
「ほう？それならますます欲しくなるな。貴様の大切なものを奪った時の顔も見てみたい」
その一言を合図に、両者の目付きが険しいものに変わる。
交わる視線の間でバチバチと火花が散っているかのように見えるのは目の錯覚だろうか。いやそれよりも、俺を挟んで喧嘩するのはやめて頂きたい。こっちの胃がキリキリして痛いからマジで勘弁してくれ。
これは俺の所有権を巡る戦いのようだが、将軍同士のぶつかり合いに巻き込まれた俺の身にもなって欲しい。というか俺に人権はないんですか、と訴えたい。
今ならタツミの気持ちがよくわかる気がするぜ……。あいつ、こんなに執着心の強いエスデスにずっと狙われてたのによく生きてたな。俺は今まさに死にそうだ。威圧による窒息死で。
「お前とこんな話をしていたらキリがない。行くぞ、ラバック」
「あ、はい」
「全く、つれないな。そんなにナジェンダの事が好きか」
ナジェンダさんに続いて踵を返そうとした瞬間、エスデスが俺の頬を両手で包んで見つめてきた。
まるで男を誘惑するようなそれに、思わずドキリとする。しかし、それを許さないとでも言うように俺の腕を引いたのはナジェンダさ

んだった。
「何度言っても無駄だとわかっているだろ、エスデス。ラバックは私の妹のような存在だ。例えラバックがお前の下に行こうとしても、私が許さん」
「……ふっ、それは残念だ」
ナジェンダさんの真剣な瞳を見たエスデスは、これ以上は彼女を敵に回すと思ったのか、肩を竦ませて自らが来た道を戻って行く。
「ナジェンダの下で働くのが嫌になったらいつでも私の下に来い、ラバック」
「だからいい加減諦めろと言っているだろう！私のラバックに近寄るな！」
帰り際にまだ諦めの色は無いと告げるエスデスに、ナジェンダさんは噛み付くように威嚇していた。
ナジェンダさん、それは前世の……男だった俺に言って欲しかったです……。
今も充分嬉しく思うが、恋心を抱いていたあの頃に言ってもらえたらどれだけ嬉しかった事か。そんな複雑な想いを胸に秘めて、俺は深い溜め息を吐いた。

邂逅を斬る

「ラバック、今日は陛下と大臣との食事があるんだが、お前も一緒にどうだ？」
　ナジェンダさんからの突然の誘い。それは、いつも通り、記憶通りに何のトラブルもなく仕事を終えた日の事だった。
　女に変わったというだけで、前回の記憶とは違う展開が度々出てくるのは本当に驚きである。
「だ、大丈夫なんですかそれ…？」
「礼儀や作法なら元お嬢様のお前はよく出来ているだろ？だから問題はないさ」
「いや、そういう意味じゃなくて。それ俺みたいな下っぱ兵士が行っても良い食事会じゃないと思うんですけど……」
　でも、大臣に直接会えるならある意味チャンスだ。その場で大臣を殺すのは難しいとしても、この機に何か情報を得られるかもしれない。大臣の隠し玉や弱点。もしそれがあれば、今後革命軍に入ってから役立てる。
「実は陛下にお前の話をしたら会ってみたいと言われてな。少し、彼の話し相手になってくれないか？」
「そういう事ですか…。ならお言葉に甘えて俺も行かせてもらいます」
　けどその食事会に行くなら、一番注意するべきは羅刹四鬼。前世の事もあって今回は事前に調べてみたが、大臣を護衛しているあいつらは普段は姿を見せないらしい。
　つまり、大臣と一緒にいる間はどこにいるかわからないあいつらに監視されている。しかも理屈はわからないが、羅刹四鬼は気配か何かで俺らナイトレイドを見付け出した強者だ。下手な行動をしたらバレて即アウト。最悪の場合はその場で処刑されかねない。
　クローステールがない今、四鬼の内二人を騙せた俺の必殺技、死んだフリすらも使えない。だからここは慎重に、怪しまれないように会話で少しでも情報を引き出してやる。

――そして正午。陛下達がよくお茶会をしているという大部屋の席で、俺は陛下と大臣に対面した。
あの時よりも幼い皇帝陛下と、相変わらず良い暮らしを満喫して肥えているオネスト大臣。こうして間近でこの二人を見るのは前世でも初めてだ。
「ほう、ナジェンダ将軍から聞いた通りの美少女ですね」
「私の自慢の部下ですからね。彼女は外見だけではなく仕事も優秀ですよ」
オネストとナジェンダさんがそんな会話をするが、正直俺はこんなオッサンに美少女と呼ばれても全然嬉しくない。あと大臣だけではなく陛下までもが俺をガン見しているのがなんか怖ぇ。
「本日は食事にお誘いして下さってありがとうございます、陛下」
「う、うむ！ナジェンダ将軍からお主の話は聞いておったぞ！仲間想いでとても優しい、大事な妹のような存在だとな！」
ニコリと微笑んで挨拶すると、緊張しているのか顔を赤くして言葉を返す皇帝陛下。実は人見知りなのだろうか？
「そういえば大臣、今日はシュラも呼んでいるのではなかったか？」
陛下の口から出た『シュラ』という名前に、思わずピクリと反応する。
シュラ？それって確か大臣の……。
そこまで考えたところで部屋の扉が開き、一人の男が入ってきた。
「わりぃな親父。用事済ますのに手間取っちまっ…た……」
現れた男と目が合うと、お互い目を見開いて固まる。褐色の肌に掛かった白銀の髪。顔に付いた大きな傷痕。俺はその男に見覚えがあった。
「……親父、こいつは？」
「来るのが遅いですよ、シュラ。彼女はナジェンダ将軍のお気に入りの部下だそうです」
怪訝そうに俺を見ながら大臣にそう訊いていたのは、オネストの息

子、シュラ。彼は返答を訊いてより一層眉根を寄せる。
最悪だ…よりにもよって一番会いたくないなかったこいつに会っちまうなんて……。
シュラは前世の俺とタツミを罠に嵌め、捕まった俺を拷問した張本人である。
そんな奴に会ったら今すぐにでも逃げ出したくなるのは仕方ないだろう。でも向こうは俺を知らない筈だ。いつも通りの振る舞いでいなきゃ怪しまれてしまう。
「えっ、と…初め、まして……」
「……」
引き吊った笑顔で初対面を装うが、シュラは無言でこちらを睨んでいるだけだった。
こんにゃろう。頑張って挨拶してやったのにシカトかよ。
顔に出さないように内心で舌打ちしていると、俺とシュラの気まずさを感じ取ったのか、陛下が慌てた様子で、
「シュラ、どうやら機嫌が悪いようだが、どうしたのだ？いつもなら嬉々として女性と話すであろう？」
「……別に。なんでもねぇよ」
どうやらシュラの普段との反応の違いにも戸惑っているようだ。
そこで俺もふと疑問に思う。陛下の話が本当なら、なんで女の俺に対する態度がこんなに悪いんだ？この世界線ではまだ初対面だというのに。
……まさか、前世の記憶があるのか？いや、それだけは勘弁して欲しい。もし前世で因縁のあるこいつと同じ立場だったら胃痛だけで死にそうだ。
「はっ！だ、大臣、まさかシュラは……」
「ん？どうかされましたか？陛下」
何かに気付いたらしい陛下はオネストの耳元でひそひそと話し始める。
「……あのシュラが？いやいや、そんなわけありませんよ陛下」
「余は絶対にそうだと思うぞ、大臣！」

呆れ顔で否定する大臣に陛下は豪語していた。
彼らが一体何を話していたのかは俺もシュラも、ナジェンダさんにもわからない。けれど何かとてつもない勘違いが生じているような気がする。
「なぁ、ラバック殿。お主に一つ頼みたい事があるのだが……」
「頼み、ですか？」
陛下からの突然の頼み。これは決して断れないやつだ。でも少し嫌な予感がして、ゴクリと固唾を飲む。
「その……そこにいるシュラと、一度交際をしてみてはくれないだろうか？」
「「……は？」」
陛下からの突拍子もない頼み事に、俺とシュラは間抜けな声を出してしまった。
「へ、陛下……？何故ラバックとシュラ殿にそのような事を……？」
恐る恐るといった様子で陛下に尋ねたナジェンダさんに、陛下はきょとんとした顔でとんでもない事を言い出す。
「む？余はただ、シュラの恋を応援しているだけだぞ？」
「……はい？」
また訳のわからない事を言われて首を傾ける。するとシュラは我慢できずにその場で大声を張り上げた。
「ンなわけねぇだろうがッ!!誰がこんな女装好きの変態野郎を好きなるか！」
「はぁ!?今なんつったこのゲス野郎ッ!!てめぇの拷問趣味も大概だろうが！」
聞き捨てならない言葉にカチンときた俺も席から立ち上がってシュラに噛み付くように反論する。
しかしその言い争いはナジェンダさんが放つ無言の殺気と、天井と扉の先から向けられる殺気によって収り、室内は静まり返った。
恐らく、天井裏には羅刹四鬼。扉の先には帝国軍最上位のブドー大将軍が身構えているのだろう。三方向から感じた大きな殺気に怯えて、俺は大人しく席に座り直した。

マジで殺されるかと思った……。あれ？そういやよく考えたらこいつ今、俺の事を女装好きって……でも俺が女装したのは前世の……。

ここで漸く、俺はシュラが自分と同じように前世の記憶を持っているのだと気付いた。

「む？二人は知り合いだったのか？」

俺達の失態を全く気にしていない様子で不思議そうに訊ねる陛下に、思わず言葉が詰まってしまう。けどそこでシュラが再び口を開いた。

「こいつとは前に一度揉めた事があるだけだ」

ただそれだけを伝えて、空いた席に着く。

シュラが本当に前世の事を覚えていたら、適当な証言で俺を反乱軍の人間だと断言し、今この場で処刑する事だって出来る筈なのに。この国はそれが通用してしまう程腐っているというのにそうしなかったこいつの意図を、俺には読み取る事ができなかった。

その後はナジェンダさんの機転によって気まずい空気が穏やかなものに変わり、俺と彼女は陛下との会話を食事を交えながら楽しんだ。

食事を終えた後も、この国や反乱軍についての難しい話などではなく、俺は最近あった事や本で読んだ面白話を彼に聞かせていた。だがシュラは警戒していたのか、終始俺の様子を窺うように視線を向けていたのがとても気になる。

そして気が付くと陽は落ち、俺とナジェンダさんは陛下達に改めて礼を伝えてから部屋を去って行く。

これで今日は帰ってから夕飯食って寝るだけ、と呑気に思っていたらナジェンダさんにこっぴどく説教された。…どんな叱られ方だったかはご想像にお任せしよう。俺はもうあんなに怒ったナジェンダさんを思い出したくない……。

――そんなこんながあって漸く帰ってきた時にはもう夜中だった。

完全に警戒を解いている状態で、自室の鍵を開けて入る。するとそこで、俺は信じられない光景を目にした。
「……人の部屋で何してんだてめぇ」
「あ?……ああ、やっと戻ってきたのか」
俺の部屋に居たのは、先程会ったシュラだった。しかしそれだけではなく、そいつはタンスを漁って俺の下着を手にしていた。
「随分と遅い帰りだったな、ナイトレイド。おかげで待ちくたびれたぜ」
手に持った下着をひらひらと振って煽るシュラ。
今はまだ設立されていない筈のナイトレイドという言葉を聞いて、やはりこいつも自分の前世の記憶を持っていると確信する。拷問してきたシュラと、そんな彼に屈伏したと見せかけて殺した自分……。お互いの最期に関わった者同士が再会してしまったこの運命を呪いたい。
「やっぱりてめぇも覚えていやがったか……。つーかそれ返せ。汚ぇ手で俺のに触んな!」
「へぇー、って事はマジで女になってんのかお前」
ニヤニヤと笑っているシュラにずかずかと近付いて自分の下着を奪い返す。
扉の鍵は閉めていたのにどうやって、と一瞬思ったが、開いた窓が視界に入り、そこから侵入してきたのだと悟る。
「一周目では世話になったなぁ、ナイトレイドの兄ちゃん……いや、今は姉ちゃんって呼んだ方がいいか?」
「どれもやめろ。で、何が目的だ?」
睨みながら要件だけを言えと促すと、シュラは口角を上げて顔を近付ける。
「ンなもん決まってるだろ?俺を殺した借り、返しに来てやったんだよ」
「はっ、その返品はお断りだね」
予想通りの返答に皮肉を返すが、額に伝わる冷ややかな汗を見て俺が強がっているのはバレているだろう。けれどそうしていなければ

こちらが挫けてしまいそうなのだ。
しかし気が付くと視界が反転し、俺は天井を見上げていた。
何が起こったのかわからず困惑しているとシュラが覆い被さり、俺の両手を片手で頭の上に押さえ付ける。その動作でシーツが擦れる音を聞いて、漸くベッドに押し倒された事を理解した。
「な、何しやがんだこの野郎ッ!!離せ!」
「くくっ、威勢だけは良いなぁ、ナイトレイドの姉ちゃん。でもその格好、結構そそるぜ」
そう言って舌舐めずりをする彼を見て、このままじゃこいつに犯されてしまうと直感する。
「つざけんな!!てめぇに犯されるくらいなら死んだ方がマシだ!」
「なら尚更身体の隅々まで犯して孕ませてやるよ。このシュラ様のガキを産めるんだ、感謝しな」
必死に抵抗するが、男女の力の差がそれを許してくれない。…いや、男だった時でも、非力な俺よりも圧倒的に力を持っていたシュラには敵わなかっただろう。
ならばと思って唯一動かせる脚で蹴りを繰り出そうとしたその瞬間、俺の唇にシュラのそれが当てられ……え?ちょっ、ちょっと待て!今こいつ何した!?俺が元男だとわかってるのにマジで犯す気なのかよ!?いやほんと待って、前世でもした事ないのにこんな……!俺のファーストキスがあああああぁ!!!
「ん…ふぁ……!」
内心では絶叫しながらも俺の身体が硬直してしまったのをいい事に、薄く開いた唇から舌を入れて口内を犯し始めるシュラ。
唾液の混ざる水音をわざとらしく立てられるのも相まって、初めて体験する甘い痺れにビクビクと身体が震え、口から熱っぽい息が漏れていく。
ヤバい…息ができない……。頭も真っ白になってきやがった……。
霧が掛かるように、俺の意識は朦朧としていた。けれどシュラは涼しげな表情で俺の口内を蹂躙し続ける。
力の入らない腕で彼の服を緩く引いて息ができないと訴えると、

やっと解放してくれた。
離れていくお互いの口から、もうどちらのものかわからない唾液が線を引く。それを拭う気力さえも既になくなってしまっていた俺は必死に空気を肺に送っていると、その様子を眺めていたシュラが今度は俺の服を胸の上まで捲り上げ、露になった双丘に手を伸ばす。
逃げなきゃ、という警告音が遠くなっていく。
もうどうにでもなれ……。そこから俺は、抵抗する意思を手離してしまった。

――翌朝。目が覚めた俺は、身体の怠さと腰の痛みを感じていた。
昨夜の事を思い出して勢い良く上半身を起こすと、そこにシュラの姿がない事に気付く。
ヤるだけヤって気が済んだのだろうか。しかし、前世では罪の無い者達にもっと残虐的な行為をしてきた彼が、何故これだけで満足したのかが理解できない。
「でも、あいつならまた何か仕掛けてくるに決まってるよな……って、あれ？」
シュラの復讐がこれで終わるわけがない、と落胆していると、剥ぎ取られていた筈の自分の衣服が丁寧に着せられている事に気が付いた。しかも、彼に汚されていた身体も綺麗に清められている。
……本当に、何が目的だったのか。何をしたくて何を考えているのか全くわからないやつだ。そう不思議に思いながら、俺は何事もなかったかのように身支度をしていつも通りの日常に戻っていった。

不法侵入者を斬る

シュラに襲われて以降、俺は仕事以外でも警戒するようになった。最近俺のストーカーみたいになってしまったエスデスもだが、主にシュラに対して。

そりゃそうだ。あんな事をされて怖がらないわけがない。ましてや俺は臆病者。警戒心の強さは誰にも負けていないつもりだ。

……けど、さすがにこれは想定外だった。

「……帝具使って人の部屋にまた不法侵入するとかズルいだろそれ」

「帝具を持っていないとは一言も言ってねぇだろ？」

シュラ曰く、次元方陣シャンバラはマーキングした場所なら好きな時に自由に行き来出来るらしい。

つまりこいつはこないだ来た時にこの部屋にシャンバラのマーキングをしていたから、扉と窓の鍵を閉めていてもまた入れたという事。おかげで今、俺はまたこいつに押し倒されてしまっている。

「なぁ、そういやなんで俺をあのまま放置しなかったんだ？」

ふと思い出して聞いてみた。

前世で散々見てきた帝都の裏では、性的虐待を受けた者達は使い捨てられるようにそのまま放置されているのに、前世でそれをやっていた一人のシュラが俺をヤった後に服まで着させてくれたなんて全く考えられなかった。もしかしたら何かを企んでいるのかもしれない。

「それはつまり使い捨てのゴミみてぇな扱いをして欲しかったって事か？」

「ちげぇよ!!お前がまた何か企んでるんじゃねーかって怪しんでるだけだっつーの！」

鼻で笑うシュラにビシィッ！と指を指す。

なんで俺が変態扱いされなきゃいけないんだ。男だった俺を知ってる上で襲ってきたこいつの方がよっぽど変態なのに。

「あれはお前の上司にバレねぇようにしただけだ。今のナジェンダの姉ちゃんにはまだ喧嘩を売る気はねぇからな」

「現役のナジェンダさんが怖いってか？へっ、女にビビるなんて格好

わりぃなシュラさんよ」
革命軍に入る頃よりも、パンプキンを使っている今のナジェンダさんの方が圧倒的に強い。そんな彼女との戦いを避けようとするシュラを嘲笑うと、彼は眉をピクリと動かした。
「つーか、元男を抱いて何が楽しいんだよこの変態」
「そんな男に抱かれて気持ち良さそうに腰振りながらエロい声出してたお前の方が変態だろ」
「〜っ!!」
理性がほとんど失っていた時の事を言われて、赤面してしまう。
するとシュラはニヤリと笑って俺の服を破き、下着も無理矢理剥いだ。自分の素肌がまた晒されて、あの夜に味わった羞恥と屈辱、そして恐怖が脳裏に甦る。
「や、…さ、触んな!っ、…ひ、ぁ!」
俺の胸を直に触って弄び始めるシュラに胸の飾りを強く摘まれ、身体がビクリと揺れてしまう。
「胸だけでもうイきそうか?」
「ち、がっ……あぅっ…!」
「こないだもそう言って何度もイきまくってただろうがこの淫乱野郎」
嫌でも反応してしまう自分の身体が心底憎たらしい。
きっと、シュラはあえてゆっくりこうして弄ぶ事で、いっその事殺して欲しいくらいの屈辱と恐怖を俺に与えているんだと思う。そしてその思惑通りになってしまっている自分自身も物凄く悔しい。
「ラバック…だっけか?お前、どうせならこのまま反乱軍につかねぇで帝国(こっち)につけよ」
「!?」
急にそんな事を言われて、一瞬目を見開く。自分を殺した敵を誘うなど、こいつは一体何を考えているのだろうか。
「……断ったら?」
「少なくともまたこのまま犯す。てめぇがぶっ壊れるくらいにな。淫乱なお前にとっては嬉しい事だろ?」

恐らく、断らなくてもまたこいつにヤられてしまうのだろう。でもどちらにせよ、答えは一つだけ。
「全ッッッ然、嬉しくないね!!」
これ以上こいつの好きにはさせたくない俺は今度こそ脚をシュラに目掛けて蹴り上げ、腹部に膝を当てる。が、鍛え上げられていた彼の肉体には全く利いていなかった。
「い!?き、利いてねぇ…!?」
「こんな細い脚でこの俺様に勝てるとでも思ったのかよ?」
鳩尾を狙ったつもりだったが、どうやら外してしまったらしい。そしてシュラは蹴り上げた俺の脚を掴んで拘束し、腰のベルトに手を掛けた。
「ま、待ってくれ!マジで子供が出来たらどうすんだよ!?俺はそんなの絶対にごめんだぞ!」
酷く怯えた表情で、運悪くこいつの子供を孕んでしまうかもしれないのは絶対に嫌だと訴える。だが、
「そン時はお前を俺の正妻にしてやるよ。そうすりゃ毎晩可愛がってやるし、お前は大臣の義娘になって楽に暮らせる。悪くねぇ話だろ?」
愉快そうに笑うシュラの言葉に耳を疑う。俺にはこいつが今何を言ったのかを一瞬では理解出来なかった。
「し、正気かよお前!?男だったって事知ってるだろ!?それに、俺はお前を殺したんだぞ!?」
「その恨みは当然まだあるけどよ。お前の顔、よく見ると俺好みだから意外と気に入ってるぜ?」
そう言って頬に触れてくるシュラに、不覚にもドキリとしてしまう。
しかしそこで、部屋の扉が突然開いた。
「ラバ、少し話をしたいん、だ…が……」
ノックもせずに入ってきたのは、ナジェンダさんだった。
唐突過ぎる彼女の登場で、俺とシュラは思わず硬直してしまう。そして服を破かれた俺がシュラに押し倒されているという状況に、ナ

ジェンダさんも固まっていた。
「……お前達、何をやってるんだ？」
「こいつに襲われてました助けて下さい！」
　困惑しているナジェンダさんに迷わず即答した俺に、シュラは「そんなサラッとバラすか!?」と言いたげに驚いた顔をしていたが、そんな事はどうでもいい。今はナジェンダさんという救世主が現れた事に心の底から感謝しているのだから。
「シュラ殿。大臣の息子である貴方が相手であろうと、私の部下を襲ったこの罪は重いですよ…？」
　下を向いて何かユラユラとしたオーラのようなものを纏うように見えるナジェンダさんを目にした俺達の顔色が、サァーッと青褪めていく。
　すると彼女は、背負っていた帝具、浪漫砲台パンプキンを手に取った。
「ま、待てよナジェンダの姉ちゃん。これは偶然転んでだな……」
「では何故ラバックの服が破かれ、下着もそこに捨てられているのですか？」
「そ、それは……」
　苦し紛れの言い訳に効果など全くある筈もなく、俺の格好が動かぬ証拠だと言うナジェンダさんの正論に言い返す言葉も無いシュラは狼狽える。するとその瞬間、
　ドォーーーーンッッッ!!!
　轟音が鳴り響いた直後、外の微風が部屋に入り込む。
　何が起こったのかを手短に説明すると、シュラの頭上に大きな衝撃波が通って行き、俺の部屋の壁が破壊されたのだ。そしてその衝撃波の正体はお察しの通り、パンプキンで放たれたナジェンダさんの精神エネルギーである。
　うわぁ……ナジェンダさんがマジでキレてる……。
　遠い目をしている俺はかなりビビっている。だってあれは、本気で相手を殺しに掛かっている殺し屋の目なのだから。
「今すぐにラバックから離れて下さい、シュラ殿。でないと次は……

当てますよ？」
ガチャリと構え直して冷たい声色で脅す彼女に従い、シュラはすぐに俺から離れて行く。
引き吊った顔にダラダラと大量の汗を流しているのは実に滑稽だと思うが、ナジェンダさんが怖過ぎて笑えない。
「無事かラバ!?」
「は、はい。今はなんとか……」
パッといつもの表情に戻って手を差し出すナジェンダさんの様子にホッとする。
その手を握って起き上がらせてもらうと、将軍である彼女がよく使っているコートを俺の肩に掛けてくれた。
「怖かっただろう。だが、私が来たからにはもう大丈夫だからな」
そう言いながらギュッと抱き締めて安心させるように俺の頭を撫でるナジェンダさんのイケメン対応に、思わずキュンとして頬を紅潮させる。
最初からわかっていた事だけど、やっぱりナジェンダさんが男だったら確実にまた落ちてたな、これは。
長年秘めていたあの感情が再び芽生え掛けていたところで、背後から視線を感じた。横目でそれを確認してみると、シュラがジト目でこちらを見ていた。
「こないだは俺に抱き付きながらエロい台詞言って煽った癖に、もう他の奴に浮気すんのかよ」
「〜ッ!?う、浮気も何も俺はお前の彼女になった覚えはねぇよ!!それにあれはヤってる最中の……！」
真っ赤な顔で途中まで言い掛けてしまってからハッとし、自分の口を塞ぐ。
ナジェンダさんにだけは知られたくなかった事を知られてしまった。幻滅されてしまっただろうかと恐る恐る様子を窺うと、彼女はわなわなと肩を揺らしていた。
「貴様……付き合ってもいないラバックを無理矢理抱いたというのか…？いや、例え付き合っていたとしても……いくらラバックが可愛い

からとはいえど、こんなゲス野郎との交際は絶対に許さん!!」
その一声と共にパンプキンの衝撃波が再び走る。それはシュラの真横を掠めて行き、彼の頬には血が伝わっていく。
幻滅されるかもしれない、という心配は杞憂だったらしい。むしろナジェンダさんは俺達が合意の上で行為をしていたとは一切思っておらず、俺が最初に言った助けを求める声を信じてくれていた。
でもやっぱり怖過ぎる……!!
怒りの矛先がこちらに向けられているわけでもない筈なのに、身の危険を感じた気がした。
これは逃げるわけではなくナジェンダさんの邪魔をしない為だと自分に言い訳してそろりそろりと後ずさり、開いたままの扉から部屋を退出して何事もなかったかのように閉める。これでよし、と一人で安堵していると、室内からシュラの叫び声が聞こえてきた。
ああ、俺の部屋が……。
悲鳴と一緒に聞こえる破壊音。それは俺の部屋が壊れていく音だ。
あれではもう私室として活用出来ないであろう。そしてその室内に残してしまった家具や衣類、本などの自分の私物達も既に塵にされてしまっているのだと思う……。だから俺は涙目で、たくさんの思い出が詰まったその部屋に感謝と別れを告げた。
でもこっそり部屋を出たのは正解だったかもしれない。じゃないときっと今頃、自分もパンプキンの砲撃に巻き込まれていたに違いない。
「はぁ……これからどこで寝泊まりするべきかな……」
溜め息を吐いてからその場を立ち去る。この破けた服も早くどうにかしないとなぁ、と悩みながら早足で廊下の曲がり角を曲がると、ドンッ!と正面から誰かにぶつかった。
こんな時に誰だよ。少女漫画みたいなシチュエーションなのに相手が可愛い女の子じゃなくておっさんだとかそういう展開だったら大声で文句言ってやるぞこら。
けどもし女の子だったらという淡い期待を抱いて、少しでも愛想良く振る舞おうとする。

「いたた……す、すみませ……」
　顔を上げた俺は絶句した。何故かって？そりゃあ、ぶつかった相手は女の子じゃなくて美女だけど……。でも俺的にはなるべく会いたくない超級危険人物だったからだよ。
「ラバック…！こんな場所で会うとは奇遇だな！」
「あ、あはは……そ、そうデスネ」
　パァーッ！と明るい笑顔を浮かべて俺を抱き締めたのは、俺の悩みの種の一つ、エスデス将軍だった。これはまた会うとろくな事がない奴に遭遇してしまった。
「なんでエスデス将軍がこんなところに……？」
「む？ああ、先程この先から爆発音が聞こえたからな。賊ならば捕まえて新しい拷問を試そうかと思っていたんだ」
『賊＝シュラ』と変換した俺は間違ってないと思う。……爆発音はナジェンダさんの仕業だけど。
「だがこうしてお前に会えたのならそれはもうどうでも良い。ナジェンダかブドーにでも任せるとしよう。それより、ラバックこそここで何をしているのだ？」
　そのナジェンダさんが犯人です、なんて当然言えるわけがなく、
「えっと…俺の部屋がその爆発に巻き込まれたみたいでして……。そのせいで壁がなくなったから、これからどこで宿泊しようかなぁと……」
　自分の格好については触れず、苦笑しながらそれだけを伝えると、エスデスは考える仕草をしていた。かと思えば、何かを閃いたように手を叩いた。
「それなら暫く私の部屋に泊まるというのはどうだ？それに事情は知らんが、その格好もさすがにどうにかしないといかんからな。お前の服もすぐに用意してやるぞ！」
「へ!?」
　嬉々として返事を待たずに俺を横抱き……俗に言うお姫様抱っこをするエスデス。俺が小柄とはいえ、女性に軽々と持ち上げられた事にも驚く。

そして呆気に取られつつ困惑する俺は抵抗すらも出来ず、上機嫌な彼女に連れ去られてしまったのだった。

誘拐を斬る

エスデスに誘ｋ……連れて行かれた俺は、部屋に着いた途端にシャワーを勧められたので有難く借りさせてもらった。
「本当は私も一緒に入ってやりたいところだが、その間にお前のサイズに合う服を用意しないといかんから残念だ」
と脱衣所に行く直前に言われた時は正直ホッとした。彼女とまた一緒に入るのは心臓に悪いからなるべく遠慮したい。でも……。
「うむ！良く似合っているぞ、ラバック！」
「……アリガトウゴザイマス」
エスデスが用意してくれたのは、可愛らしいメイド服……しかもミニスカである。
いやいやいや！なんでメイド服!?任務で女装した経験は一応あるけどさ……けどあれは私服の上だったおかげでまだ耐えられただけだから！
太股に空気が触れる違和感が気持ち悪くて、短いスカートの端を両手で掴みながら思わずもじもじと脚同士を擦り合わせるようにする。
つかさっき言い忘れてたのになんで俺のスリーサイズ知ってるのこの人!?俺言ってないよね!?知ってるのはナジェンダさんだけだった筈なんだけど!?
気付いてしまった謎に悪寒を感じた。更に言うと下着のサイズも上下どちらもピッタリだ。この人マジでストーカーなんじゃないかって嫌でも疑ってしまう……。
「しかし、まだ何かが足りないな……」
ふむ、と顎に手を添えるエスデス。
これ以上何を足すっていうんだよ。頼むからもう勘弁してくれ……。
「ああ、そうだ。これがなかったのか」
カチャリ。
「え」
その音は俺の首辺りから聞こえたので触って確認してみると、そこ

にあったのはエスデスが手に持つ鎖に繋がっているベルトのような首輪だった。
「よし、これで完璧だな！」
「何が!?全然良くないですよねこれ!?なんで首輪!?」
満足気にふふんと胸を張るエスデス。俺は必死に首輪を外そうとするが、ビクともしない。
もしかしてこれから忠犬になって奉仕しろとかそういうプレイをさせられるのか…？だからメイド服を!?流石ドS…考えてる事がヤバ過ぎる……!!あとこれなんかデジャヴ感じるんだけど！
持ち前の想像力を発揮しながら思い出していたのは、タツミがエスデス主催の都民武芸試合に出場した時の光景だ。
「これでお前を逃がしてしまう心配はなくなったな。これからは我が家のようにここで暮らすがいい」
心底嬉しそうに両肩をポンと掴まれて、室内に謎の穏やかな空気が流れた。
あー…これ監禁ってやつっすか……じなくて！
「こんなのがあったら仕事が出来ないじゃないですか！俺明日も任務があるんですよ!?」
若干納得してから首輪を外してくれと訴える。
少しでも仕事をサボったら後々起こる何かの伏線が無くなるかもしれない…。そうなると自分が知っている未来からまた脱線して後から行動し辛くなってしまう。しかしエスデスは、
「ああ、それなら安心しろ。ナジェンダにはラバックは私が頂いたと伝えておくからな」
「それむしろ火種を撒く行為だろ！安心出来る要素皆無だからな!?不安しかねぇよ！」
「何をそんなムキになっている？お前は私と一緒に居て嬉しくないのか？」
「あっ！いやその……エスデス将軍のご厚意は有難いんですけど、やっぱり俺はナジェンダさんの部下なので……」
本気なのか冗談なのか全くわからない発言に思わず私語でツッコ

んでしまったのを反省しつつ、ここから逃げるチャンスを窺う。
流石にこのまま居候してしまうのは色々と問題が起きてしまう。美女との添い寝……あの豊満な胸に飛び込んで最高の気持ちで眠れる可能性があるのはとても魅力的だけど、耐えろ俺。我慢するんだ。
「まだそれを言うか。ナジェンダの部下など辞めて、私の下に来ればいいといつも言っているだろう？」
エスデスが放った言葉は、もう聞き飽きた誘い文句。けれど、
「っ、俺はあの人に憧れてここに入ったんだ！いくらあんたの頼みでも、これだけは絶対に譲らないつもりだ！」
『簡単な事だろ』と言われた気がして、つい感情的になる。
ナジェンダさんに一目惚れして志願した帝国兵士。俺はあの人に一生着いて行くと幼いながらに決意したから逆行した今もここに居るんだ。それなのに彼女を裏切るような事をしたら、自分自身を否定するのと同じだ。
声を荒げて反抗すると、目を細めたエスデスが鎖を引き、それに繋がった首輪を付けられている俺は彼女に抱き付くような姿勢になってしまった。
「勘違いするな。私がお前を従わせるんだ。貴様に拒否権はない」
「ッ!!」
見上げた先に現れたのは、文字通り氷のような冷たい目。逃がさないと言うようにその瞳に映された俺はゾクリとする。
ここで動いたら死ぬと直感してしまう程、その迫力は凄まじかった。でも、殺されるかもしれないと理解していても、この女には例え演技でも屈したくはない。
「……ふふっ、やはりお前は私から目を逸らそうとはしないのだな」
「……えっ？」
突然、エスデスは鎖を引いていた手を緩めて愉快そうに笑う。でもその笑みと言葉の意味は俺にはわからなかった。
「帝国最強と呼ばれている私の前では、皆恐れてすぐに逃げ出そうとしてしまうからな。そんな弱者に興味は無いが、お前のように反抗する者は従わせ甲斐があって好きだぞ」

今、エスデスに気に入られてしまった理由が漸くわかった気がする。彼女が気に入ったのは、俺の反抗の目。簡単には屈しないその目が、エスデスのドS心をくすぐらせてしまっていたらしい。
なるほどね…。つまりエスデスは、方向性はまた少し違うけど、シュラと同じで俺の事を新しい玩具みたいに思ってるってわけか……。
バカにされている。そんな憤りを感じながらも、こいつ等から見たらバカにされるのは当然かと冷静に思っている自分もいる。
「それに……お前の目には時折、ただの兵士とは思えん殺意が宿されているように感じる」
エスデスは心の奥を覗くように、真意を確かめるように真剣な目で俺の瞳を見つめていた。
ナイトレイドでは後方支援担当だったが、どうやら俺の暗殺者の名は伊達ではなかったようだ。
「最初は私と同じで危険種を狩って生きてきたのかと思っていたが、調べてみたところ、地方の大商人の娘であるお前にそんな経歴はなかった。……ラバック、貴様は一体何者なんだ？」
「……」
核心を突くようなエスデスの質問。
まさか殺気だけでここまで怪しまれていたとは思ってもいなかった。なんと答えるべきか。どう誤魔化せば彼女を納得させられるだろうか……。いくら考えても思い付かなかった俺は口を閉ざし、沈黙が部屋を包む。
「……答えるつもりはない、か…。まぁ良い、それはまたの機会に聞かせて貰おう」
意外とすんなりと今のところは諦めてくれたらしく、俺は緊張で詰まっていた息を吐き出した。
「仕方ないから仕事がある時間は自由にさせてやる。その代わり、ちゃんとここに帰って来ると約束しろ。でないと……」
「あーもう！わかりましたよ！ここに居候すればいいんでしょ!?」
それ以上は聞きたくないと耳を塞いで了承すると、エスデスは「わ

かれば宜しい」と言って頷いていた。
「あと、いい加減この首輪を外してくれませんか…？邪魔過ぎてまともに生活出来ませんから……」
「ふむ、確かにそれもそうだな…。逃げないと約束もしたならばまぁ良しとしてやるか……」
なんとか納得してくれた様子のエスデスは少し残念そうな表情で首輪を外してくれた。
首を圧迫する息苦しさからやっと解放されて、安堵する。これでペット生活は回避出来た…と信じたい。
「あ、そういえば裁縫道具とかってここにあります？」
「む？まさかあれを縫うというのか？」
メイド服姿のままでいるのは流石に嫌なので、シュラに破かれた服を縫ってそれを着直そうと考えた。
かなり豪快に裂かれてるけど、時間さえあれば完璧とは言えずとも直せる筈だ。それに、俺は糸の扱いには結構自信があるからね。
「そうだな…ここにそんな物は無いが、リヴァにでも訊いてみるか……。少しの間そこで待ってろ」
そう告げたエスデスは私服のまま部屋を出て行った。
彼女の口から出た名前に聞き覚えがあるなと考えてから、ブラートさんを殺った人物だとすぐに思い出す。
俺の記憶が正しければ、そいつは確か三獣士の一人だ。顔や素性はよく知らないが、タツミから聞いた話だとブラートさんの昔の上司…しかも将軍だったらしいとかなんとか……。そりゃ強いわけだ。
本当は近い内に一人で居るところを狙って殺してやりたいけど、勝てる算段が一つも無い今は何もしない方がいい。臆病な俺ならそれくらいわかるだろ？だからこの殺意は抑えろ。
「……仕方ねぇ。手を出せない代わりに情報集めでもやっとこうかな」
一人で呟いてから、改めてエスデスの部屋を見回す。こうして見るとやはり将軍の私室というのは無駄に広いなと思う。
すると俺は綺麗に整頓されているように見える彼女のデスクに目

をつけた。
「チッ、流石に用心深いか…」
デスクの上は片付けてあったので引出しを開けようとしたが、鍵が掛かっている。
オネスト大臣と手を組んでいるエスデスなら、大臣から何か大事な資料などを渡されていてもおかしくはないと考えてここを探してみたが、今調べられる範囲内にはそれらしきものは一つも見当たらなかった。
「ま、そう簡単には見付からねぇよな……ん？」
デスクから視線を落とすと、一枚の紙が落ちている事に気が付く。開いた窓から入ってきた風で飛んでしまったのだろうか。
落ちていた紙を屈んで拾ってみると、それは何かの資料のようだった。
「南西の鎮圧……って、これもしかしてバン族の資料か!?」
帝国に反旗を翻したバン族を鎮圧する為に派遣された遠征軍が劣勢だという報告書がエスデスの私室にある。という事は、そろそろナジェンダさんが帝国に失望する時期が訪れる。彼女の離反もそう遠くはない。
「危ねぇ…寄り道し過ぎたせいでこっちに通達が来るまで気付くのが遅れるところだったぜ……」
早くエスデスの目を欺いて、自分の死亡記録の偽装準備をするべきだ。前世ではナジェンダさんと同じタイミングで離反出来なかったが、今度こそ同行して彼女を守らねば…。
そう考えていると部屋の扉が開き、その音にギクリと肩を揺らす。
「待たせたなラバック。……ん？そこで何をしているんだ？」
「い、いえ！落ちてた紙を見付けたので、大事な書類ならちゃんと戻さなきゃと思って……」
「む？いつの間に落としてしまっていたのか…。それはすまなかったな」
急いで立ち上がって手に持ったままだった報告書をエスデスに返す。それと同時に、エスデスから俺が頼んだ裁縫道具が手渡された。

礼を告げてベッドの縁に座ってから借りた針と糸の状態を確認し、破れた服を早速縫い始めると、エスデスが「ほう」と感心の声を上げる。

けどそれだけではなく、彼女は俺の隣に座って肩にピッタリとくっついていた。なんだか恋人みたいで一瞬胸が高鳴ってしまうが、こんなやり取りを続けられるとしたらそう簡単には逃げ出せないだろう。

今日はなんか色々あり過ぎてもう疲れた……。今すぐに寝たいけど、こんな格好で寝るなんて絶対にごめんだ。早くこれを直して着替えないと……。

服を縫う手を止めずに溜め息を吐いて、これから暫く続くであろう軟禁生活からの脱出方法と、俺の離反作戦は明日考える事にした。

――翌朝。俺はエスデスの柔らかい胸の中で死に掛けていた。

願望通りにふくよかな胸に顔を沈められた時はもう死んでもいいと思える程幸せな気分で寝たけど、息が出来ない。冗談抜きで死ぬ。

前世でこんな体験をしていた年上キラーことタツミから相談を受けていた俺は幸せな悩みだなと心底妬んでいたが、なるほど、こりゃ困るわ……。

人助けを斬る

「本ッッッ当にすまなかった!!」
「だ、だからもういいですってば！お願いですから顔を上げて下さいナジェンダさんっ!!」
　起床したエスデスに一言伝えてから、心配しているであろうナジェンダさんにコートを返して謝罪もする為に彼女の執務室に行ったら、逆に頭を下げられてしまった。
　俺の部屋を荒らしてしまった事に対して何度も謝る上司の姿を見ていられない俺は、急いで話題を変えようとする。
「そ、それよりも！昨日は俺に何か用事があったんですよね？」
「あ、ああ…そうだったな……。取り乱してすまない」
　漸く顔を上げてくれたナジェンダさんは、コホン、と咳払いをして自分の失態を誤魔化す。
「仕事とは全く関係はないんだが……最近お前の様子がおかしかったから直接聞こうと思ってな」
「えっ、俺なんか変でした？」
「ああ。陛下達との食事会以降、任務以外でも何かに怯えるように警戒していたぞ。……まさか、あの後からあのゲス野郎に脅されていたのか…？」
　さ、流石ナジェンダさん……勘が鋭いな。
「ま、まぁ……そんな感じ、ですね」
「やはりそうだったか…！くっ、ブドー大将軍に邪魔されていなければ昨日の内に抹殺出来たというのに……!!」
　悔しそうにダンッ！と机に拳を叩き付けたナジェンダさん。エスデスのせいで若干忘れ掛けてたけど、昨日の恐怖を思い出して少し身震いする。
　気持ちは物凄く嬉しいんだけど、また暴れる気かこの人……。でも、それよりもその頭に巻かれている包帯とかを見てるとこっちが心配してしまう。
「そういえば、昨夜はどこで寝ていたんだ？一人で野宿なんてしてい

ないだろうな？」
「任務でもないのに寒空の下での野営なんてしませんよ…。今はエスデス将軍に捕まって強制的に軟禁生活みたいなのをさせられてます」
「は…？」
溜め息を吐いて今の困った状況を話すと、ナジェンダさんはポカン、とした顔をしていた。

――とまぁ今回も色々あって、鬼の形相でナジェンダさんが急いで俺の新しい部屋の手配をしてくれると言ってくれて、午前中の任務も早めに終わらせた午後。
「……なんでこんなに不運が続くんだろうな、俺は……」
エスデスの部屋にはまだ戻りたくないと思い、一緒に任務を行っていた同僚達との解散後に帝都の街を彷徨いていたら、路地裏でいかにも頭の悪そうなチンピラ達に絡まれてしまった。
と言っても、涙目で助けを求める一人の小さい女の子を、そいつらが大勢で囲んでいたから俺が声を掛けた、というのが正しいんだが。
昔は他人相手ならこういうのに関わりたがらないタイプだったけど、前世でナジェンダさんやナイトレイドのみんなと一緒にいる内に俺も随分とお人好しになったもんだ。特に、あの中で一番正義感のあるタツミからの影響が強いんだと思う。
「なんだぁ？この姉ちゃん。俺等に何か用でもあンのかぁ？」
「その格好、帝国軍か？こりゃちょうどいい。よく見たら可愛い面してるし、こいつの服全部剥いで可愛がってから帝都で悪名を上げてやるぜ」
あー……ちょっと訂正。頭悪そうじゃなくて、こいつ等完璧にバカだ。ここまでわかりやすいバカはそうそう居ないな。定番なモブキャラ過ぎて危機感全く感じねぇわ。
「顔に傷は付けんなよお前等ぁ！」
剣を握りながらそう叫んで突っ込んで来るチンピラその1……モブAとでも名付けよう。

しかし単調過ぎるその攻撃は横に半歩下がって重心を傾けるだけで回避出来た。
「帝都で悪名を上げたいならもっと腕を磨くんだな、ロリコン共」
すぐに振り返ってモブAに剣を振るう。でも殺しはしない。鞘に入れたまま打撃を与えただけだ。
その後も残りの数人が飛び掛かって来たが、軽くあしらってやった。先輩兵士達から真面目に剣を習って正解だったぜ。
全員が倒れたのを確認してから、呆気に取られた様子の少女の側に屈む。
「もう怖がらなくても大丈夫だぜ。立てるか？」
「う、うん……ありがとう、お姉ちゃんっ」
やっぱり怖かったのか、涙目のまま飛び付く女の子。
パッと見た感じだと、恐らく5～6歳くらいの年齢だろう。俺にしがみ付いて泣きじゃくるその少女の背中を擦って宥めるけれど、なかなか泣き止んでくれる様子はないみたいだ。
どうしたもんだか、と悩んでいたその時。背後から殺気を感じた。
泣き続ける女の子に気を取られて気付くのが一瞬だけ遅れてしまった俺は、その子だけは守ろうと咄嗟に庇う体勢になる。しかし、
「ぐはっ!?」
その呻きは俺の声ではなく、男の声だった。では誰の声なのか？それを確かめる為に後ろを振り向くと、そこに居たのは……。
「雑魚が俺の玩具に手ぇ出してンじゃねぇよ」
「シ、シュラ!?」
目の前に立っていたのは、俺の一番嫌いな相手、シュラ。そして先程の呻き声の正体は、そいつの足下に倒れている男。さっきのチンピラの一人だ。
「なんでお前がここにいるんだよ!?」
「あ？助けてやったのにその態度かよ」
「うぐっ、……ま、まぁ一応感謝はしといてやる」
こいつに礼なんて言いたくないけど、確かに助けてもらったのは間違いないから渋々感謝する。でもなんか変な萌えキャラみたいな口

調になってしまったのがかなり恥ずかしい。
　グイッ、と裾を引かれたのをきっかけに、女の子へと目を向ける。するとその子は潤んだ目で今にもまた泣き出しそうになっていた。
「だ、大丈夫！この悪党面の兄ちゃんは大丈夫だから！ほんとはロリコンかもしれないけど泣かないでっ！」
「あぁ⁉誰が…～～～ッ!!何しやがるンだてめぇ!!」
「お前が喋ると余計に怖がっちまうから黙ってろ!!」
　足をグッと踏み付けてシュラを黙らせてから、慌てて少女を再び慰める。
「あ、そうだ！君、名前は？お父さんとお母さんはいる？」
「うっ、…ひっぐ……、ルミ…っ、…。ママ、いるけど…どこにいるか、わかんない……っ」
　嗚咽しながら言葉を紡いでくれた女の子、ルミちゃんは母親とはぐれてしまった迷子らしい。
　恐らくさっきのチンピラ共は、まだ幼い彼女が一人でいたから襲おうとしたのだろう。そう考えるだけで、返吐が出そうだ。
「んじゃあ、俺とこの兄ちゃんも手伝うから、一緒にママを探そう？」
　ルミちゃんの頭を撫でる俺の発言に、シュラがギョッとする。
「はぁ!?なんでこの俺がこんなガキの親探しなんか……」
「どうせ暇だからここに居たんだろ？なら手伝えよ、おにーさん？」
　悪戯っぽく笑うと、暇だったのが図星だったのか、シュラはぐっと狼狽えた。
「よし、決まりだ！ほら、この子が周り見やすくなるように肩車してやれよ」
「勝手に決めんな！誰がそんな事……」
　ルミちゃんを抱き上げてシュラに近付けると、彼の顔が怖いのかまたうるうるとし始めた。
「あーくそッ!!やりゃいいんだろ!?いちいち人の顔見て泣くんじゃねぇよこのくそガキ!!」
「だから怖がらせるなっつってンだろうがこの悪党面!!」
　泣かれた事に苛立って怒鳴ったシュラの脛を蹴る。そしてそれに

よって蹲るシュラの肩に、俺はルミちゃんを乗せてやった。
「〜っ、後で泣かせてやるから覚えとけよこの野郎…！」
「はいはい、ベタな捨て台詞はいいからさっさと立てよお兄さん」
「ンだとてめ…っぐ⁉」
シュラが勢い良く立ち上がると、怖がって目を瞑ったままのルミちゃんが彼の髪を強く握って引いていた。……内心ざまぁみろと思ったのは内緒だ。
「ルミちゃん、怖いかもしれないけど、この方が君のママが見付かると思うから、一緒に頑張って探そ？」
帝都の人混みの中じゃあ、背の低いルミちゃんは自分の母親を探せない。だから少しでも彼女が周りを見渡せるように、背の高いシュラに肩車をさせたのだ。
それが不満だと言うような表情をしているシュラが俺を睨んでいたが、キッと睨み返して再び黙らせる。
そして俺の言葉に頷いたルミちゃんは、恐る恐る瞼を開けた。
「わーっ！高いっ！お兄ちゃんおっきいから遠くまで見えるっ！」
余計に怖がってしまうのではと少し心配だったけれど、むしろ初めて見る高い視線の光景にキャッキャッと喜んでくれているようだ。
喜ぶ彼女に相槌を打ちつつ、「あんまり髪を引っ張らないであげてね」と優しく注意をしておくと、ルミちゃんは元気良く返事をしてからシュラに「ごめんね」と謝る。
「…ちっ、暴れたりしたらすぐに落としてやるからな」
そう言ってルミちゃんを肩車したままの状態で先を歩いて行くシュラ。渋々でも了承してくれた事が意外過ぎて、俺はついキョトンとした顔をしてしまう。
もしかして、純粋な笑顔を見せるルミちゃんに毒気を抜かれたのだろうか。
……けど、もしそうだとしても、こいつが悪人だという事実は変わらない。前世で彼が行ってきた数々の悪行は、絶対に許される事ではないから。

噂話を斬る

私の名はナジェンダ。まだ２０代前半と若いが、帝国の数少ない女将軍だ。

そんな私は先日、大事な部下の一人であるラバックの部屋を荒らしてしまって深く反省し、大至急、空いている個室の手配を急いでいた。

もちろん、いくら彼女がとても優秀な部下でも、そして私が彼女の事を妹のように可愛がっていても、広い部屋を与えるなどといった贔屓はしない。

……本当なら、もっとセキュリティの強い部屋を用意してやりたいところだがな。

まぁそれはともかく。ただでさえ足りない個室を用意するのは、今も今後も新しく入隊し続ける兵達の分も考えると、なかなか難しい。要するに、毎日のように職務に追われている身でもある私は今、大苦戦中なのである。

「大臣の息子が居なければ、こんな事にはならなかったのだがな……」

はぁ、と執務室で一人溜め息を吐き、椅子の背に身体を預ける。

部屋を破壊してしまったのは私の責任だが、これも全て、私の可愛い部下に手を出したあのゲス野郎のせいだ。

私が陛下達との食事にラバを誘わなければ、きっとあの二人は出会わずに……ん？いや待てよ？確か元々知り合いだったとか言っていたか？……もしかして、本当はもっと前から肉体関係を持ってしまっていたのでは……？

そう考えていたところで小さなノック音が聞こえ、すぐに入室を促す。

「ナジェンダ将軍、先日の任務の報告書、纏まったので確認をお願いします」

「ああ、ありがとう。ご苦労だったな」

短い会話を交わして報告書を渡してくれたのは、私の副官だ。そして重ねられた紙を一枚ずつ捲って目を通していると、突然彼の口が開いた。

「そういえば、ラバックは今不在ですか？」
「ん？任務から帰ってきたという報告はまだないが……それがどうかしたか？」
「あ、いえ。さっきすれ違った兵から聞いた話なんですけど、その……」
そこまで言って、彼は「話して大丈夫だろうか？」と小さく呟きながら言い淀む。けれど私が視線で催促すると、少し呆れたような様子で続きを話してくれた。
「あいつ、何故か大臣のご子息と一緒に子供を連れて街中を歩いてたらしいんですよ。あと、その彼が子供を肩車して、ラバとも仲良さげに話していた、とか……」
副官の言葉が途切れたところで、ガタリと大きな音を立てて席を立つ。
「あのゲス野郎おおおおおぉッ!!!」
まだ10代半ばのラバを……いやまさか、ラバが軍に所属するよりもっと前から手籠めにして子供を孕ませていたというのか……!?しかもおしどり夫婦のようにイチャついていただと!?許さん…絶対に許さんぞ!!
ラバックがシュラと仲良さげに話す光景を想像すると、まるで自分の娘が奪われたかのような怒りが芽生えてくる。今なら愛娘を溺愛する世の中の父親の気持ちがよくわかる。これは相手に殺意が沸いてもおかしくはない。
コートに袖を通してからパンプキンを背負い、職務を放棄する私を呼び止めようとした副官に後を頼んで（頼んだというより押し付けた）執務室を飛び出す。
早くラバックを探して、真偽を確かめなければ。
相手は女癖が悪く、強姦魔としても有名な男。私としてはすぐにでも引き剥がしてやりたい。
だが、もし噂通りに二人の仲が良く、ラバが自分で決めた相手だと言ったら？私は彼女を応援するべきなのだろうか？
内心でそう悩みながらも、私の足は止まらずに歩き、ラバックが世

話になっている（ラバ曰く軟禁されているらしいが）エスデスの部屋に訪れた。
2、3回程扉を叩いてノックをすると、返事はすぐにきた。
「ラバック？やっと帰ってき……なんだ、ナジェンダか」
「私で悪かったな」
明るい笑顔で扉を開けてくれたエスデスは、私の顔を見た途端に沈んでいくように残念そうな表情をした。それに対して、少しムッとしてしまった私はちょっと大人げなかったかもしれない。
「ラバと勘違いした、という事は、こちらにもまだ戻ってきていないのだな……」
「それは確かにそうだが…なんだ？まさか、ラバックの身に何かあったというのか!?」
エスデスが私の両肩を掴み、前後に揺らす。ドSの彼女らしい狂気染みた笑顔などはよく見ているが、ここまで動揺する姿を見るのは初めてな気がする。
それだけラバックの事を気に掛けてくれているのかと思うと、彼女の上司としては喜ばしい。……軟禁をするなど、行き過ぎたところに関してはかなり問題があるが。
しかしこうなると、はぐらかすのは難しいだろう。なので先程聞いた噂話をエスデスにも話してみた。
「そんなバカな……！ラバックがあの年で大臣の孫となる子供を授かっていたというのか!?」
「あまり大声を出すな。あくまで噂だ。鵜呑みにし過ぎるのもあまり良くないが、どこまでが真実なのやら……。私はもう一度ラバを探すつもりだが、お前はどうする？」
「行くに決まっているだろう。この私が断るとでも思ったのか？貴様」
「ふっ……やはりな。お前ならそう答えると信じていた」
珍しい組み合わせだが、今ここに、噂の真偽を確かめる為だけに二人の女将軍が手を組んだ。
普段はラバックを巡って言い争いをする事が多いが、一時休戦。彼

女を挟んで争っているが故に、今だけは難なく意見が合致した。
「それでエスデスよ、大臣の息子を見付けたらどうする？」
「む？私はお前の話を聞いた瞬間から、私のラバックを横取りしたそいつを殺す勢いで拷問するつもりだが？」
……相変わらず恐ろしい事を簡単にやろうと言える奴だな、こいつは。
「いや、もしもラバックが自分で決めた相手だとしたら、彼女の幸せの為にも応援するべきなのだろうかと思ってな……」
「何を言っているのだ貴様は。相変わらず頭が固いな」
こっちは真剣に悩んでいるというのにバカを見るような目で言われて、流石にちょっとカチンとくる。
「ラバックが大臣の息子をどう思っていようと関係無い。例え奴の事を想っていたとしても、そいつからラバックを奪ってやるのもなかなか燃えるだろ？」
……時々、こうして割り切っている彼女が少しばかり羨ましくも思う。
私も大事な妹のような存在であるラバックを手離したくはない。けれど、それが彼女を束縛して傷付けているのだとしたらと思うと、怖くて仕方がないのだ。……現にこいつがラバックを束縛しようとして困らせているから余計にな。
「お前は何をそんなに怯えているのだ？らしくもない。それとも、貴様のラバックへの想いはその程度だったのか？」
「そんなわけないだろう!!ラバックは部下である以前に、私の大切な仲間の一人だ！」
私は、全てを見透かすようなエスデスの瞳を睨み付けた。
「なら、奪い返せば良いだけの話だろう？まぁ、私はお前からもラバックを奪ってやる気でいるがな」
彼女はやれやれと肩を竦めてから、不敵な笑みで私にも宣戦布告をする。……私から奪うといっても、恐らく引き抜きという意味でだろう。というかそう信じたい。
「それに、あの賢いラバックの事だ。あんなゲス野郎に一瞬でも惚れ

るわけがなかろう？」
「……確かに」
腰に両手を当てるエスデスの言葉に、少し考えてから納得する。
確かに、よく思い出してみたらラバックは奴に襲われていたあの時、シュラとは交際していないと断言していた。……私は一体何を悩んでいたのだろうか？
今考えたら馬鹿馬鹿しく思える悩みが解決した瞬間、私はなんだか吹っ切れたような気分になった。
「エスデス、あのゲス野郎の処分はお前に任せよう」
「ふっ、貴様に言われずとも、私は最初からそうするつもりだ」
ラバックに手を出した罪。その裁きを受けるシュラの姿が、今から愉しみで仕方がない。
そして、不気味に笑い合う女将軍二人を見た通行人達が、後に『あの二人を合わせたら帝都は終わる』というおかしな噂話を帝都で流していたのだった。

誤解を斬る

あれから帝都の街中を歩き回って、陽が落ち始めた頃。ルミちゃんの母親が漸く見付かった。

「うちの娘がご迷惑をお掛けして申し訳ありません…。本当にありがとうございました！」

「いえいえ、無事に見付かって良かったです」

「お姉ちゃんとお兄ちゃん、ありがと！」

意外な事に、ルミちゃんはシュラにもすっかり懐いていた。でもシュラはふん、とそっぽを向いていて、それでも彼女はニコニコと嬉しそうに笑っている。

よほど彼の肩車が楽しかったのだろうか。相手が相手だからあまり良くないと思いつつ、なんだか微笑ましく思ってしまう。

「また会おうね！」

「おう！でももう迷子になるなよー！」

大きく手を振るルミちゃんに俺も手を振って、別れを告げる。

彼女達を見送ったところで、俺もそろそろエスデスのところに戻らないとな、と宮殿の方向へと歩き始めた。ただ……。

「……なんでついて来るんだよ」

「あ？俺の家は宮殿にあるんだから当然だろうが」

なんて言って俺の後ろにぴったりとついて来ているシュラ。人混みから抜けたら俺を襲うつもりなのがバレバレだっつーの。

「……にしても、よく人助けなんかやろうと思えるな。あんなのは日常茶飯事だからほっときゃいいだろ」

理解出来ない。そんな顔でシュラはそう言った。

「……俺も昔はそう思ってたけどさ…ナイトレイドのみんなのお人好しが伝染ったっていうか……。でも、苦労して良い事した後に礼とか言われると、結構気分が良くなるんだぜ」

少し考えてから思った事を口にして、ニッと笑う。するとシュラは間を置いてから、「ふーん」と興味無さげに返す。

「お前も悪事ばっかしてないで、たまには今回みたいな人助けもやっ

てみれば？そうすりゃ前よりはもう少しまともな人間になれるんじゃねぇの？」
その言葉に足を止めたシュラに構わず、俺は再び口を開く。
「お前のクソ親父みたいなクズになってないでさ、例えば民の為にもっと努力するとかしてみろよ」
こいつの事情なんて何一つ知らない。だから他人事のように、軽い気持ちでそう言ってみた。
別に、改心して欲しいとかは一切思っていない。こいつみたいな根っからの悪人には、最初から期待なんてしてないから。けど、もしこれで少しでも大人しくなってくれれば、後が楽になって助かるなとは思ってる。
「人助け、ねぇ……」
そう呟いたシュラの声は、街中の騒音に掻き消されて、俺の耳には届いていなかった。
「そういや、お前今どこで寝てんだ？」
何故か避けるように話題を変えるシュラ。けど俺もこれ以上問うつもりはなかったから、何も思わないまま返す。
「てめぇに言うわけないだろうが。どうせまた襲う気なんだろ？」
「流石にバレるか」
「さらっと認めんな。あとこっちに寄るな！それ以上近付いたらぶっ殺す！」
「可愛気ねぇなぁ。返り討ちにしてまた犯すぞ」
俺がキレている一方で、シュラは何故か平然としていた。こいつはすぐに挑発に乗ってしまうタイプだと思っていたから、実は内心少し驚いている。
もう何を言っても無駄かと判断した俺は口を閉じて、再び宮殿へと足を運び始めた。
「で？どこに泊まってるんだ？」
「!?く、くっつくなこの変態！さりげなく変なとこ触ってんじゃねぇよ!!」
突然背後から抱き付き、やらしい手付きで腰辺りを撫でてくるシュ

ラ。まさかここまで粘着質な奴だったとは。
「言うまで離さねぇ」
「や…っ！エ、エスデス!!今はエスデスの部屋に泊まってる！」
ニヤニヤしながら内股を上下にゆっくり撫でられてビクリとし、思わず出てしまった自分の声のせいで顔が赤くなった俺はすぐに観念して白状した。
「エスデスの姉ちゃんのところだぁ？なんでお前が……つーかよく生きてるな」
「俺もそれは不思議に思ってるけど、やっぱりいつ死んでもおかしくないから一秒でも早く自分の部屋を取り戻したいんだよ!!」
目を見開いて驚きを露にするシュラに、若干涙目で同意する。
夜までに戻らなかったら何をされるか……。それに、今朝みたいにまた窒息死寸前になる可能性だってある。あそこで待っているのがエスデスだというだけで、怖くて仕方がない。
その後も、エスデスに出会った経緯や、前世ではタツミが好かれていたのに、とか。同じ前世の記憶を保持している者であるシュラに、他の人間には言えない、溜まりに溜まった愚痴をつい話し続けてしまっていた。でも、ずっと誰にも言えなかった愚痴も少し吐き出せて、正直すっきりした。
……って、なんでこいつに心を開いてるんだよ俺は。こんなヤツと仲良さそうに話しちゃダメだろ。
こんな言い方はしたくないが、前世の記憶という同じ秘密を共有している者同士でもあるこの関係が、俺の気を緩くさせてしまったのかもしれない。
「なんつーか、意外と苦労してるんだな、お前って」
「そうだ、俺は苦労人だ。今まさにあんたにも苦労してるよ。だからいい加減離れろ」
白状したら離れてくれると思っていたのに、全く離れようともしないシュラに苛々する。歩き辛いし恥ずかしいから勘弁して欲しい。
「そんなにエスデスの姉ちゃんのとこが嫌なら、俺の家に……」
「それこそ嫌だね。お前の事だから、どうせ女の俺を抱きたいだけだ

ろ」
「まぁな」
「おい、そこは即答しないで否定しろよ」
「けどエスデスの姉ちゃんよりはマシだと思うぜ？ちゃんとお前にも気持ち良くさせてやるからよ」
「イ・ヤ・だ!!!好きでもない奴にまた脚を開くなんてごめんだね！」
しつこくセクハラしてくるシュラの手を叩いて、全力で拒絶する。するとやっと諦めたのか、シュラは俺から離れ、つまらなさそうにポケットに手を突っ込んでいた。
その後はお互い無言のまま、宮殿へと向かっていた。しかし、
「漸く戻ってきたか、ラバ」
「ナジェンダさん？……と、エスデス…将軍まで？」
宮殿前に辿り着くと、何故かナジェンダさんとエスデスが腕を組みながら堂々と仁王立ちしていた。
「こりゃ豪勢なお出迎えだな。そんなにこいつの事が好きなのかよ、あんたら」
「今はまだ貴様に用はない。だがその様子……そいつとの噂は本当なのだな、ラバック」
呆れているシュラを無視して、エスデスは真剣な目で俺を見る。その隣ではナジェンダさんが附いているが、彼女も何か憤りを感じている雰囲気があった。
えっ、な、何？俺何かしたか？なんか物凄く怖いんだけど!?
「ラバ、悪い事は言わん。今すぐにそいつとは縁を切れ」
やっと顔を上げたナジェンダさんは、昨日みたいにまた帝具の銃口をシュラに向けそうな空気を放っていた。
「まずは何の話をしてるのか聞かせろよ姉ちゃん達」
「ロリコンは黙れ」
「ああ？誰がロリコンだコラ」
将軍二人に物怖じせずに聞いたシュラが一瞬だけすげぇと思ったけど、すぐにエスデスにロリコンと呼ばれたのはちょっと笑いそうになってしまった。

「あのー、噂って何の話なんですか？」
先程からそれが凄く気になっていたので、手を上げて訊ねてみた。
「ラバックと大臣の息子が街中で夫婦のように子供を連れて一緒に歩いていた、と聞いてな……。大臣には義娘と孫がいたという噂が帝都で広がっているんだ」
半分は事実だったが、最後は根も葉も無い噂話に振り回されていたらしい二人の将軍の話を聞いて、俺とシュラは顔を見合わせる。
「「夫婦……？」」
今目の前にいるこいつと俺が？
言われた事を理解した途端に、俺は彼と過ごした夜を鮮明に思い出してしまい、耳までの顔全体に熱を感じた。
「ま、孫!?い、いや、一回だけでそんな……！」
「「？」」
不覚にもシュラとの子供を抱く自分を想像してしまった俺は、一人で混乱して目を回す。
いやいやいや、まずこんなゲス野郎に惚れるわけないし、それ以前に俺ノーマル！ノーマルだから!!……あれ？でも今の俺は女だから、恋愛対象が女の人だと……あれ!?今更だけどよく考えたら俺ってノーマルの道が無い!?薔薇と百合の二択だけとか嘘だろ!?
「ラバ？どうした急に？」
「え!?あっ、な、なんでもないですよ!?」
不思議そうにするジェンダさんに声を掛けられた事によってテンパり、声が裏返ってしまった。
「先程からどうしたのだラバック？そんな可愛い仕草をする程私に甘えたいのか？」
「どう考えたらそうなるんですか!?全然違いますからね!?あとくすぐったいからそれやめて下さいっ！」
横から抱き付いてすりすりと頬擦りをしてくるエスデスに、赤面したまま思わずツッコム。
「……なぁ、ナジェンダの姉ちゃん。あれって本当にあの帝国最強のエスデスか？」

「ああ。信じ難いだろうが、ラバックが関わると、あいつはいつもああだ」
「マジか」
「マジだ」
　エスデスのデレデレっぷりにドン引きするシュラに頷いて同意しているナジェンダさん。でも俺から言わせて貰うと、そんな事はどうでもいいから早く助けて欲しい。
「と、とりあえず！俺には子供なんていませんからっ……！それはただ迷子の女の子の母親を一緒に探してただけです！」
「そ、そうか。それなら良かった」
　急いで話題を切り替えるように、話を戻して説明する俺の必死さに少し押され気味なナジェンダさんが、ホッと胸を撫で下ろす。
　その一方でまだ俺に抱き付いているエスデスはというと、「だから言っただろ」と何故かナジェンダさんに呆れていた。
「噂の真偽はよくわかった。だが、これからは勘違いをさせるような行動は控えてくれよ？」
「そうだな。危うくそこに居るゲスをこの場で殺すところだったぞ」
「アッハイ」
　頷くしかなかった。けど、俺の隣にいるバカは違った。
「あ？俺は大臣の息子だぞ。それに今回は俺は悪くな……」
「何か言ったか？」
「……なんでもねぇ」
　シュラは不服そうに訴え掛けたが、二人に睨まれて畏縮してしまう。
　知らないところで変な噂が流れていたっていうのもそうだけど、やっぱり一番怖いのはこの二人だなと改めて思う。この二人が組んで革命を起こそうとすれば、簡単に帝国を滅ぼせるに違いない。
　そして後日には、大臣に孫が出来たという噂はデマだという話がいつの間にか帝都に広められ、大臣の孫騒動はすぐに収まったのだった。

猜疑心を斬る

「うーむ……」

阿鼻叫喚が響き渡る拷問部屋。その一角に佇む一人の将軍は、手に持った手帳とにらめっこをしていた。

「どうしたのエスデス様？何かお悩み事でも？」

唸る将軍に声を掛けた三獣士の一人、ニャウは上司である彼女を不思議そうに見上げる。

「いや、大した事ではないのだが……絵を描くというのは難しいものだな」

「絵…ですか？」

敬愛している上司の口から、思わぬ言葉が出てきて驚きを露にせざるを得ないニャウ。エスデスの一歩後ろで待機しているリヴァとダイダラも、動揺を隠せていなかった。

三人は、彼女が絵に興味を持つような人間ではないのを知っている。だからこそ何故急にそんな事を言い出したのか、全く理由出来なかった。

「ニャウ、私が知る限り、芸術面ではお前が一番詳しい筈だ。それ故に一つ訊ねたいのだが……どうすれば絵は上手くなる？」

「えっ？あー、えーっとぉ…エスデス様に頼って貰えるのはとても嬉しいんですけど、僕はそっち方面の芸術は専門外、です……」

主としても慕っている上司からの唐突な質問に、ニャウはかなり困った様子である。

そりゃそうだ。彼は自身が所有している帝具、軍楽夢想スクリームを奏でる演奏者だが、その他の芸術面も長けているとは一言も言っていないのだから。

「ニャウでも難しいか……」

「エスデス様。なんで急に絵を描こうと？」

気になって仕方ないと言わんばかりに、今度はダイダラがエスデスに問い掛ける。

「そうだな……。あいつと一緒に居ない時間も、あの笑顔をずっと見

ていたいから、かな」
うっとりとした表情で彼女が脳裏に思い浮かべているのは、無邪気に笑うラバックの姿。
エスデスは、最初はただ、才能の芽があると感じたラバックを自分の軍に加えて育て上げたいとしか思っていなかった。しかし、共に生活をしている間に、彼女の無邪気な笑顔やころころと変わる豊かな表情に、少しずつ惹かれていたのだった。
そんなエスデスは、今自分が夢中になっている少女ラバックの話を、時折彼ら三獣士にも自慢のようによく語っていた。
「……エスデス様。失礼ですが、よくお話に聞いているその女は、本当に貴女様に相応しい者なのですか？」
不満を隠さずに重たい口を開いたのは、三獣士のリーダー、リヴァ。それは、彼がエスデスに心酔しているからこその言葉。リヴァのその気持ちは、他の二人も同じである。
三人に見つめられているエスデスは、顎に手をやり、少々考える仕草をする。
「……そんなに気になるというのなら、お前達もラバックに会ってみるか？」
「「!!」」
そういえばお前達とラバックはまだ対面していなかったな、と納得しながら、彼女はそんな提案をした。
すると三人は……。
「エスデス様を夢中にさせてる女の人かぁ……えへへっ、どんな顔なのかなぁ？凄く気になるね、ダイダラ、リヴァ！（エスデス様のお気に入りは僕らだって証明するついでに顔も剥ぎたいなぁ……！）」
「おう！早く拝んでみてぇぜ！（エスデス様も認める人間……こりゃたっぷり経験値を持ってるに違いねぇ！）」
「（……相変わらず考えている事が分かり易いな、この二人は）…そうだな。だが焦るなよ。下手な事をすれば、エスデス様のお顔に泥が付いてしまう」
表情を見ただけでニャウとダイダラの思考を読んで呆れたリヴァ

は、彼らに釘を刺す。
しかし、話題の中心人物に猜疑心を抱いている彼自身も、その人間が主の横に立つ者として相応しいのかを試してみたいと思っていたのだった。

「――っと！あっぶね！」
宮殿内の訓練場にて。剣を片手に、同僚達と汗を流すラバック。
まだ前世の頃程ではないが、それでも彼女は自分なりに日々努力し、剣の腕は以前よりは上がっていた。
「今度はこっちの番だぜ！」
「女のお前に力比べで負けるかっての！」
刃がぶつかり合う音が訓練場に木霊する。二人の熱気は、周囲で観戦している他の兵士達にも届いていた。
「ラバックー！今回はお前に賭けてやったんだから負けんじゃねぇぞー！」
「ラバ頑張ってー！」
その声援には、女性兵士の声も混ざっていた。それにすぐさま反応したラバックはその
子に振り向いて、目を輝かせる。
「おう！任せろ!!可愛い女の子からの応援があれば俺の全ステータスは１００倍アップするぜ!!」
「それどういう理屈だよ!?」
少しずつ力負けしているのにも関わらず元気なラバックに、練習相手の同僚はツッコミを入れざるを得なかった。
やがて押されていたラバックは押し返す……事はなく。むしろその逆。
突然刃の角度を変え、力を抜いて相手の剣を受け流すようにして自身は横へと避けた。
「隙ありっ!!」
自分の体重を掛けるように剣を交えていた同僚は、前へと転がりそ

うになる身体を止められず。その隙に彼の背を狙うラバックには、当然対応出来なかった。
ゴツン。
「あだっ!?」
柄で背中を叩いたその鈍い音が、練習試合の終わりを告げる。
「ほい、俺の勝ちー!」
観戦していた仲間達に意気揚々と手を振る勝者はラバック。
これはただの練習試合だが、男女の差で負けると思われていた彼女には拍手喝采が送られていた。
しかし彼女は拍手よりも欲しいものを求める為に、年上の女性兵士達の元へと駆け寄る。
「お姉さぁーん!!俺勝ったよー!ご褒美ちょうだぁーい!!」
「はいはい、ラバはほんと甘えん坊なんだから……」
「よしよ～し、よく頑張ったねぇ、ラバックちゃん」
美女達に囲まれて撫でられるラバックは、この人生で数少ない至福の一時を味わう。
「(柔らかい肌と甘い香り……!!それをこうして難なく味わえる事だけが、女の身体になって良かったと心の底から思える瞬間だぜ…!)」
普段は色んな意味で異色の人間達に振り回されている苦労人ラバックは、思わず感涙してしまいそうな勢いだった。
「全ステータス１００倍はどうしたんだよお前……。そこは押し返して俺に勝つ流れじゃね…?」
「いやいや、あれはただモチベ上げる為の演出だし?」
「お前なぁ……」
敗者である同僚に、ラバックはへらへらと笑って誤魔化す。しかし彼はそれ以上文句を言う事はなく。呆れながらも彼女の緩んだ笑顔に免じて許してしまった。
「おーい、ラバック!ちょっとこっち来い!」
試合を終えたばかりで汗だくのラバックは、一人の先輩兵士に声を掛けられる。
よく見ると、その兵士は険しい顔付きをしていた。それに対して少

し不安を募らせながらも、ラバックは小走りする。
「何かあったんすか？」
「……帝国最強の女王サマが、またお前に用があるんだとよ」
「あ…そーゆう事ね。てっきり、もっと重大な任務か何かの話かと……」
帝国最強の女王サマ……エスデスからの呼び出しだと聞いたラバックは深い溜め息を吐く。
目で促す先輩の視線を追うと、案の定そこにエスデスは居た。他にも、彼女の後ろには三人程人影があった。
憂鬱そうにそれを見ているラバックに、先輩兵士は、帝国最強の将軍サマからの呼び出しは相当重大な事だろうが、と思わずツッコミそうになる。
しかしそんな事は露知らず、ラバックはエスデスが待っている訓練場の一角へと向かう。
「わざわざここに来るなんて珍しいですね、エスデス将軍。俺に何か大事な用でも……っ！」
いつも通り気楽に声を掛けた途端に、こちらを射抜くような視線……殺気を感じ取ったラバック。
その殺意の正体は、エスデスの後ろに控えている三人組、三獣士のものである。
「そう殺気を出すな、お前達。ラバックが警戒してしまうだろう？」
「……申し訳ございません、エスデス様」
三人の代表として、年長者リヴァが一礼する。
「私はエスデス様に仕える僕、三獣士のリーダーを勤めているリヴァ。そしてこちらが同じく三獣士のニャウ、ダイダラだ」
「!!」
三獣士、というワードを耳にしたラバックは、一瞬目を見開く。が、
「へぇー…あんたらが噂の……」
スッと目を細めるラバックに、今度は三獣士達が驚いた。
素人では見抜けないような静かな殺意。けれど確かな矛先を表す殺意が、彼女の瞳の奥から垣間見える。要するに、ラバックの殺気の

隠し方は、常人のそれを遥かに上回っていたのだ。
「(まるで、エモノが糸に絡まるのを待つ蜘蛛のようだな……。エスデス様が気に入ったのも頷ける)」
　表情を変えずに納得するリヴァと同じように、他の二人もエスデスのお気に入りである彼女の事をほんの少しだけは認めようと思えた。
「私が話した通り、良い目をしているだろ？実力こそはまだまだ未熟だが、頭も冴えてる。育て方によっては芽を摘んでしまうが、私が開花させれば将軍級になるのも夢じゃない」
「それは流石に買い被り過ぎですよ、エスデス将軍。俺には器用さしか取り柄がないんですから」
「その天性的な器用さもお前の強みだ。お前はもう少し自分を誇れ」
　過大評価するエスデスに苦笑いしてしまうラバック。
　しかし彼女は自分に自信が無いわけではない。むしろ、殺し屋稼業の中ではこの手先の器用さを自慢しているのだから。
「ねぇエスデス様。このお姉さんがどれだけ強いのか、試してみてもいいかな？」
「え」
「うむ、それはちょうど良いな。先程のような低レベルな訓練では、今のラバックの実力はまだ測れんからな」
「ええっ!?」
　ニャウの申し出を承諾したエスデスに、ラバックは口を大きく開けて驚愕する。
　彼女の顔が引き吊ってしまうのも無理はない。なにせ彼はエスデスの直属の部下、三獣士の一人。自分との力量差なんて想像出来ない程大きいものだと、遠い過去の昔から悟っているのだから。

悪魔を斬る

「ほらほらっ！防いでばっかりじゃ僕に勝てないよ、お姉さん！」
「ぐう…ッ！」
　ニャウから煽り言葉を受けても、容赦のない攻撃の嵐を防ぐのに精一杯なラバックは皮肉を返す事も出来ない。完全に防戦一方の状況だ。
「なんだ、あんま大した事ねぇじゃねぇか。こりゃニャウに殺されちまうな」
「エスデス様に気に入られているとはいえ、所詮はただの下士官。瞬殺されずにまだ生きているだけマシだろう」
　期待外れ、と言いたげなダイダラとリヴァの会話は、ラバックとニャウには届いていない。
「ふふっ、どうかな。死んだのならその程度だったというだけの話だが、あいつが何もせずに死ぬかどうかを決めるのはまだ早いぞ」
　意味深に微笑むのは三匹の主、エスデス。ラバックが勝つとまでは断言しないが、彼女が簡単に死ぬとは思っていないらしい。

～ラバックｓｉｄｅ～
　くそっ、なんでこうなるんだよ！つか、こいつさっきから急所狙い過ぎだろ！マジで俺を殺す気か!?
　帝具である縦笛を短剣のように素早く突き付けてくるニャウは、俺を本気で殺す気でいるのを隠そうともしていなかった。
　しかしそれ故に急所以外のガードは疎かになってしまい、俺へのダメージだけが蓄積されていく。このまま防ぎ続けても、延長戦になれば確実に負けてしまう。
　……なら、短期決戦に持ち込むしかない！
「でりゃあッ!!」
「うわっ!?」
　ニャウが再び笛を突いてくるタイミングを見計らって、足払いで砂

を撒き上げる。
「ほおー、そうきたか！」
「なるほど、目眩ましで一気に決着を着けるつもりか」
離れた場所から聞こえるのは感心の声。
砂を掛けられれば誰だって反射的に目を瞑ってしまう。その一瞬の隙に、俺は屈んで相手の懐へと入り込む。
「くっ……！（こいつ、目が本気だ……！）」
相手が殺す気でくるなら、こっちもそれ相応の殺意で向かう。それが殺し屋。けれど今はその信条よりも、復讐心の方が勝っていた。
そして俺はそのまま真っ直ぐ剣を突き立てようとする。
しかし。
刃が肉に届きそうだったその刹那。復帰したニャウは、半歩下がりながら身体を反り返し、俺の剣を避けた。そして、
「残念でし、たっ！」
「がはッ!?」
空を突いた剣が蹴り上げられた直後、その勢いのまま後ろに蹴り飛ばされてしまった。
「げほっ、ごほっ……あー、くそっ……！降参だ降参！」
仰向けの状態でそう告げる。内蔵が破裂したんじゃないかって疑うくらいの激痛で立ち上がれそうにない。あの小さな身体で、一体どうすればあんな強烈な蹴り技が出来るんだか……。
「えー、もう終わり？じゃあ、戦利品としてお姉さんの顔、剥いじゃっていいかなぁ？」
「っ!!?」
いきなり満面の笑顔でそんな事を言われれば、誰だって戦慄する。小さな子供にしか見えない（後から聞いた話だが、実は俺より年上らしい）悪魔に怯える俺の姿は至極当然の反応だ。
「ニャウ、そこまでだ」
「ッ!!」
冷気のような冷たい殺気が、辺り一面の空気を凍らせる。その発生源は言わずもがな。

「も、申し訳ありません、エスデス様！」
顔面蒼白でその場に跪くニャウ。その様はまるで手酷く飼い慣らされたペットだ。
「わかれば良い。が、次に私のラバックの顔を狙うというのならば……」
「い、いえ！滅相もございません！彼女にはあのような冗談はもうしませんので、どうかお許しを！」
遂には頭を地面に付けるニャウに、エスデスは尖った冷気を収める。
「全く、仕方のないヤツだな……。今回はソフト拷問コースAで済ませてやろう」
「ひいいいっ!?」
ソフトなのに直属の部下でもビビるくらいにヤバいのかよ。それ以上のランクは死ぬレベルなの？っていうかランクやコースを分けるって事は拷問の種類はそんなに多いの？どんだけ拷問を追究してんだよ、やっぱこえぇよこの人。
と、脳内の俺はマシンガンの如く連射するツッコミのトリガーを引いていた。
だが彼女の氷のような殺気が消えたおかげで、キレられた本人だけではなく、俺や他の三獣士二人もホッとしている。
「それよりもラバック、ニャウと戦ってみてどうだった？」
「……どうだったも何も、負けるのは最初からわかってましたよ俺は」
漸く動けるようになった俺は上半身を起こし、頭を掻く。
「そう自分の限界を決め付けるな。お前には多少なりとも将来性があるのだから」
何を根拠に言っているのかはわからないが、あのエスデスが世辞を言うわけがない。だからまぁ、自分で言うのもなんだが、その激励の言葉に偽りはないのはわかる。
「剣(それ)が扱いにくいというのなら、別の武器も試してみるといい」
んなこと言われても無理なもんは無理だ。俺の実力を余す事なく発揮出来るのは、そこら中にある鋭い刃などではなく、たった一つの

相棒であるクローステールだけなのだから。
「はぁ……シャワーでも浴びよ」
「なら私と一緒にまた大浴場にでも行くか？出会った時以来だな」
独り言として呟いただけなのに、エスデスが嬉しそうに食い付く。
「一緒に来る気満々なとこ悪いけど、許可した覚えはないですよ!?」
「なに、私とお前の仲だ。そんなに恥じる必要はなかろう？」
「ある意味危険な予感がするので丁重にお断りさせて頂きますっ!!」
バッ！と自分の身体を抱き絞めて、警戒度ＭＡＸの体勢をとる。
日に日に熱い視線を送る回数を増してくるこの女とまた一緒に浴室に入ったら、自分の何かが失われてしまう気がする。それほど怖いのだ、こいつのエモノを見る目は。
「（エスデス様が少女と戯れる姿…か）……意外と悪くないな」
「ん？何がだ？なんか面白れぇ事でも思い付いたのか、リヴァ？」
「……いや、何でもない。ただの独り言だ」
「？」
嫌がって喚く俺がエスデスに抱き付かれていたこの時。最年長のおっさんことリヴァが変な性癖に目覚めようとしていたとは、彼の隣に居るダイダラも、主にまだ怯えているニャウも。この場に居る誰もが気付けなかった。
「漸く見付けましたよ、エスデス将軍」
突如として、その声は現れた。そして咀嚼音が混ざったその声の主は、なるべく目に映したくない人物だった。
「大臣か。貴様がここに来てまで私を探すとはな。で、なんの用だ？今は忙しいから後にして頂きたいのだが」
「少女と戯れる事の何が忙しいのですか。仕事ですよ仕事。それも貴女の大好きな……」
「殲滅か」
「ご明察」
「リヴァ、ニャウ、ダイダラ。今すぐ皆を呼べ」
エスデスはオネスト大臣と短いやり取りを交わすと、三獣士達に自分の軍隊を召集するよう命じた。

「ラバック、風呂の件は一旦保留だ。先伸ばしにしてしまってすまないな……」
「いえいえ全然、全ッ然気にしてませんからお気になさらず!!」
本気で申し訳無さそうな顔すんなと思いながらも、笑顔で首を横に振って誤魔化す。
そのまま三獣士を連れた彼女を見送ると、自然と大臣と二人きりの状態になってしまった。
下っ端に等しい下士官と大臣が並ぶって……なんだこの異様な光景は。今の俺汗臭いから余計に気まずいんだけど。
微妙な空気に押し潰されそうで居心地が悪い俺は、早く帰りたい気持ちでいっぱいだった。
「えっと……で、では俺…私もここで失礼させて頂きま……」
「ああ、少しお待ちを」
「へっ!!?」
呼び止められてすっげぇ焦る俺。たっぷたぷの腹を揺らしながら近付いてくるオネスト大臣。どこまでもシュールな光景である。
「貴女、今夜は私の相手をしなさい」
……今なんて言ったこの脂肪の塊。え、今夜？相手？うーん、幻聴かな？
「ナジェンダ将軍だけでなく、エスデス将軍にも気に入られているみたいですからねぇ……。私も少し気になるので、味見させて頂けませんか？ま、貴女に拒否権はありませんが」
俺の現実逃避は虚しくも終わり、意識が現実へと呼び戻される。
……いや待て、落ち着くんだ俺。一周回って「色仕掛けでこいつを殺せばいいんじゃね？」とかそんな軽い事を考えちゃいけない。それはダメだ。色々と終わる。
こいつの暗殺が簡単にいくわけがないのは嫌な程わかっているが、例え壊滅的な確率で成功したとしても、羅刹四鬼やブドー、近衛兵がいる限り生きて帰れるわけがない。……まぁ奇跡的に生き残ったとしても、そん時は俺の精神が死んでるが。
だがここから逃げ出す策を練ろうにも、訓練場の出入り口はこの肉

の塊が阻んでいて邪魔だ。
どうする…？どうすれば俺に安息の地が訪れるんだ……!?
頭をフル回転させてこの状況の打開策を考えていると、大臣の後ろから新たな人影が現れた。
「こんなとこで何やってンだよ親父。カミナリ爺があんたを呼んでたぜ」
オネスト大臣の息子、シュラ。どうやら彼はカミナリ爺ことブドー大将軍に頼まれて大臣を探しに来たらしい。
「おや、そうでしたか。それは残念。せっかく味見しようとしていたとこでしたのに……」
チラリとこちらを見ながらそう言われて、背筋がゾワリとした。
外見が外見だからか、エスデスの蛇睨みのような熱い視線と違ってとにかく気持ち悪い。ただただひたすら気持ち悪い。生理的に受け入れられず、最早吐き気がするレベルに。
そしてシュラのおかげで諦めてくれた大臣は、やっとこの場を去って行った。
「はぁ、助かった……ありがとな」
安堵の表情を浮かべて、救世主となったシュラに礼を言う。しかし彼は、
「親父の手から助けてやったんだから、今から俺に付き合ってもらっても構わねぇよな？」
「えっ」
「エスデスの姉ちゃんは暫く帰ってこねぇみたいだからな。それまで俺の部屋に居てもらうぜ。親父には内緒でな」
帝具シャンバラを片手に持ちながら、ニヤリと笑う。
まさかの第三ラウンド。今日一日で三者三様に。しかも連続で身体を狙われるとか不運過ぎるにも程があるだろ、俺って。
――結果だけを言うと、俺はシュラから逃げられず。結局彼が満足するまで遊ばれてしまっていたのだった。

～ＮＯｓｉｄｅ～

ラバックがシュラに連れて行かれたのと同時刻。

帝都には、ある一人の青年が訪れていた。

「ここが帝都かぁ……。予想以上に広過ぎて、すぐに迷っちゃいそうだ」

一つに纏めた緑の髪を靡かせ、垂れた目で帝都の街並みを眺めるその男は、とある目的でここへやって来た。それは……。

「さぁて、愛しの我が妹……ラバックはどこに居るのかなー？」

帝国兵士として奮闘しているであろう彼の妹、ラバックを探し出す事であった。

兄を斬る

シュラに拉致られた翌日。帰りは俺を拉致った張本人である彼が帝具で送ってくれた。

けどあの後とはいえ、なんであいつは俺を大臣から隠そうとしたんだろうか？それが少し引っ掛かって疑問に思う。

……まぁそれはさておき。痛む身体に鞭を打つように急いで仕事の準備をした俺は今詰所に着いたところなんだけど……。

「遅れちゃってすいません、ナジェンダさ…ん……？」

ガチャリと扉を開けると、そこにはナジェンダさんと、彼女に詰め寄って手を握る男性が居た。

「帝都は本当に素晴らしいところですね！まさか貴女のような美人なお方にお逢い出来るだなんて……！」

「そ、そうか…それはありがとう……」

相手は後ろ姿で顔がよく見えないが、褒められているナジェンダさんは困ったように苦笑いしている。しかし、その男の声には聞き覚えがあった。

「ん？ああ、ラバックか。ちょうど良かった、この方がお前を……」

「え、ラバック!?」

こちらに気が付いたナジェンダさんが俺に声を掛けた途端に、緑髪の男がバッ！と勢い良く振り返る。そしてその青年の正体は……。

「いっ!?リ、リネット兄さん!?」

俺の兄……我が家の長男、リネットであった。

「に、兄さんだと…!?た、確かに髪と目の色は同じだが……」

ナジェンダさんが狼狽するのも無理はない。なにせ、はっきり言うと俺らの容姿はあまり似ていないのだから。もちろん、性格も全く違う。

いや、今はそんな事どうでもいい。それよりなんでこの人が帝都に!?前世ではこんな事態は起こらなかったのに…！これはマズい…マズ過ぎる……!!

「やっと見付けたよラバ～!!」

「ちょっ!?抱き付くな！つかなんで兄さんが帝都に居るんだよ!?」
「いやぁ、ラバックが心配で心配で……。君が頑張って働いてる姿も見たかったからつい一人で……」
「ついじゃねぇよ！なんだその下らねぇ理由は!?」
えへへ、と柔らかい笑顔でマイペースに喋る彼は、やはり俺のよく知る兄である。唯一の救いは家族全員ではなく、リネット兄さんだけというところか。
俺や他の二人の兄と違って、この人は本当に気が緩いというかなんというか……とにかく、俺達四人兄弟の中で一番似ていないのだ。そういうところは前世の頃から変わらない。
でも、この世界線で一つ。それもかなり変わってしまった部分がある。それは……。
「ところでラバック。帝都に来てから変な男に絡まれたりしてないかい？君は自分が思っている以上に可愛いんだから気を付けなきゃダメなんだよ？それから……」
「あー！あー！わかったわかった！もういいからはよ帰れこのシスコン兄貴!!」
そう、彼は弟ではなく妹になった俺の影響を受けたのか、重度のシスコンになっていたのだった。
「ナジェンダさん！なんでこいつがここに居るんですか!?」
「ねぇ、今こいつって言ったよねラバック？僕は君のお兄ちゃんなんだよ？昔は兄様って呼んで……」
「シャラアアアップ!!!」
「いったあああっ!!?」
ガッ!!という鈍い音が響く。
何が起きたのかを端的に説明すると、俺の黒歴史を暴露しようとしたクソ兄貴様に鉄槌を下してやった。頭を思いっきりチョップした。ただそれだけだ。
すると緑の垂れ目尻尾野郎は頭を押さえて蹲まる。ナジェンダさんや他の兵士達が心配そうに彼を見つめているが、そんな事は知ったこっちゃねぇ。

まだ前世の記憶を取り戻していなかった頃の話は掘り返さないで欲しい。ふりふりのドレスを着ていた可愛いもの好きな女の子だったあの俺はもう思い出したくもない。
「さて…コレがここに居る理由を説明してもらってもいいですか？ナジェンダさん」
「え？あっ、いや……そ、そうだったな」
爽やかな笑顔で問うと、戸惑ったナジェンダさんはコホン、と咳払いする。
どうやら俺らの兄妹関係については触れない事にしたらしい。流石後のナイトレイドボス、正しい判断だ。
「実はだな、彼は昨日から警備隊に……それも女性を中心にお前の事を聞いて回っていたらしくてな。怪しいから、お前と面識があるのかどうかを確認する為にここに連れて来てもらって、ちょうどお前も呼ぼうとしていたんだが……」
「なるほどそうでしたか。…で済むわけがねぇな。さりげなく女の子ナンパしてんじゃねぇよこのタラシ野郎！」
「ラバック、それ以上はやめてやれ！流石に彼が可哀想過ぎる!!」
もう一発殴ってやろうと身構えると、ナジェンダさんがガタリと立ち上がって俺を制止する。
まぁナンパといっても、常に下心丸見えの俺と違って、こいつはタツミみたいな天然タラシでもあるからナンパをしたつもりは一切ないと思うが。恐らく、たまたま通りすがった警備隊が女性ばっかりだったんだろう。
だがしかしタツミ同様、自然と女の子にモテまくるこいつは昔からムカつくから絶対に許さん。モテ男は存在自体が罪だ。いや悪である。つまりモテ男は滅ぶべき。
「ううっ……暴力はダメだっていつも言ってるじゃないか、ラバ。もう少し女の子らしくしないと、母さん達が悲しむよ？」
「うっさい、余計なお世話だ！」
ここで親という存在を挙げてくるとはなんて卑怯なヤツだ。
前回と変わらず親不孝な俺は、家族に対してなんとも言えない罪悪

感を感じている。それを知ってるのかと疑うくらいに、こいつは何かあると両親が悲しむだのなんだのと言ってくるのがどこか狡い。
「はぁ……そういや、今日泊まる宿とかは決まってんの？」
「いや全然？宿を探そうとは思ってたんだけど、その前にいつの間にか知らない人にお財布取られちゃっててさー」
　あはは、と呑気に笑う彼に、この場にいる全員が唖然とする。
「あんたマジで何やってんだよ!?バカなの？死ぬの!?っていうかそんな目に合ってンのによく平然としていられるな!?今の自分の状況わかってンのか!?いやバカだから全然わかってないのか!?」
「ラバ落ち着け。その気持ちはわかるが正気に戻ってくれ…!!」
　溜まりに溜まったフラストレーションが爆発して怒鳴っていると、まだ正気でいるナジェンダさんに宥められた。
　うん、やっぱりなんか最近色々と疲れちゃってるみたいだな、俺……。でもとりあえずはこいつをどうにかしないと。
　荒くなった呼吸を整えて、これからこのどうしようもない兄をどうするかを考え始める。
「あ、せっかくならラバの部屋に泊めさせ……」
「却下！」
　例えエスデスと同居してなくても、こんな変態兄貴と同室で寝るのは絶対に嫌だ。
「ラバ、もういっそこの詰所に彼を泊めてやるのが一番良いんじゃないか？」
「んー、確かにそうっすね……でもここに泊めちゃって大丈夫なんですか？」
「一日程度だったら多少は平気だろう。仕事の邪魔さえされなければな」
　邪魔をしなければ、という言葉を聞いて、チラッと問題の本人を見る。
「いや、そんな疑いの目で見ないでよ。邪魔する気なんてこれっぽっちもないし、下手に首突っ込んで余計な事をするつもりもないから。だから問題児みたいな扱いしないで？」

いや、あんたは今まさにここの人間に迷惑掛けてる問題児だろ。なんてツッコミはもうキリが無いから飲み込んで。
「んじゃ、お金渡しとくから、明日になったらすぐに帰れよ」
「え？僕は帰るつもりないよ？」
「……は？」
兄の帰らない発言に、ドスの利いた声で、何言ってんのお前？と威圧を放つ。しかしそれを全く気にしない様子で、彼はナジェンダさんの方を向いた。
「ナジェンダ将軍、暫く僕をここに居させてくれませんか？」
「そ、それは難しい話だな」
「そこをなんとか！炊事洗濯でしたら自信があるので、ここで働かせて下さい！元々帝都に来たら仕事を探そうと思ってたんですけど、一文無しだと寝床もなくて仕事どころじゃないんですよ……！」
ナジェンダさんの手をギュッと掴んで懇願する自分の兄に、俺は思わずイラッとくる。
「おい、何サラッとナジェンダさんの手掴んでんだよてめぇ。早く離せ」
「え、嫉妬してるの？大丈夫だよラバ、お兄ちゃんは妹一筋だから！」
「こいつここで斬って良いですかナジェンダさん？」
「落ち着けラバ。とりあえず一旦落ち着け。ほんとに頼むから詰所を血で染めようとしないでくれ」
そんなしょーもないやり取りをした後、ナジェンダさんはこう言った。
「リネット殿、貴方がラバックの事を心配しているのは充分過ぎる程わかった」
蟀谷を押さえる彼女を見る限りだと、この流れは断る雰囲気だ。と俺は思っていたのだが……。
「それに、この詰所に寝泊まりする者のほとんどはなかなかしっかりした食事をしてくれないからな。あまり休養を取れない兵士達に英気を養ってもらう為にも、ここで家事をやってくれないか？」
仕方なさそうな表情で告げたナジェンダさんに、パァッと明るく

なった彼は頷いて、
「もちろんです!!」
と、かなり張り切っていた。
でも俺からしたら、
「なんでこうなったんだ!!?」
と叫ぶくらいに最悪な展開である。
女になっただけで、こんなにも前世とは違う展開に変わってしまっているとは……先行きが不安で仕方がない。
離反の事も考えると、やっぱりすぐに実家に帰ってもらいたい。彼がいると色々と面倒だ。予測不可能な事態が続く中、あいつが何か余計な事をしないか心配だからな。
……これは決してフラグではない。伏線なんかじゃないからな…!?

夢を斬る

「はぁ～…仕事が見付からない……」

やぁ、こんにちは。僕はラバックの兄、リネットだよ。改めて宜しく。

この詰所に居候させてもらってから早数日。ご覧の通り、仕事探しは未だに難航中。都会で暮らすのって難しいね。

今の生活はとりあえず一日三食作ってみんなと一緒に食事。そして掃除洗濯。当然、給料なんて存在しない。

因みに寝る時はソファーで。…居候させてもらってる立場だから口には出来ないけど、毎朝起きると首や背中がとても痛いです。嗚呼、ベッドが恋しい……。

おっと、話がズレたね。閑話休題。それ以外の時間帯は帝都で仕事探し。僕の得意分野は料理だから、飲食店を中心に探してるんだけど……。

「強面の店員さん達が怖い……」

「メインストリートもああ見えて治安が悪いからね。犯罪対策で少しでも強そうな奴を雇う傾向があるんだ。体力だけじゃなくて、無駄なところ以外のメンタルも貧弱な兄さんにとってはあの辺りで働くのキツいでしょ」

詰所のダイニングルーム。向かいの席で珈琲を啜るのは、最愛の妹ラバック。無駄なところっていうのは多分妹への愛情とかの事だろう。ちょっと失礼な気がするけど、僕は大人だからね、何も言わないよ。

でもラバックの言う通り、犯罪防止の為に雇われたのであろう屈強な男性達に囲まれて働くのは精神的にかなり辛いものがある。なので結果的にどこも長く続けられないのだ。

帝都は綺麗な女性が多い。それはとても嬉しいのだが、強面のお兄さんも多いのはノーサンキューである。

「他にはどこ見てきたの？選り好みなんかしてないで幅広く探さないとほんとにマズいよ。今のあんたヒモと同じなんだからさっさと働

けニート」
流石帝都に馴染んでいるラバック先輩。兄だろうが容赦無く罵倒して僕を精神的に追い詰めてくる。このままずっと就職出来ずにいると頭を叩かれたりしてもっとスパルタになりかねない。
「こ、今度からは飲食店以外もちゃんと見て行こうと思ってるよ！これでも薬師を目指してるから、薬屋とかそこら辺にね！」
得意な事だけやって楽するのは難しい。やっとそれを悟った僕はこれを機会に幼少期からの夢を追い掛けてみようかと思い至っていた。
「へぇー、リネットさんって薬師目指してるんですね！」
僕らの会話に入ってきたのは、ラバックと仲の良い一般兵卒の女の子。他の兵士達も僕の話に興味を持ったのか、気が付けば周囲から視線を浴びていた。
「うん。きっかけは覚えてないんだけど、疫病や不治の病とかを治せるような薬があれば、病に苦しむ人達をみんな救えると思ってね」
幼いながらにそんな夢を持っていた僕は、独学だけど薬の知識を実家で少し勉強していた。でもあそこは地方の田舎だから、帝都と比べたら学べる範囲なんてたかが知れている。
「!!薬師…その手があったか……！」
「ん？どしたの？」
「あ…いやなんでもない。夢があるなら兄さんはそのまま働けそうな薬屋を探す方が良いと思うぜ」
「？うん、わかった」
何かを閃いたかのような反応をしてから後押しするラバックに疑問を抱きつつも、とりあえず頷く。
「……もしかして、また予知夢でも見たのかい？」
ラバック以外には聞こえないように、小声でそう囁く。
話は変わるが、実は何年か昔、僕の妹は予知夢のようなものを突然見るようになって、自分には未来がわかるんだと自慢していた。
最初こそはもちろん疑っていたけど、その予知がいくつか的中していく事によって、周りの人間達は彼女を不気味に感じるようになっ

た。でもそれとは正反対に、僕ら家族はラバックの言葉を信じていた。
けれど、周囲の怯えた反応のせいなのか、それとも別の理由があるのか。その時からラバックの言動はガラリと変わった。
おしとやかで女の子らしかった彼女が、僕ら兄三人の古着を着て、男の子のような荒い口調と性格に。しかし時々、子供とは思えないどこか大人びた雰囲気を纏っていて、本当に不思議だった。
そうやって変わり始めてから、ラバックはその予知夢の話をしなくなった。当時気になっていた僕は一度だけ聞いてみた事があるけど……。
「またその話か。あれは俺の戯言だって昔言っただろ？誰かに聞かれると恥ずかしいから、いい加減忘れてくれよ」
と、今と同じように目を逸らしてはぐらかされた。
「そんな事より、早く仕事探せよ。話逸らしても何も進まねぇぞ」
目を合わせないまま、話題を戻そうとするラバック。その様子はやはり何かを隠しているようにしか見えない。
でも確かに、今回は話を逸らしちゃった僕が悪いから仕方ないか。この件についてちゃんと話し合うのは、帝都での暮らしが安定してからにしよう。
「うーん…じゃあまずは本屋にでも行って、本格的に薬の勉強でもしてみようかなぁ」
「その本を買う為の金はどうすんのさ？」
「……」
さぁやるぞ！と意気込んだ途端に、ぐうの音も出ない一言がグサリと胸に刺さる。何も反論出来ずに黙り込むと、優雅な朝食タイムだった筈の空気が一気に沈んでいった。
「……ほんの少しだけでいいので…仕事が見付かったらちゃんと返しますのでお金を貸してくれませんか？ラバックさん。どうか僕にご慈悲を……」
「知ってた。その代わり、買ってきた本を読み終わったら俺にも貸してくれよ」

「どうぞどうぞ。ラバはほんとに本が好きだねぇ」
「まぁね。学んで損する知識なんてないし、むしろ今後の役に立つと思うからね」
妹から本数冊分のお金を借りて周りにも失笑される兄。なんて無様な姿だろうか。
やっぱり妹離れなんて出来ないよ。僕はこれからもラバックが居ないと多分生きていけないんだと思う。
「ラバック、時間的にもう準備した方がいいんじゃないか？」
一人の兵士の言葉に、ラバックは時計を見やる。
「おっと危ねぇ、もうこんな時間か。悪いな兄さん、俺らそろそろ次の任務に行かねぇと……」
「ああ、わかったよ。色々ありがと。気を付けてね」
「はいはい、今日も安全第一に頑張るよ」
残った珈琲を飲み干したラバックは席を立ち、いつものヘルムを頭に被る。
「んじゃ、行ってくるわ」
「行ってらっしゃーい」
最後にそれだけを交わすと、ラバックは他の兵士達にも声を掛け、彼らを先導して詰所を後にした。
一般兵卒の小隊を指揮して上司を支える下士官の彼女は、低い階級でありながらも充分忙しいらしい。
「さて、掃除と洗濯も終わってるし、早速本屋にでも行こうかな！」
よっこらせ、と年寄り臭い声に合わせて立ち上がり、玄関に行く。
詰所を出た途端に、冷たい外気が頬を撫でる。でもその冷たさは気持ちの良いものではなく、チクチクと刺さるようで少し痛い。
「買い物が終わったら、みんなのマフラーでも編んでみようかなぁ……あっ！でもその前に今晩の献立考えないと……！」
暫くずっとぶつぶつと独り言を呟いている間に宮殿の敷地内から出ると、目的の本屋がある帝都のメインストリートにはすぐに着いた。
ここは一見賑わってるように見えるけど、みんなどこか暗い表情を

しているのが印象的だ。以前、何も考えずにそれを口にした際に見せた妹の神妙な面持ちは、今も忘れられない。

「――あ、これも持ってないやつだ！」

流石帝都。自分の故郷では見た事のない本がたくさん並んでいる。様々な資料から創作本まで、品揃えがかなり豊富だ。眺めているだけでも新しい発見があって楽しい。

「むむむ…どれを買おうか悩むなぁ……ん？」

壁際の本棚の前で唸っていると、ちょうど隣に立っていた紳士的な雰囲気のおじさんが、一冊の本を持って真剣に見つめていた。

何故その男性が僕の目に留まったのか。それは、その手に持っている本が……

長い水色の髪が特徴的なお姉さんが、首輪と手錠を付けられた緑髪の女の子に迫っている表紙だからだ。

見てはいけないような光景を目撃してしまった僕は酷く後悔する。ギャップとかそういう問題じゃない…なんか凄く犯罪臭がするよ!!?

思わず固まって凝視していると、こちらに気が付いた様子のおじさんと目が合ってしまった。

「あ…えと……」

「……」

しどろもどろとする僕のリアクションに反して、おじさんは目を逸らして無言のままその本を元の位置に戻す。

なんだろう…冷静なのが逆に怖い……。

するとおじさんは何も購入しないまま店から出て行ってしまった。

……僕は何も見てない。そう、何も見てないんだ。ＳＭ系の百合漫画を手にしたダンディなおじさんなんて見てないよ…！

明らかにヤバい趣味を持っているとしか思えないその怪しいおじ

さんが帝国軍に所属する凄い人物だっただなんて、この時の僕には知る良しもなかった。

「――あっ、リヴァ！買い物はもう終わったのー？」
「やっと戻ってきたか……って、何も持ってねぇじゃねぇか。欲しいモンはなかったのか？」
「……まぁな。だが気にするな。その内エスデス様から休暇を頂いたらまた改めて探すつもりだ」
「そーなの？まぁ、リヴァが大丈夫だって言うなら別にいいんだけど……」
「でもよ、本に興味がねぇ俺らでも手伝えそうだったら遠慮無く言えよ」
「ああ、もしもの時はそうさせて貰う（…あの本、やはり買っておけばよかったな……）」

拘束を斬る

待たせたな、漸く任務から帰還したエスデスだ。
数日間ずっと会えずにいたラバックの顔が早く見たくて足早に部屋に戻ったのだが……あいつは今仕事中らしい。非情に残念だ。
夜まで帰ってこないとも聞いた私は、一先ずシャワーを浴びてベッドにダイブする。
「うむ、ラバックの匂いはまだ残っているな」
私が居ない間、帝都にはラバックの兄が来たと聞いた。だから勝手にそいつと一緒に暮らし始めていないか不安だったのだが、まだ新しい彼女の匂いがベッドに残っていて安心した。
しかし、それと同時に早く会いたいという焦燥が募っていく。
「……ふふ、この私が焦っているとはな。やはり恋というのは不思議で面白い」
ラバックが帰ってきたらまず何をしようか。せっかくならあいつの兄の話を聞くか？いや、きっと今日も汗だくで疲れているだろうから、まずは背中を流してやるのもいいな。一緒にまた大浴場に行くという約束も守ってもらわんと。
私は既にシャワーを浴びてしまったが、あいつの身体をじっくり観察したり触る為なら一日に何度でも入ってやるぞ。
今なら、小さい頃に私を口説いてきたあの女の言っていた事が少しわかる。ラバックへの愛があれば、私はもっと強くなれそうな気がするからな。
そう考えている内に、ガチャリとドアが開く音がした。
ノックもせずにこの部屋の扉を開けるのは、私ともう一人だけ。つまり、
「やっと帰ってきたかラバック！」
ガバァッ！と勢い良く起き上がって相手の姿を確認すると、そこに居たのは予想通りの待ち人。緑のニットワンピ姿のラバックだった。
「あれ、エスデス将軍？いつの間に帰ってきてたんですね。おかえりなさい」

一瞬、ラバックは少し驚いた顔をするが、すぐに柔らかい微笑みを見せてくれた。
ああ可愛いッ!!!今すぐ抱き締めてやりたいっ!!
と内心で叫びながらついラバックの腕を引いて抱き締める。
「おわっ!?心臓に悪いですから急に引っ張らないで下さいよ！」
「我慢なんてものは嫌いだからな。私は本能のままに行動する」
「いきなり何の話!?」
突然の出来事に驚くラバック。だが私はまだ彼女の匂いや感触を堪能したい為、離す気は毛頭無い。
それを察しているのか又は力量差で私に敵わないと思ったのか…それともその両方か。ラバックは抵抗せずに私の腕の中で大人しくしていた。
「全く……満足したらすぐに離して下さいよ？」
「まだ離さん。ところでラバック、もうシャワーは済ましているのか？」
「ん？ああ、さっき浴場で済ましてきましたよ。それがどうかしたんですか？」
ガクリ。
返答を聞いた途端に、ラバックの両肩から手を離さないまま、崩れるように膝を折って項垂れた。
「え!?な、なんでショック受けてんの!?何がそんなにマズかったんだ!?」
「くっ…！お前と一緒に…風呂に入りたかったというのに……任務前に約束をしたのに……！」
「そんな理由で!?」
動揺しまくっているラバックの言葉に、すぐさま顔を上げる。
「そんな理由とはなんだ!!私はお前と一緒に入浴するのを楽しみにしていたのだぞ!!」
「え、ぶちキレる程楽しみにしてたの…？な、なんかよくわかんないけどすみませんでした……」

困惑を隠せないまま謝罪するラバックだが、私はそれだけでは許さん。
こういった事は私に惚れさせてからにしようと思っていたが、急遽予定変更だ。
「約束を破った罰として、貴様にはお仕置きをする必要があるみたいだな」
「ちょっ!?お仕置きって何をするつもり……!」
言い終わる前に、キスで口を塞ぐ。
突然の事に咄嗟の反応が出来ないラバックの唇から舌を入れ、口内へと侵入する。
「んぁ…ん、ふぅ……」
逃げようとする舌に自分のそれを絡めると、ラバックはあっという間に蕩けた表情へと変わっていく。
次第に彼女は抵抗を止め…たかと思えば、自ら進んで絡めにきた。この先に待っているものも知っているかのように、もっと快楽を求めるその意外な行動に思わず驚いてしまう。
「ん…、この私から主導権を奪うつもりか?妙な抗い方をするな」
「っ、は……野獣からは逃げられないって、嫌々学びましたからね…抵抗すんのは諦めます。でも、翻弄されてばっかりもヤだし、あんたみたいな美女が相手だったら俺が主導権握りたいんすよ」
荒い呼吸を整えながら、挑戦的な瞳を返すラバック。獲物を狙うようなギラついた目に惚れ惚れするが、口から吐き出されたその言葉は、『雄とは既に経験済み』という事実を表していた。
名も知らぬ相手に、腸が煮え繰り返るような憤りが込み上がる。しかしならばそいつからラバックを奪ってしまえばいいと瞬時に思考を切り替え、落ち着きを取り戻す。
「まさか、お前に恋人がいたとはな……正直驚いた」
「……あんな奴、別に恋人じゃないですよ」
私の皮肉混じりの言葉から返ってきたのは、苦渋の表情。その顔からして、彼女は強姦されたのだと察する。
「強姦か……この私を惚れさせたラバックが汚らわしい雄共に狙われ

てしまうのは当然だと思うが、お前には警戒心がまだ足りん。その甘さを突かれてしまったのだろう」
「……」
警戒心の足りなさに心当たりがあるのか、否定も肯定もしないラバックは思わず附いて黙り込む。
「別にお前を責めているわけではないぞ？私が腹を立てているのは、貴様を襲ったその醜い雄だけだ。相手がわかり次第、私が直々に罰を与えてやるから安心しろ」
「っ!?」
クスリと微笑すると、ラバックの顔色が青く染まっていく。
恐らく、そいつを拷問する私を想像して、少し怯えてしまったのだろう。だがそんな怯えた顔も可愛らしい。S心が擽られ、もっと虐めたくなる。
「支配者は私だ。お前が経験した雄の味を、この私が忘れさせてやる」
その言葉を合図に、再び唇を重ねる。
負けじと拙いながらに私の舌を押し返そうとするラバック。しかし私はその舌をなぞるように舐め、彼女の行動を逆手に取る。
そしてついでにとラバックの白い太股を撫で上げた途端に、彼女はビクリと跳ねて力が抜けていった。
「んぅ、はぁ……、っ！そこ触るとか…反則、だろ……！」
「ふふ、少し意地悪だったか？だがこんな破廉恥な格好をしている貴様が悪い」
「うぐっ…！（何気に気に入ってる服だなんて恥ずかしくて言えない……！）」
脚の付け根が見えそうで見えないニットワンピを揶揄すると、ラバックは羞恥で頬を染める。
「それより、太股を撫でただけで感じてしまったのか？」
「そんなんじゃな…ひっ!?やっ、どこ触って……ひゃん！」
今度は布越しに、尻の割れ目をなぞってみた。それだけで目の前の少女は腰を抜かせて脱力する。
「ふふっ、これで勝者は私だな。今からたっぷり可愛がってやる」

それは、今から蹂躙してやるという宣言。絶対に逃がしはせん。
ラバックをベッドに横たわらせて、有無を言わせずに服と色気のないブラジャーを剥ぎ取ると、呼吸に合わせて上下に揺れ動く乳房とその飾りが現れた。
それを見てより一層興奮した私は、曲線を描く二つの果実の芽を片方摘まみ、もう片方の芽は口に含んだ。
「ふぁっ!?あっ！」
果実の芽が既にピンク色の固い突起物になっていたところから、彼女がキスで発情してしまったのが容易にわかる。
柔らかい乳房を下から揉んで形を変えながら、親指は乳輪をなぞったり固くなった突起を弾くように引っ掻いて遊び、口内では反対の突起を舌でコロコロと転がす。それだけでラバックの唇からは嬌声が絶えず漏れ出ていた。
その反応の良さに満足し、一旦胸から顔と手を離す。すると口で弄んだ方の芽は私の唾液でてらてらと光っていて、とても艶めかしいものだった。
それを恍惚とした表情で眺めた後、私は拷問用に常備している手錠を取り出す。手錠を視界に入れた彼女はまさかと呟くが、そのまさかである。
「ちょっと待って!?拘束プレイだなんて聞いてないって！」
慌てて制止の声を上げているが、私の手は止まらずラバックの両手に手錠を掛けた。
「性行為自体は初めてではないのだろう？普通にヤるだけでは物足りんだろうから、新しい趣向に目覚めさせてやろうと思ってな」
「あんたがSだからって俺はMじゃないんだぞ!?こんなん嬉しくねぇし目覚めたくないわ!!」
キャンキャンと仔犬のように吠える彼女を拘束した手錠から伸びた鎖を、天蓋の四隅にある柱の一つに繋げる。これで逃げ出す事は不可能だ。
そして私が次に取り出したのは、
「ちょっ!?今度は何持ってんすか!?その布何!?なんで俺の顔に近付け

んの!?」
「む？ただの目隠しだが？」
「何がただの目隠しだよ!?ほんと頼むからマニアックなプレイだけは勘弁してくれって……うわあぁーーッ!!?怖い怖い怖いっ！思った以上になんも見えねぇ!?」
適当に見繕った黒い布でラバックの目を隠すと、彼女は唯一自由に動かせる脚をバタつかせて暴れ出す。しかしそれは股の間入れた私の脚で制止させた。
「そう恐がる事はない。五感の中で脳への情報量が一番多い視界を遮ると、人は他の感覚が鋭くなるそうだぞ。すぐに気持ち良くなるから、少し力を抜け」
耳元でそう囁くと、ラバックはビクリと肩を揺らす。
そして私も衣服を全て脱いで、一枚の下着だけを穿いているラバックに身体を重ねた。
さて、愛しい仔犬（ラバック）の躾を始めようか。

修羅場を斬る

数少ない休日の早朝。兵士達がそれぞれ休暇を過ごし、兄も仕事探しで外出している為、今は誰も居ない筈の詰所。

どっかの女王サマに虐められたせいで寝不足の俺は、自分の兄が寝床にしているソファーを前に苛々している。その理由は……

「おい、なんでここに居んだよシュラのダンナ……」

目の前のソファーに、見慣れたゲス野郎が寝ていたからである。

「んあ?……ああ、お前か」

「ああ、お前か、じゃねぇよ。こっちはなんであんたがここに居んだっつってンの」

「なんでって……俺は暇だからここに来ただけだぜ?」

ですよねー。知ってたようん。なんかもうこいつの事だからなんとなく暇潰し目的だって察してた。

「ここはお前の遊び場じゃねぇ、早く帰れ」

「お前が居る時点でここは俺の遊び場だろ」

「ぶっ殺すぞてめぇ」

やはり俺は完全に玩具扱いされている模様。

俺を強姦したのはこいつだと昨夜エスデスにバレずに済んで思わずホッとしたけど、機嫌悪い時にこの態度されるといつも以上に殺意が沸くね。やっぱりバラしてこいつに然るべき罰を与えて貰うべきだったな。

「俺はお前の玩具じゃねぇ!そして今すぐそのソファーから降りろ!それは俺が今使う予定なの!」

「言ってる台詞がガキみてぇだぞお前」

「普段からガキみてぇに玩具言ってるてめぇにだけはガキって言われたかねぇよ!はよ退け!」

エスデスへの抵抗は失敗したが、今度こそは。こいつにだけはギャフンと言わせてやりたい。一方的にやられっぱなしでいられるかっつーの!だから折れる気はねぇ!

威嚇するように全力で殺気を向けると、シュラは若干引くように冷

や汗を流す。
「今日はやたらと機嫌悪ぃみてぇだな。……生理か？」
「ぶっ殺す」
　自分でも驚く程低いトーンで宣言する。もうこいつ死刑確定だわ。
「煮る、斬る、焼く、裂く、埋める。さぁどれがいい？それとも全部フルコースにしてやろうか？」
「おい、それに似た台詞どっかで聞いた事あるぞ。てめぇ知らねぇ筈だろうが」
　お前の記憶なんて知らねぇよと適当に流しつつ、腰に差してある剣を抜く。
「ああそうだ、良い事思い付いたぜ。あん時はてめぇにタマ一つ潰されたからなぁ……まずはその倍返しで二つ共潰す。その次は目ん玉くり貫いて…あと耳と鼻だっけか？」
　最高にゲッスい笑顔で、前世でシュラにやられた、そしてされそうだった拷問を述べる。すると先程まで余裕があった筈の彼の顔は、少し引き吊って歪み始めた。

「ははっ、そんな物騒な冗談言うなよラバック。それは一周目ン時の話だろ？今は敵じゃねぇんだし、もっと平和的に済ませようぜ？」
「は？例えアレがなくてもてめぇには恨みしかねぇよ。今までお前が俺にやってきた事全部振り返ってみろよ」
　シュラの言葉を一刀両断。こいつに貸す耳など持たん。
「それに敵じゃないからって味方でもねぇから平和もクソもねぇよこのゴミクズ野郎。って事でここがてめぇの墓場だ死ねェッ!!!」
　叫び声に合わせて、ソファーで寝転がっているシュラの急所に目掛けて剣を突き立てる。
　が、相手はやはり手強いようで。シュラはそれをギリギリのところで躱す。
　結果的にリネット兄さんが使用しているソファーは一部破けてしまい、綿も出てきてしまった。
「あっぶねぇ!?てめぇ！マジで殺す気かよ!?」

「当たり前だろうがこんにゃろう！避けんじゃねぇ！今日こそてめぇを血祭りにあげてやらぁっ!!」
　血走った目で何度も斬り掛かるが、全部避けられてシュラは無傷。おかげで俺の怒りのボルテージは上がっていく一方だ。
「早くこの安息の地から出てけ！こちとらあの部屋の地獄っぷりが増したせいでまともに寝れてねぇんだよ!!」
　安眠したいが為に剣を向ける。傍目から見たらくだらない理由だが、ドS様に情事の後も身体中に赤い跡を大量に付けられたりとしつこく愛撫されたせいで1、2時間程度しか寝れなかった俺としてはとても重要な話である。
「あの部屋？……あー…まーたエスデスの姉ちゃんになんかやられたってのか？」
　また振り回されたのか、と同情の目を向けてくるシュラ。
　大体当たってはいるんだけど、こいつに同情されるとなんか腹立つ。
「うるせぇ！いいからそこ退けって言っ……っ!!」
　再び文句を言おうとしたが、何かに気が付いた様子のシュラが上体を起こし、俺の頬に触れてきた。
　男の手って、こんなに大きかったっけ？と俺が思うくらいに大きく感じる。それに、意外と真面目に鍛練をしているのか、マメのようなものがあって少しゴツゴツしていた。
　でもその男らしい大きな手に対して、帝具を使って自室に忍び込まれた時みたいにドキッとしてしまったのは気のせいだと信じたい。
「……よく見たらお前、思いっきり隈出来てるじゃねぇか」
　まるで俺の事を心配するように、隈が浮き出ている目元を指でなぞられて思わず目を瞑る。
「そんなビビんなって。さっきの殺しに掛かってきた勢いはどこ行ったンだよ」
「べっ、別にビビってねーし！急に触られて驚いただけだっつーの！」
　至近距離で顔を見られている恥ずかしさで、頬が紅潮していく。
　びっくりしたから。そう、驚いたからである。そうに違いない。そ

れ以外に心音が速くなってる理由なんて無い筈だ。
「ったく、しゃーねぇな、退いてやるよ」
「なんでお前がそんな偉そうに言うんだよ!?」
我が物顔で寛いだりといい、何様なんだとツッコむ。
でも本当に退いてくれたので、俺は鞘に仕舞った剣をそのソファーの横に立て掛けてからダイブする。
先程破けたところは違和感があって気になるけど、今はそれよりも眠気が勝ってるから我慢した。
「変な事したらぶん殴るからな」
「へいへい」
全く信用出来ないシュラに、念の為釘を刺す。
そして俺はソファーに置いてあったクッションに顔を埋めて、限界だった眠気をすぐに受け入れた。

――眠ってから、どれくらいの時間が経過しただろうか？
気が付くと騒ぎ声のようなものが聞こえてきて、少しずつ意識が覚醒していく。
「寝てるラバに手を出そうとしてる曲者め！今すぐそこから離れろ!!」
「だから誤解だっつってンだろ!!俺は何もしてねぇ！」
……声や気配的にもどうやら二人のようだが、どっちも聞き覚えのある声だ。
「嘘こけ!!いくらうちのラバが可愛いからって君みたいな怪しい男が触るのは許さないよ！帰れ!!!」
「おわっ!!?!!今何掛けやがったてめぇ!?」
「ここの厨房に置いてある塩だよ！包丁を投げないだけ有難く思え！だから早く出てけ!!」
「俺は悪霊か何かだって言いてぇのかこの野郎ッ!!!」
「招かねざる客はみんなそうだよ!!!」
罵倒を浴びせられているのは、俺が寝てからもまだここに居たらし

い悪霊ことシュラ。そして室内で塩を撒くという奇怪な行動をしている男はシスコン兄貴ことリネットだった。
　除霊感覚で追い出す気かよと兄さんに言いたい。それとシュラにはお前はお前で包丁云々は無視しといて塩には文句言うのかよ、と叫んでこの二人を全力でツッコミたい。
　つかなんだこの口喧嘩。漫才か？漫才でもやってンのかお前ら？んなこたぁどうでもいいけど五月蝉いからもうちょっと静かにしてくれないかな？側で人が寝てるんだから静かにしよ？ね？
　睡眠中の俺に気を使ってくれる様子が一切ない二人に対して、苛々が募っていく。そりゃそうだ。やっと休めると思ったらこれなのだから。
　でもまだ寝ていたいからあいつらの事は無視しようと怒りを堪える。が、

「さっさと成仏して出て行けこの……あっ」
「あ」
　リネット兄さんが飛ばした大量の塩が、ソファーで寝ている俺の頭に掛かった。
　それを切っ掛けに、何かがプツリと切れたような音が鳴り、俺はむくりと起き上がった。
「あ、あれれ!?い、いつの間に起きてたんだねラバ！一応言っとくけど今のはわざとじゃないよ!?これはちょっとした事故で……」
「あ゛？」
「アッ、ナンデモナイデスゴメンナサイ」
　滝汗を流しながら兄さんが言い訳をしようとしたが、俺のドスの利いた声ですぐに縮こまった。
　完全にぶちキレてしまった妹に頭が上がらないとは、本当に情けない長男だ。もはや兄の威厳が無……いや、そんなものは最初から無いか。
「さっきからギャーギャー騒ぎやがって……人の安眠の邪魔すンじゃねぇよてめぇら」

わなわなと肩を震わせながら、蟀谷に青筋を浮かべる。
すると二人は少し後退り、恐る恐る口を開いた。
「えーっと……あの、ラバック…さん？」
「お、おい…いくら機嫌悪ぃからってそこまでキレなくても……」
「寝不足だっつってンのに寝てる横で騒がれたら誰だってぶちキレるに決まってンだろうがッ!!!」
ダンッ!!と怒りを込めてソファーを思いっきり殴る。その衝撃で先程破けた場所から再び綿が……。
「ちょっ!?それ僕の寝床なのにぃっ……！」
唯一の寝床としてこのソファーを愛用しているリネット兄さんがショックを受ける。だがしかしそんな事はスルー。
「こっちは朝からずっと苛々してンだよ……てめぇらが喧嘩しようとしまいがどうでもいい…が。静かに出来ねぇってンなら二人揃って他所行け!!」
「ラバ待って!?危ないからその剣仕舞って!?一旦落ち着こう？ね？お願いだから落ち着いて!?」
再び剣を手に取って怒りを露にすると、兄さんが必死に俺を宥めようとする。
けれどその一方であいつは怯えた素振りを見せず、ボソリとこう呟く。
「やっぱ生理か……」
刹那、俺は瞬時に奴の股間を蹴り上げた。
「〜〜〜〜〜ッッッ!!!!!」
シュラは蹴られた場所を押さえて倒れ込み、その場で蹲る。
声も出せないのは当然だ。アレは想像を絶する程の激痛が走るのだから。
でも本当なら気絶してもおかしくはないレベルの痛みな筈なんだが、彼の場合は潰れなかっただけまだマシだ。どちらにせよ暫く動けない事には変わりないが。
前世でアレ以上に酷い経験をした自分が一番よくわかっているのに、何故躊躇無く蹴ったのか。それはこいつへの復讐心と今の爆発し

た怒りが重なったからである。慈悲は無い。冷静になったら多少は反省すると思うが、後悔はしないと断言出来る。
「〜〜〜ッ!!（殺す…！ぜってぇ殺してやるこのクソアマ……ッ!!）」
　因みにシュラの後ろでは、リネット兄さんが口を押さえてガタガタと戦慄していた。
「（悪いのは明らかに彼だけど……痛い！見てるだけでも痛過ぎるよそれは…!!ラバック、恐ろしい子ッ!!）」
　そして溜まりに溜ったストレスを発散出来た俺は爽やかな笑顔に変わり、
「あー、スカッとした！さぁて、昼寝の邪魔されちまったし、とりあえずシャワーでも浴びよっとー」
　とだけ言い残して、二人を放置したまま部屋を出た。
　しかし俺が退出していた間、この詰所に訪れた兵士達が、悶え苦しむ大臣の息子と酷く怯えた様子の炊事係を見て暫く唖然としていたらしい。

悪々戯を斬る

あれから運良く誰も居ない浴場を満喫出来た入浴後。詰所に戻ってきた俺は片手間に髪をバスタオルで乾かしている。
「……まだ居たのかよお前」
俺が文句あり気にそう言い放った相手は、未だにこの詰所に居たシュラ。
なんとか多少は動けるようになったみたいだが、今すぐにでも噛み付かんばかりに俺を恨めしそうに睨んでいる。それでも殴りにこないのは、恐らくまだ先程の痛みが残っているからだろう。
「言っとくけど、そんな睨まれても俺は謝らねぇぞ」
「はっ、俺だっててめぇみたいなクソアマに謝る気はねぇよ」
殴りてぇ…ほんと殴りてぇわこいつ。今度こそ潰してやろうかこのクソ野郎。
「喧嘩はもう止しなよ二人共。ここでまた暴れたりでもしたら、ナジェンダさんに怒られちゃうよ？」
リネット兄さんの口から出た名前を聞いてすぐにハッとする。
マ、マズい……！これ以上暴れたらどころじゃねぇ！ソファーをボロボロにしちまったのがバレたらもうこの時点で怒られる…!!
シャワーを浴びた後だというのに、だらだらと大量の汗が全身に流れていくのを感じる。ナジェンダさんのお説教タイムが訪れてしまうのも時間の問題だ。
「っていうかラバ、髪ちゃんと乾かさないとダメだよ？風邪引いたりでもしたらどうするのさ」
「うわっぷ!!?」
兄さんが背後に回り、俺が持っていたタオルを奪って髪を丁寧に乾かし始めた。
「ちょっ!?もうガキじゃねぇんだからやめろって兄さん！そんぐらい自分で……」
「って言いながらまた雑になっちゃうからダーメ！それに、君は僕と違ってまだ未成年の子供でしょ」

言い返せない言葉にぐぬぬと唸る。そのまま我慢して大人しくするが、周囲に居る仲間達からの微笑ましそうな視線が恥ずかしい……。

そんな俺と兄さんのそのやり取りを見ていたシュラは、きょとんとした顔でこう聞いてきた。

「兄さんって……お前ら兄妹だったのか」

「そうだけど何か文句でもあるのかい？大臣の息子サマ」

驚いているシュラにジト目で返すリネット兄さん。どうやら俺が居ない間に他の兵士達からシュラが大臣の息子だという話を聞いていたらしい。

しかし相手の身分が良かろうとそうでなかろうと関係なく接するのがうちの兄。言いたい事ははっきり言うタチなので、誉め言葉から罵詈雑言までなんでもサラリと言ってしまう。

おかげで自分よりも身分の高いお嬢様相手でも、可愛けりゃ無意識に口説く事だってある。それでコロッと落とせてしまうのだから本当に憎たらしいったらありゃしねぇ。いつかこいつにブラートさんを押し付けて困らせてやりたいくらいに。

「……確かに言われてみりゃあ、睨む時の目元とか結構似てンな。よく見るとそっくりだわお前ら」

シュラにそう言われた途端に「え、そう？」とちょっと嬉しそうに照れる兄さん。だが俺としてはそれは嫌味にしか聞こえないし、

「全ッ然嬉しくねぇ」

「……それは兄に対して失礼じゃないかな妹よ？」

うへぇ…と嫌そうに言ったら悲しみを帯びた目で訴えられた。

悪いな兄さん。俺もあんたに似て自分の立場を気にせず言いたい放題言うタイプなんだ、許せ。

「つーか、それよりもこのソファーを早くどうにかしねぇと……」

逸れた話題を戻して、無惨に破けたソファーを横目で見やる。

少なからずとも、任務の作戦会議がある明日にはここに立ち寄るであろうナジェンダさんがこれを見たら確実に叱られるに違いない。彼女にキレられるのだけは本当に勘弁願いたい。でもここには裁縫

道具が置いてあるから、それを使えば破けた部分を縫う事が出来る筈だ。
　そこまで考えていると、リネット兄さんが俺の髪を乾かす手を止めた。
「はい、終わり。これで大体乾いた筈だよ」
「ん、サンキュ」
「どういたしまして」
　そしてそのまま、兄さんは髪の水分を吸って湿ったバスタオルを洗濯に出すと告げてドアノブに手を掛ける。しかしそのドアノブを回す前にピタリと止まって、彼はシュラの方へと振り向く。
「あ、えっと…シュラさん、だっけ？もう一度言っておきますけど、うちの妹には絶ッッッ対に手を出さないで下さいね？」
「へいへい、わーったよ。手ェ出さなきゃ良いんだろ？そんな怖ぇ顔すんなって」
　ダメ押しとばかりに釘を刺す兄さんに、シュラはひらひらと手を振って適当に返事する。
「ほんとにわかってるのかなぁ…？」
　訝げに呟く兄に同意して頷くが、当の本人は全く気にしてない様子。
　結局、リネット兄さんはタオルを持って洗濯機のある別の部屋へと渋々行ったのだった。
「……なぁ、前もああだったのか？あの兄ちゃん」
　周りに聞こえない小声で、シュラが俺に問い掛けてきた。
　答えるべきか一瞬迷ったが、仲間達が少し離れた場所に居るのを確認してから首を横に振る。
「いんや、前回はフツーのお兄さんだったぜ。帝都には一度も来てない筈だし」
「へぇ、じゃあお前が妹になっちまった事でシスコンになった、ってわけか……。なんか、性別変わっただけで色んな奴から愛されまくってるみてぇだな、お前」
「そりゃどーも」

嬉しくないどころかやっぱり嫌味にしか聞こえない言葉に口を尖らせる。
そこで俺は裁縫道具を取り出して、ソファーの前にしゃがみ込む。
「そういや、お前の帝具はまだ回収してねぇのか？」
慣れた手付きで針に糸を通していると、今度は俺の帝具について聞いてきた。恐らくこの糸を見て自分の最期を思い出したのだろう。
「クローステールは革命軍（あっち）で手に入れたからね。俺の相棒との感動の再会はまだまだ先さ」
こちら側の帝具の情報は決して吐いてはいけない。けどこいつは俺のクローステールやタツミのインクルシオを既に知ってるから、今更喋ろうが喋らなかろうが関係無いと思い、正直に教えてやる。
「なるほどな。それで糸の帝具の情報が今も一つもねぇってわけか」
「そゆこと。ま、帝国側に存在がバレたとしても、本部の場所が知られてない限り盗られる心配はねぇし、クローステールにはインクルシオとかみたいな奥の手もないから、革命軍（あっち）にとっては大した損害はねぇけどな」
というのは嘘。クローステールにだって奥の手はある。だが流石にそれはバレるわけにはいかないので、まずはあっさり情報を吐いたと見せかけてから簡単に欺けるように仕向けてみた。
「口ン中に隠し入れてたアレはちげぇのか？」
シュラの指すアレとは、こいつを殺す際に行ったあの騙し討ち。確かにアレは奥の手と思われてもおかしくはないかもしれないが……。
「あれは奥の手じゃなくて俺の柔軟な発想力と技量で編み出した超必殺技。ま、初見相手にしか使えないのが欠点だけどね」
「超必殺技、ねぇ……。奥の手でもねぇのに自分の身体ン中に帝具入れるって、よくそんな怖ぇ事してたなお前」
「一杯で十分な帝具を全部一気に飲み干したり、体内に爆弾仕込むとかいう帝国の狂人共に比べたらまだ可愛いもんさ」
それを聞いたシュラは「確かに…」と呟く。
そこで俺達の会話は途切れ、俺は黙ってソファーを縫う手を動かした。……のだが、突然シュラが俺の背中に抱き付いてきた。

「ッ!?な、なにしやが……んむっ!?」
「おっとぉ、あんまでけぇ声出すと、お仲間さんに聞こえちまうぜ？」
抗議の声を遮ぎるように、シュラは俺の口に指を入れてニタリとした笑みを見せる。
その後ろでは、こちらの様子に気付かないままいつものように談笑している仲間達の姿が。彼らに助けを求めたいのに、口の中で暴れる異物が邪魔で喋べれない。その邪魔な指を噛もうにも、舌の付け根まで入れられたそれが嘔吐感を促し、それは抵抗を拒むだけではなく目尻に涙を溜めていく。
くそっ、完全に油断した…!!やっぱりこいつが何もしねぇわけがなかった……！
だがシュラの悪戯はそれだけに留まらず、彼は俺の襟を捲り、それによって晒された首元をカプリと甘噛みする。
「ッ、あ…！んんっ！ぁ…、うっ！」
口内を蹂躙する指がいやらしい音を立てる中、噛み付かれた場所を強く吸われる。更には腰回りを撫でられ、昨夜エスデスに弄ばれたばかりの敏感な俺の身体は僅かな刺激を与えられただけで震え出し、嗚咽なのか喘ぎなのかわからない声を漏らしてしまう。
その快楽から逃げるように目の前のソファーに突っ伏すも、既に感じてしまっている確かな熱は誤魔化す事すら出来ない。
「ん。ここにあった跡、どうせエスデスの姉ちゃんにやられたんだろ？可哀想だから俺様のに塗り替えてやったぜ」
「〜〜〜ッ!!?」
襟で隠し通せていたと思い込んでいた赤い跡が気付かれていたという恥ずかしさで、思わずパニック状態に。その様子を見て愉快に笑うシュラが心底憎らしい。
「っは、げほっ！げほっ！はぁ…はぁ……っ、ふ、ふざけんな！誰もそんな事頼んでねぇよ馬鹿!!」
漸く指を抜いて貰った俺はすぐさま文句を言い、キッ！と睨みつける。だがシュラにはなんの効果もないらしく、奴は俺の唾液を絡めた指を舐めながらニヤニヤとしたゲス顔を絶やさずにいる。

「トマトてぇな顔で睨まれてもなんも怖かねぇよ。むしろ潤んだ目と唾液垂らした口端でエロく見えるだけだぜ？あ、それとも誘ってんのか？」
「っ！ンなわけねぇだろこの変態！死ねッ!!」
ヒュッ！
「!?!!」
ソファーを直す為に用意した針で、背後に居るシュラの目を狙って刺し掛かる。けど風を切ったそれは避けられ、彼の頬に掠り傷を負わせただけで終わってしまった。
「チッ！外したか……！」
「ほんとおっかねぇ姉ちゃんだな……」
俺が心底悔しそうにする一方で、シュラは冷ややかな汗をかいていた。
悪いのはてめぇだろうが。マジでそのタマ潰すぞこのゲス野郎……！
少し乱れた服装を整える間も針を光らせて牽制すると、シュラは降参だと言わんばかりに両手を上げて離れていく。
「洗濯物干してきたよー……って、あれ？どうしたの二人共？また喧嘩したのかい？」
何も知らずに帰ってきたリネット兄さんが、俺とシュラの険悪なムードを読み取って首を傾げる。
だが俺は不機嫌丸出しな態度で「別に」と答え、何事もなかったかのように作業を再開させ、再びソファーを縫っていく。
不思議そうにしている彼は疑問府を浮かべるが、すぐにハッとした様子で何かに気付いた。
「シュラさん血！血が出てるよ!?早く手当てしないと！」
シュラの頬に伝う血を見て、こいつの本性をまだ知らない兄さんが慌てて救急箱を取り出そうとする。
だがシュラはそれを断り、「そこのじゃじゃ馬娘にまた蹴られる前に帰る」と告げて部屋から逃げ帰って行った。
それからはまたいつも通りの日常。結局縫い目でナジェンダさん

にバレて叱られたが、騒がしい午前中は穏やかな午後へと変わり、今日は平和に一日が終わってくれた。……かと思ったら、夜中にまたエスデスに虐められて寝不足を繰り返したのは言うまでもない。

密談を斬る

「――……そうか。お前も離反(そっち)を選んだんだな」
「はい。帝国(あいつら)に歯向かう覚悟は、とっくのとうに出来てます」
バン族討伐後のある日。漸く意を決した俺は、ナジェンダさんの執務室で対談を申し出ていた。内容は見ての通り、帝国の離反。
俺は前世と同じように自分の記録を死亡扱いにして偽装し、軍からの逃亡を謀るという相談を彼女に話した。
前回と違うのは決行のタイミング。偽装した後すぐ、ナジェンダさん達よりも一足先にファーム山の軍事基地に立ち寄ってから革命軍本部へと行き、本部隊にナジェンダ軍との合流を催促するのが俺の算段だ。ただ、もう一つの違い…いや、問題は……、
「帝国やエスデスの目を欺く策としては良いと思うが……何も知らんリネットが悲しむぞ？」
そう、前世では起きなかった想定外、帝都に来てしまった兄の存在である。けれど、
「……革命軍(向こう)に行ったら、あの人達を巻き込んじゃうんで……だから、やるべき事を全部終わらせるまでは、なるべく他人でいたいんです」
俺の離反がバレたら、リネット兄さんだけではなく実家に居る家族も帝国の人質になるか…最悪の場合はその場で殺されかねない。でもナジェンダさんの言う通り、自分の死を偽装したあの時、実家に居る家族への罪悪感はあった。本当は今も、その気持ちでいっぱいだ。
それでも、ナジェンダさんに付いて行くと決めたあの時、俺は覚悟したんだ。この先また何があろうと、その決意だけは絶対に変わらない。
顔色を変えずに、ナジェンダさんの目を真っ直ぐに見つめる。すると彼女は諦めたように深い溜め息を吐いた。
「……わかった。私も出来る限り協力しよう」
私の負けだ。そう呟いた彼女の顔は、どこか嬉しそうでもあった。
……しかしその時、部屋の外から誰かが走り出す足音がした。
「……聞かれてしまったか。急いで取っ捕まえないとな」

「……いえ、俺が行きます。今のが誰なのかは、足音でなんとなく察してますから」

～リネットｓｉｄｅ～

ラバックとナジェンダさんが、帝国を離反する…？それにあの会話……まさか、二人は帝国を裏切って反乱軍に入るつもりなんじゃ…？

通りすがり際に偶然聞いてしまった妹とその上司の密談。その内容に動揺を隠し切れない僕は、どこに行くでもなくただただ走る。もう自分が今どこに居るのかさえわからない程に。

この国はおかしい。それは帝都の街で色んな人達に出会って薄々感じていた。皇帝を操る大臣による悪政の数々。その噂も幾度か耳にしていた。恐らくそれが、ラバックとナジェンダさんが軍を脱走しようとする理由なんだろうなと頭では理解出来た。

だけど、その為に妹が自ら自分の存在を消そうとするなんて……。僕にはそれがショックで仕方がなかった。

「あー居た居た！やっと追い付いたぜ兄さん！」

「!!ラバ……」

後ろから走って声を掛けてきたのは、愛する妹のラバック。追い付いた、という事は、聞いてしまったのがバレていたらしい。

マズい……あれは明らかに厳密な内容だったから、怒られるだけで済むか怪しい。

「ご、ごめんラバ……僕、盗み聞きするつもりは……」

「なかったんだろ？そんぐらいわかってるって」

へらへらと笑うその様子に、怒っていないのがわかってホッとする。……が、

「……ただ、聞かれちゃったのには変わりないからね。ちょっと付いて来て貰うよ、兄さん」

スッと目を細めて口に孤を描くラバックは、やはり僕をただで帰すつもりはなさそうだった。

「――とまぁ、俺らは帝国の腐りっぷりとエスデス軍の残忍さに付いて行けなくなっちまってさ……」
「だから革命軍に入って、民の為にも外側から今の帝国を壊そう…って事？」
「そゆこと」
　帝都近郊の鬱蒼とした場所にひっそりと建つ廃屋。そこに連れて来られた僕は、目の前で片足を立てて座る妹から、帝国を離反して革命軍に入ろうとする理由を教えて貰っていた。
「噂には聞いていたけど、帝国の悪政ってそこまで酷かったんだね……」
「それもこれも全部皇帝陛下を操ってるオネスト大臣の仕業。だから俺達の最終目標は、その諸悪の根元を殺す事」
　ラバックの口から出た『殺す』の一言に含まれる鋭く尖った殺意に、思わず固唾を飲む。まるで親の仇を見るようなその迫力は、聞いてるだけの僕すらも畏縮してしまう程凄まじかった。
「だからさ、兄さんには実家（あっち）に帰って欲しいんだ。さっきの話聞いてたならわかるだろ？」
　切実に願うように懇願してくるラバック。その時、『巻き込みたくない』と言っていた彼女の言葉が脳内でリピートされる。……けれど僕は――

～ラバックｓｉｄｅ～
「……わかった、なんて言うと思った？」
　一人で実家には帰らない。兄さんはそう告げる。
　ナジェンダさんとの密談を聞かれてしまったのなら仕方ないと思って、誤解を招かないよう、彼女が謀反を起こそうとしている理由を全て話した。だが、想定内の返答に俺は不満気な表情を露にして、兄が詰所に居座り始める際にした会話の一部を掘り返す。
「首突っ込まないって言ったじゃねぇか」

「それは帝国軍のお仕事には、だよ。ここまで聞いて知らんぷりなんて出来ない」
「帝国と戦おうとする妹を放っておけねぇってか？へっ、怖がりの癖にかっこいい事言うねぇ」
　屁理屈を述べられてムッとし、嫌味のついでに鼻で笑う。それでもリネット兄さんは、
「怖がりなのはラバもでしょ？ここで放っておいたら兄失格だよ。だから仲間外れにしないで、いっそ思いっきり巻き込んで欲しいんだ」
　重っ苦しい場の空気に似合わない、ニッコリとした屈託の無い笑顔。その様子に俺は目を見開く。
「って事でさ、怖いけどその作戦に僕も参加させて。大事な妹の為ならなんでもするよ！」
　えっへん！と何故か自信満々なのはちょっと不安だが、意外と頑固なとこがあるこいつには、これ以上説得しても聞いてくれなさそうだ。
「はぁ～…やっぱ言わなきゃ良かったなぁ……。クローステールがあればナジェンダさんとの会話も聞かれずに済んだってのに……」
「ん？何か言ったかい？」
「……なんでもない」
　ガシガシと頭を掻き毟って、今更後悔しても仕方ない、と割り切る。
　まぁ、革命軍は殺しだけが仕事じゃないからな。結局巻き込んじまったのは申し訳ねぇけど、戦闘経験の無い兄さんには密偵や工作員として働いて貰おう。
「作戦はまた後で説明する。先ずは兄さんが加わるのをナジェンダさんに伝えといた方が……っ!!」
　一瞬だけ、外から人の気配を感じて咄嗟に振り向く。
「ラバ？もしかして誰か居たの？」
「……いや、気のせいだった。悪いけど俺ちょっと用事思い出したから、先にナジェンダさんのとこ行っててくれねぇかな？」
「？うん、わかった。遠いから暗くなる前に帰るんだよ？」
「ん、大丈夫。すぐ終わらせる」

それより早くナジェンダさんに伝えてくれと廃屋から追い出すように背中を軽く押す。そうやって急に催促する俺に少し戸惑いながらも、兄さんは素直に応じて宮殿へと戻って行ってくれた。

それをしっかり確認した俺は、先程の気配を感じた場所に視線を移した。

「……そこに居るんだろ？シュラのダンナ」

最悪な事に、そこに居たのは暗殺の最終目標であるオネスト大臣の息子、シュラであった。

交渉を斬る

「もうバレちまったか。ほんとなら作戦とやらの内容も聞きたかったんだがな。流石は元暗殺者ってとこか？」

くつくつと笑って姿を現したシュラ。それとは対照的に、俺には緊張感が走り、冷ややかな汗が頬に伝わる。

「……いつからそこに居やがった？」

「お前がリネットの兄ちゃんと一緒に宮殿を出たのを見掛けてな。裏で生きてたお前に違和感はなかったが、挙動不審な兄ちゃんの動きが兄妹仲良くお出掛け、って感じじゃなかったから、後を追わせて貰ったぜ」

「このストーカー野郎が…!!」

苛立ちを隠さず舌打ちする。

顔に出やすい兄さんの動きで誰かにバレる可能性は危惧していたが、まさか宮殿を出た時からこいつに尾行されていたとは……。前世で帝具に頼りっきりだったのも仇になってるのか、やはり警戒心がまだ足りなかったようだ。

どうする？ここで殺すか？けど相手はステゴロが得意な肉弾戦タイプ。おまけに瞬間移動が可能な帝具もある。反射的に剣の柄に手を伸ばすが、こちらが圧倒的に不利なのは一目瞭然だ。

緊急事態を前に思考をフル回転させても焦燥が募るばかり。今は相手に睨みを利かせて牽制するので精一杯だ。

「おいおい、そんな警戒すんなよ。こっちは交渉しに来たんだ」

「交渉…？どうせろくな事じゃねぇだろ」

「まぁ話ぐらい聞いとけよ」

余裕のある笑みを浮かべているシュラに、より一層警戒心を強めていく。すると彼は、予想だにしなかった衝撃的な発言をした。

「この話を親父達にバラさないでいてやる。その代わり、俺を革命軍に入れろ」

「はぁ!?!!」

これでどうだ、と両腕を組むシュラを凝視する。

「いきなり何言ってんだてめぇ…。まさか、スパイとして潜入して革命軍を内側から壊そうって魂胆か？ンな事させるわけ……」
「ちげぇよ、本気で入れろって言ってんだ。ま、俺は大臣の息子だし一周目の事もあるから、お前に疑われるのは当然だけどよ」
「!!?」
　やけに冷静な態度で告げるシュラ。こいつの言ってる事がますますわからなくなってきた。
「じゃあ一体何が目的なんだ？全部吐け。じゃないと交渉もクソもねぇよ！」
「……はぁ、しゃーねぇなぁ」
　威嚇するように睨むと、そいつはすぐに観念した。
「俺はよ、前回と同じ事繰り返してもつまらねぇんだよ。だから今回は帝国の敵に回って、外側から今度こそ親父を越えてやる。それが俺の最終目標だ」
「大臣を越える…？」
「ああ、帝国の頂点にある椅子から親父を引き摺り降ろして嘲笑う。これって最高の親孝行だと思わねぇか？」
「……そりゃあ随分ととち狂った親孝行だな。…でもま、あのクズには最高の親孝行だとは思うぜ」
　そこには同意してやるよ、と頷く。だが、
「で、他は？目的はそれだけじゃないんだろ？」
「……ナイトレイドに入って味方になれば、お前を落とすチャンスが大幅に増えるから」
「……はっ？」
　今なんて？俺を落とす？……ハッ！まさかこいつ…!?
「お前を殺した俺を地獄に落とすって事か!?」
「いや、ガチでそんな勘違いされっと地味に傷付くんだが……」
「じゃあどういう意味だよ!?」
「俺に惚れさせる」
「……真面目に聞いた俺がバカだったわ。今日はもう解散な」
　スッと表情を消した俺はシュラに背を向けて足早に帰ろうとする。

でも後ろから腕を掴まれ、阻止されてしまう。
「おいこら待て！最後まで話聞けっつーの！」
「聞けるかアホ!!俺はホモに興味はねぇんだよ！つーかそもそもお前はいつも美人なお姉さん達と遊んでるだろうが！死ねッ!!」
今は女だろとかそんな事は言っちゃあいけない。俺からしたらこいつは正真正銘のホモだ。あとわかっているとは思うが、最後のところは完全にただの私怨である。
「あー……あいつらはもう飽きた」
「かーーーっ!!出たよそういうの！女を取っ変え引っ変えするクソ野郎の定番台詞！何が飽きただよ死ね!!!地獄の底まで落ちろ!!」
ピッ！と自分の首の前で親指を横に引く。傍目から見たらほんとにただの逆恨みだ。しかしシュラは、
「……他の女抱いても、お前の顔が出てくんだから仕方ねぇだろうが」
フイッと、どこか気まずそうに顔を逸らしていた。俺はその言葉を理解するまで、何秒か固まる。
そして次の瞬間、ボッと火が付いたように顔が熱くなった。
「なっ、なななっ!!?なんでそうなるんだよ!?」
「……リアクション遅くねぇか？」
そんなツッコミに返す余裕が無い程、今の俺の頭ン中はパニック状態だった。
「ガチなの!?それガチなヤツなのか!?中身が男な上に自分を殺した相手に惚れるって……笑えねぇ冗談はやめろよてめぇ!!」
「残念ながらガチなんだよなこれ。つーわけで抱かせろ」
「そんなわけが通じて堪るかボケェッ!!それではいどうぞとでも言うと思ったのか!?」
「でもどーせエスデスには毎晩のように抱かれてるんだろ？」
「っ!!そ、それは……！」
突然出てきたエスデスの名前にまた顔を赤くして狼狽えると、シュラは俺の態度が気に食わなかったのか、表情を歪ませる。
「……図星なのかよ」
「あっ！いや、い、今のはちがっ…！エスデスとは同室だから、抵抗出

来なくて、その……」
　鬼気迫るように問い詰めてくるシュラが急に怖くなり、思わず縮こまって涙目になってしまう。すると彼はぎょっとした。
「な、なんで泣くんだよ!?」
「なっ、泣いてねぇし!!目にゴミが入っただけだ！」
　目元を強く擦って、涙を誤魔化す時の定番な台詞を言う。さっき自分で言った言葉がブーメランになって帰ってきた。
　人の事が言えないじゃねぇかと文句を言われるかと思ったが、そんな俺の予想を裏切るかのように、シュラは思いもよらない行動をする。
　涙を拭う俺の手を退けて、自分と目を合わせるように俺の顎を掬い上げてきた。でもそれを認識する前に、唇を塞がれる。
「んんっ……！」
　なぞるように舐められた下唇のくすぐったさに思わず唇を緩めると、その開いた隙間に舌を押し込まれ、口内への侵入を許してしまう。
「んっ、ふぅ……ぁ…んぅ……！」
　以前までは乱暴に貪るようだった筈のシュラの深いキスは、たどたどしくもゆっくりと、じっくりと味わうように少しずつ角度を変えながら舌を絡めて、俺に絶妙な刺激を与えていく。
「ぅ…ん、くる、し……っ！」
　息苦しさに弱々しく肩を押し返したら、意外にすんなりと唇を離してくれた。
　でもこいつがこれだけで満足するわけがないと知ってる俺は、次はどこを触られるのかという恐怖を胸に身構え、強く目を瞑る。が、シュラは涙で湿った睫毛を気にする様子もなく瞼にキスを落としてきた。
　今までの激しいやり方とは全く違うシュラの優しい愛撫に戸惑いを隠し切れない。でも僅かに感じる熱がもどかしくも感じ、どこかでこの先を期待している自分がいた。……けれど。
「っ！いい加減に、しろッ!!」
「ごふっ!?!!」

羞恥に耐えかねた理性の勝利。キスに夢中になっていたシュラの腹に、拳を一発入れた。そいつは完全に油断していたようで、腕の中から解放された事に安堵する。
「い、いくらなんでも腹パンはねぇだろ……」
「じゃあ顎にアッパーでも決めて欲しかったか？それとも頭突き？」
「……どれも勘弁だ」
想像でもしたのか、シュラの顔がげんなりと青褪めていく。
何故いつもの乱暴なやり方と違ったのかという疑問も聞きたかったけど、なんとなく聞かない方が良い気がしてやめた。でもそれより、また襲われ掛けるのが嫌だったからこれ以上この話はしたくなかった。
「で、どっかのキス魔のせいで話がズレちまったけど、いつ大臣達にバラすつもりだ？」
顔を袖で拭いながら、何もなかったかのように平然を装って話を戻す。でも心臓はまだバクバクと鳴っていて、耳を塞ぎたくなる程五月蝉い。
「……じゃあ逆に聞くけどよ、どうすりゃ信じてくれんだ？」
「ん？んー、そうだな……お前が帝国に指名手配でもされりゃあ少しは信じられるかもな」
「……それアリだな」
「へ？」
適当に受け答えすると、シュラはニヤリとして呟き、俺の口からは間抜けな声が落ちた。
「俺が親父を裏切った証拠があれば良いんだろ？ならお前が離反するタイミングに合わせて、親父に攻撃仕掛けてからシャンバラでここに逃げりゃあ完璧だな」
「えっ？……は!?ちょっ、マジでやる気なのお前!?」
ドヤァ！と自信に満ち溢れた顔をしているが、言ってる事は滅茶苦茶だ。やっぱバカだこいつ……！
それから奴は「早速作戦立てて準備しねぇとな。出来れば親父に一撃入れてみてぇし」とか何故かウキウキして呟いてから、こっちが唖

然としている内にシャンバラで帰ってしまった。
「う、嘘だろ…？なんだこの展開……。これじゃあ俺が考えてた計画が全部台無しじゃねぇか!!!」
偶然に偶然が重なったせいで崩れていった俺の計画。それを容赦無くぶっ壊していった二人にキレて一人叫ぶ。
逃げられた以上、もうあいつを信じるしかあるまい。だがナジェンダさんには報告と謝罪をせねば……。
今回はどんな怒号が降ってくるのか楽しみだなー…なんて気楽に思えるか畜生。これ絶対に説教で済まねぇから余計怖ぇよぉ……超久々にボッコボッコにされるよぉ……!!
ナジェンダさんから鉄槌を下される想像をするだけで全身がガタガタと震え上がる。
ああ、もう……ほんと何もかもが憂鬱になってきた……。

勧誘を斬る

「……で、そのまま奴を逃がしてしまったわけか」
「はい……ほんっっっとうにすみませんでした」
　笑顔なのに鬼神を思わせるようなプレッシャーを放つナジェンダさんと、正座した状態で頭部に出来たたんこぶの痛みにしくしくと頬を濡らす俺ラバックは、本日二度目の密会をしていた。前回この場に居なかったリネット兄さんを交えて。
　初めてこの部屋に入った兄さんは、最初は緊張感でそわそわしていたが、今は目の前で上司の拳骨を食らった俺を心配してあわあわとしている。
「あ、あの、ナジェンダさん…も、もうそこまでにしてあげ……」
「ああ、そうだ。リネット、我々について来るつもりなら、お前にはこれからうちの軍で働いて貰うぞ」
「へあっ!!?」
　諌めようとした途端にギラリと獲物見るような鋭い眼光を向けられて、いつも以上に情けない声を上げる兄さん。
　シュラにバレる原因となった自分に矛先が向くのはわかっていただろうが、まさかそんな形でくるとは思っていなかったようだ。
　まぁ、こっちの世界に来てしまうのなら、少しでも帝国軍についての知識や情報を直に知った方が良いもんな。
「なに、そんな怯えずとも、私はお前に戦いを強いてるわけじゃない。素人でも出来そうな簡単な書類作業を押し付け…ン〝ン〝ッ！任せたいだけだ」
「（今絶対『押し付けたい』って言おうとしたなこの人……）」
　咳払いで誤魔化された部分に内心ツッコむと、それに勘付いた上司が眉を寄せる。
「なんだその目は」
「ナンデモナイデス」
　よく口にせず我慢したな俺ら、って自分達を誉めたくなる程の威圧を放たれた。流石ナジェンダさん、睨むだけでこちらを黙らせられ

る。
　それから離反作戦についての変更点を三人で…といっても兄さんはほんど相槌を打つだけだったが話し合った。
　結論だけを言うと、俺とナジェンダさんの帝国軍脱走計画は元々俺が偽装死した日の内に革命軍に行く予定だったのだが、当日は先日の廃屋で一晩隠れ、その翌日に兄さんと合流して出発する事になった。
　ナジェンダ軍のデスクワークを手伝わせる事になるとはいえ、兵士でもない一般人のリネット兄さんが、なんの前触れもなく突然ナジェンダ軍と一緒に帝都を出るのは怪し過ぎるからな。だったら俺の死を聞いてかなりのショックを受け、家族に直接報告する為にも実家へ帰るという体で前記のように俺と二人で行った方が良い。
　いくらなんでも妹の死の翌日に帰るって可笑しくないか？と周りに思われる心配はある。が、そこはナジェンダさんがフォローしてくれるみたいだから多少の不審感は軽減される…と思う。多分。っていうかもう祈るしかねぇ……。
　ナジェンダさんの執務室を出た後。二人で静かな廊下を歩いていると、兄さんは身震いするようにして呟く。
「はぁ…改めて話聞くと、もう緊張してきた……」
「早ぇなおい。まだ前日ですらないのにそんな緊張するって、本当に大丈夫なのかよ？頼むから顔には絶対出すなよ。そのせいでシュラの奴にバレちまったんだからさ」
「う〝っ…！そ、それについてはほんと反省してる……。これ以上足引っ張らない為にも頑張って演技力を身に付けるよ」
　そう言ってぎこちない笑みを作る兄に、やれやれと嘆息を漏らす。
「にしても、僕なんかに軍のお仕事が出来るのかな…？」
　ポツリと出てきた新たな不安の声。それに対して俺は、
「ふっ、そう不安に思わず、軍についての勉強だと思え。ニート同様のお前にはちょうど良い仕事だろう？」
　キリッとした顔で、その不安を吹き飛ばしてやろうと自分の最大限のイケボを出して言う。でも兄さんの反応は、
「……もしかして、それってナジェンダさんの物真似？」

「……何も言うな」
苦笑した兄の様子に自分がスベッたのを自覚し、みるみると顔が赤くなっていく。
そんな俺は逸らした顔を片手で押さえ、もう片方の手は兄を制止するように伸ばして、自分が行った悪ふざけを後悔する。
ああ、やっちまった……。多分ナジェンダさんには言わないでいてくれると思うけど、これは暫くこいつにイジられるな……無念…っ!!
悔し涙を流しそうな気持ちを必死に堪える俺は、最愛の上司の物真似という黒歴史を、自分と兄の記憶に刻んでしまったのだった。

――それから時は早く流れ、俺の偽装死を実行する前日…と言っても既に夜中で、エスデスと寝る準備をしていたのだが。
あの後、俺とナジェンダさんは各々空いた時間にシュラを探したが、一度も見ていない。恐らく宮殿の奥…自宅にずっと籠っているのだろう。いつも神出鬼没に現れる癖に、こういう時に限って隠れて出て来ないとは卑怯なり…!
でもそれと同時に、あいつが誰かに告げ口をしたという話は一度も聞かなかった。まぁ、バレてる事がこちらに気付かれないよう大騒ぎしてないだけかもしれないが……どちらにせよ、警戒を強める必要がある。
そんな懸念や明日に向けた緊張感を解かぬまま、いつも通り部屋着姿でベッドの上に座っていると、隣に居たエスデスが心配そうに俺の顔を覗き込んできた。
「ラバック、ここ最近ずっと上の空のようだが、どうかしたのか?」
「え?あ、いや…ちょっと考え事があるっていうかなんつーか……」
明日から実行する計画や、杞憂でいて欲しい心配事…主に現在行方を眩ませているシュラと不安が残る兄さんについて。そればかりを考えていたが、エスデスに言えるわけもなく。
ただ、寝てしまう前に一つだけ。彼女に無言の別れを告げる前に、これだけは一か八か試してみたい。

そう思って意を決した俺は、エスデスの正面に向き直して息を飲む。そしてその次の瞬間に行った俺の行動は……。

「……エスデス将軍。俺と一緒に、反乱軍に入りませんか？」

超必殺！上目使遣い!!!

これはただの上目遣いではない。困り果てたように眉を下げながら目を潤ませ、甘えるように相手の袖を遠慮気味に掴んだ俺の新しい必殺技だ。

どーせ乙女心も知らないタツミは正面から懇願しただけなんだろうが、俺はあいつとはちげぇ。俺は意図的に萌えを作って誘惑してやるんだ！そしてこれで落ちない乙女なんていないわけがねぇ！既に攻略済みなら尚の事！さぁ！この話に乗れエスデス!!その瞬間からお前は俺の操り人形になるんだッ!!

健気で可愛らしい顔を作る一方、内心は真っ黒な笑顔。所謂腹黒というやつである。俺は漫画知識で培ってきたモテテク（実践で成果を出せた事は一度もない）を使って、エスデスを革命軍側に勧誘しようとしているのだ。

シュラと同じクズだと思われそうなのは癪だが、そんなこたぁ今はどうでもいい！俺は散々振り回してきたこの女から勝利を納めるんだッ!!

そんなゲッスい策略を知らないエスデスは、俺の頬にスッと両手を添えてきた。

落ちた…！これは間違いなく落ちた……！いよっしゃあぁ!!俺の勝ちだあああぁッ!!!見たかタツミィ!!これで俺の方が年上キラーのお前よりも女性の攻略スキルが高い事が証明出来たぜ！お姉さん受けが良いのはこの俺だあああぁーッ!!!

男としてではなく女の自分が、という重大な部分をすっかり忘れて、顔に出ないよう心の奥底で興奮して勝利の舞をする。……が、しかし。

ぐにぃーーっと、エスデスの手は俺の頬をモチのように引っ張っていた。

「何すんですか!!?（はひふんへふは）離して下さいっ!!（ふぁはひへふはは）」

「可愛い顔でいきなり何を言い出すのかと思えば、そんな事か」
落胆したように溜め息を吐きながら俺のほっぺたを好き放題に伸ばすエスデスに離せと必死に訴える。
すると彼女はやっと手を離し、俺はヒリヒリする頬を擦った。
「人が真剣な話してる最中に何するんですか!?あれ地味に痛いからやめて下さい！」
「今のはくだらない話を持ち掛けてきたラバックが悪い。おかげで興が醒めてしまったぞ」
「!!」
やれやれと呆れる様は、『ＮＯ』という意味を表していた。
「帝国が終われば、楽しい戦が無くなってしまうだろう？私は自分の最期まで戦いたいから帝国に居るんだ。それなのに自ら壊すなど、愚行に過ぎん」
「……そのせいで生まれる犠牲には、本当に何とも思わないんですか…？」
「私が弱者の気持ちなどわかるわけがなかろう？この世は弱肉強食。弱者は強者に淘汰されて当然だ」
淡々と吐き出されたその返答が、俺の中で僅かに残っていた小さな希望をぶち壊す。
最初の頃は、彼女の事を強大な標的としか捉えていなかったのに、気が付けば色んな感情を抱いてしまっていた。
よく振り回されて怒ったり呆れたりするけど、心の隅では嬉しく思ったり、楽しく感じたり……。そうやって一緒に居る内に、『ただの標的』から『親しい人物』に変わっていた。
だけど、目の前にある現実はあまりにも非情だった。
「そう、だよな……変わってくれるわけ、ねぇか」
思わず震える小さな声。その呟きは、俺の想いと共にエスデスに届いてはいない。
「……変な事言い出してすみませんでした。今のは全部忘れて下さい」
割り切ろう。この女との戦いは避けられないのだから……。時に

は諦めも肝心だ。
調子に乗って浮かれていた自分がバカみたいだと俯くと、頭の上にすっかり見慣れた白く細い手を乗せられた。
「すまないラバック、私も少し冷たく言い過ぎた。だからそんなに落ち込まないでくれ」
先程とは打って変わった優しい声色。その暖かさを、他の人間達にも与えてやって欲しいと心の底から思う。
「……すみません、今日はなんか体調が悪いんで、先に寝てちゃっても良いですか？」
「むぅ…そうか。今夜も可愛がってやりたいところだったが、体調が優れないというなら仕方ない。今夜は抱き枕で我慢してやろう」
あ、抱き枕はやめてくれないんだ…？それだけは絶対なのね…？出来ればやめて欲しいけど、返事も聞かずにもう抱き枕にするんだね…？うん、なんかここ最近ずっと流れ作業みたいにこうなってて泣きたいわ俺。
若干呆れながらも、これで彼女と寝るのは最後だと思うと、少し感傷的になってしまう。
セクハラとかされるのはほんっっっっとに嫌だったけど、この人と一緒に生活するのも、案外悪くなかったな。
明日の任務に赴く瞬間、それは彼女との決別になる。その次に会う事があれば、それはお互い敵同士だ。
しんみりとした感情を密かに抱いていると、背に回された手が俺の身体をより一層強く抱き締めた。
大丈夫、私が居るから寂しくない。寂しさに泣く子供をあやすようにそう言われてた気がして、俺はより一層彼女への罪悪感と悲しみに沈んでいった。

――そしてその夜が明けた翌日。俺は無事任務先で死んだ事になった。

待ち合わせを斬る

昼だというのに周りの木々によって薄暗い廃屋。周囲に人の気配がないその場所に集まった男女が、三者三様の反応を見せていた。

「……なぁ、兄さん。ここで俺とあんたが合流するまでは予定通りだけどよ……」

「……なんだい？」

「なんでシュラが一緒に来てんだよ」

一人は顰め面。一人は困惑の色が混じった苦渋の表情。最後の一人はどこ吹く風と聞き流している。

この廃屋に集まる約束。それはラバックとリネットの二人だけの筈だったが、そのタイミングを図ったかのようにリネットと共に現れたのは、彼女達にとっては招かねざる客、シュラ。

彼がここに居る理由は、数分程前に遡る。

～リネットｓｉｄｅ～

準備を済ませ、お世話になった人達に別れの挨拶を終えた後。旅路に必要な荷物を抱えた僕は、宮殿の敷地から出るまで顔見知りの兵士達に見送って貰おうとしていた。

「なんか、凄く罪悪感を感じるなぁ……」

周りに聞こえないようにボソリと呟く。

予定通り実家に帰ると告げた時は、みんな驚きつつも寝不足でやつれた顔の僕を見て無理もないと言んばかりに慰めてくれた。でも妹とその上司の為とはいえ、親しくなった彼らを騙しているのには変わらない。その罪悪感は恐らくずっと拭えないと思うと、胸が苦しい。

きっと、彼らは僕の寝不足の原因はショックによるものだと思い込んでいるんだろうけど、本当はただ緊張して眠れなかっただけ。そのおかげであまり怪しまれずに上手くいったっていうのもなんだか申し訳ない……。

緊張や罪悪感、そして帝都で出来た友人達との別れという寂しさ

で、もうよくわからないけどとにかく押し潰されそうな気分に陥りながら重い足を前に運ぶ。
　するとその時、宮殿の奥から大きな爆発音がした。
「な、何事だ!!?」
「おい！あの煙が出てる場所って謁見の間じゃないか!?」
　突然の出来事にざわめく中、側に居た兵士の一人が遠目で見える黒煙が上がる場所を指差し、騒然とする。なによりも驚きなのは、そこが皇帝陛下が居る謁見の間だという事。
　僕はというと、突然起きた騒動に頭が追い付かず、ただただ目を張るだけだった。
　しかしその視線の先…謁見の間で割れた窓の先に、人影のようなものが見えた気がした。
　と思ったのも束の間で。それは僕の真横を通り過ぎるように勢い良く吹っ飛んできた。早い展開に驚きの声すら出ず、思わず立ち止まったまま唖然とする。
「〜〜っ!!あンのカミナリジジィ…邪魔しやがって…!!」
　吹っ飛んできた何かの呻き声にハッとし、反射的に振り向く。するとそこに居たのは、
「シ、シュラさん!!?」
　最近探してもずっと見つからないと頭を抱えていた妹の悩みの種の一つ、銀髪の掛かった褐色肌の顔に付いた十文字の傷跡が特徴的なシュラさん。
　そんな彼は今、大の字で倒れた状態でかなり辛そうに表情を歪め、そこが痛いのか腹を押さえている。怪我でもしたのかと心配した僕は彼の元へと駆け寄った。
　もしかしてさっき飛んできたのってこの人!?すんごい勢いだったけど、あそこで一体何があったんだ!?
　気になってもう一度先程の爆発現場を窺う為に振り向こうとしたが、その方向から感じるビリビリとした静電気のような殺気によって、横目で見る事すら出来ない。
「んあ?あー、リネットの兄ちゃんか。ちょうど良い、探す手間が省け

たぜ」
「えっ？探す手間ってどういう意味……」
「っと、ンな事よりさっさと逃げねぇとな。行くぞ」
「は!?え、ちょっ!?」
まだ苦痛の表情は消えてないが、彼は軽い身のこなしで起き上がった。かと思えば、有無を言わさずに僕の襟を掴み引き摺っていく。
けれどよろよろとした足取りで数歩歩いたところで、彼はすぐに立ち止まってポケットから何かを取り出した。
「じゃあな、親父ィ。次会う時はそのどてっ腹に派手な穴開けてやるぜ」
シャンバラ発動。彼がそのワードを告げた瞬間、足元に漫画で見た事のある魔法陣に似た不思議な円が浮かび、そこから放たれる光の眩しさに思わず目を覆う。
その光が収まった頃に目を開けてみたら、そこには驚いた様子のラバックが居て、冒頭に至る。

～ラバックｓｉｄｅ～
「――……以上、僕の回想はこれで終わりデス」
「……なんだそれ」
正座で俯き、懺悔するように経緯を説明したリネット兄さんに思わず呆れる。
兄さんの話を聞いた限りでは、彼は俺とナジェンダさんに言われた通りにしていたところを巻き込まれた。つまりこのバカに誘拐されたようなもの。といっても、その場に居た兄さんと親しい人間以外は彼を心配するどころか眼中に入れてすらないと思うが。
でも爆発とやらの原因は、恐らくブドーの仕業。皇帝の前であるにも関わらず謁見の間で大臣に殴り掛かって暴れ出したシュラにキレて、アドラメレクを発動させた結果だろう。それを回避したシュラは、避けた隙にぶん殴られて兄さんの元まで吹っ飛んだ、といったところじゃないかと俺は推測する。

こんにゃろう、あと何回俺らを掻き乱せば気が済むんだ……。それともこのままそうやって妨害し続ける気か？もういっぺん殺して三周目の世界に送ってやろか？ああ？

って言ってやりたいけど、前世云々に触れる文句の言い方は兄さんの前では言えないので堪える。

「どっかの堅物ジジィに邪魔されるのはわかってたが、皇帝の前で暴れた方が親父も無視出来ねぇと思ってな。親父をぶん殴るのは後のお楽しみ、って事にしとくぜ」

「お前、結構無茶な事するなぁ……。そこまでして革命軍に入りてぇのかよ？」

「まぁな。前にも言った通り、俺は同じ事を繰り返すのはつまんねぇんだ。別にお前らみたいに信念があるとかそういうのはねぇから、帝国に拘る意味もねぇし、今度はそっちで遊ばせて貰うぜ」

「そーかい。ま、帝国の戦力が減ってくれるなら有難いけどよ」

こいつは裏切る可能性が高いから、『仲間が増えた』なんて考え方はしない。でもこれで後に出来る敵勢力が一つなかった事になるかもしれないのは大きい。厄介な帝具使いとの戦いが減るし、被害者だって大幅に減る。その点は大歓迎だ。

だが、『同じ事を繰り返す』『今度は』という言葉に、この中で唯一逆行していない兄さんが目をパチクリとさせていた。

でも変に誤魔化す方が不自然だと考えて、俺は話題を変える口実の意味も含め、キョロキョロと周囲を警戒し始めた。

「つーかさ、こんなのんびりしてていいのか？宮殿で暴れたなら追手とか来るんじゃあ……」

冷や汗を流すそれは演技ではない。話題を変える口実とは言ったが、本当に追手が来たら怖いからな……。こいつに巻き込まれて計画が頓挫したり帝国の奴らに殺されるのだけはごめんだ。

だが帝国に追われてる本人であるシュラは平然として俺を宥める。

「そう慌てんな。こんな事もあろうかと、これまで何度か辺境まで遠出してるから、親父やあの堅物のおっさん達は俺がそっちに逃げたと思い込んでる筈だ。……まぁそもそも、親父はこんなしょーもねぇ事

にわざわざ軍を動かしたりはしねぇからな。俺の手配書を貼るだけに留まるに違いない」
「……んん？どゆこと？人探しだけの為に軍を使わないっていうのはまだわかるけど、事前に他の街に行ったからってそんな一瞬で行けるわけないんだから、シュラさんを探す帝国の捜索範囲は帝都周辺まででしょ？」
　何言ってんだこいつ、みたいな感じで首を傾げる兄さん。しかしその隣で怯えていた俺はハッと目を見開く。
「なるほど、シャンバラか」
「シャンバラ？」
　帝具の存在を知らずにまた疑問俯を浮かべる兄に、俺は帝具という代物がどんなものなのか。そしてシュラが所持している帝具、次元方陣『シャンバラ』の性能を教えた。

「――……で、自分の足で辺境に行ったシュラはそこにシャンバラのマーキングをしていて、帝国の奴らはこいつがそっちに転送したかもしれないと思い込んで捜索を諦める…つまり離れた場所のマーキングは帝国を欺く為のダミーみたいなもの。そうだろ？」
「ご名答。流石将軍二人に認められている優等生だな」
「はへぇー…それで気付いたらここに居たんだね。理解は出来ないけど、納得はしたよ」
　黙って聞いていた兄さんは俺の説明を咀嚼するように感想を言う。
　まぁ、帝具を扱う俺達もその原理やらなんやらを全く理解してないまま使ってるんだけどな。こればかりは作った本人達でしか一生わからないだろう。
「因みにファーム山がある南には行ってねぇから、ここから転送して近道するのは不可能だぜ。だが裏を返せば、そっちに手配書が回って警備が厳重になる心配はねぇ」
「おい、南にはって、そっち方面以外には行ったって事かよ!?それ逆に怪しまれるだろ！」

「別に南以外の全方面に行ったわけじゃねぇよ。いくら世界を旅した事があるとはいえ、流石にこの短期間でそんな行けねぇって」
いやいやと手を振って否定するその返答を聞いて、そうかと安堵する。
その時兄さんが「世界中を旅しただなんて凄い」とか言って感心してたけど、シュラは「まぁな」と適当に返しただけ。こいつなら自慢気に語りそうなのにそうしないって事は、それは前世での経験なんだろう。
頭の隅でそう考えつつ、俺は帝国の地図を広げて赤いペンを用意する。そしてそのペンを指で器用に回して遊びながら、シュラに今回はどこに行ったのかと情報提供を求めると、奴は正直に応じてくれた。
もうこうなったらなるようになるしかない。そう腹を括って、三人で遥か南にある革命軍の前線基地、ファーム山までのルートを一から考え直す。
地方軍の雑兵だとしても、少しでも帝国の人間が居そうな場所は極力避け、尚且つ途中で最低限の物資の調達も出来そうな道程はどこか。口に出さずとも前世の記憶も照らし合わせながら、ああでもないこうでもないと話し合って。やっと話が纏まった頃には、もう空は朱色に染まっていた。
「んじゃ、そろそろ出発するか。なんか妙なメンバーだし、最初の予定よりもかなり時間掛かっちまったけど」
地図とペンを仕舞って、各自腰を上げて荷物を背負い、フードを深く被る。

こうして、外の世界の厳しさをまだ知らないただの一般人と、信頼性なんて微塵も無い親玉の息子。そんな二人を率先して歩き出す見た目と中身の性別が一致していない元殺し屋の俺という奇妙な短い三人旅が、前世とは全く違う可笑しな運命の糸が絡み合った事によって始まった。

雨宿りを斬る

緑髪の男の、勝ちを確信した顔。それが、俺が最初に思い出した過去の記憶。

一瞬だった。相手はもう心身共にボロボロだったというのに。あとは情報を吐かせれば俺の勝ちだったのに、完全に油断していた。

自分の油断が敗因なのはわかってる。だがあいつを…俺を殺したあの糸使いの男を、俺は絶対に許さねぇ。あいつを見付けたら今度はウェイブの野郎も一緒にまたとっ捕まえてやる。

ただでは殺さない。たっぷり甚振ってじわじわと苦しませてやる。そして最後はどんな殺し方が良いか。脳内でシュミレーションしながら、あいつらが苦しむ姿を目にするのが楽しみで仕方なかった。

……筈だったのに。

「なんで、あんな奴に惚れちまったんだろうなぁ……」

そう、気が付けば俺は、何故か性転換というおまけ付きで自分と同じくこの世界を逆行していたあの男……ラバックに惚れていた。

確かに顔はわりと好みだと思った。実を言うと男だとわかってガッカリしたくらいには俺好みだ。だがまさか初恋相手があんな…自分を殺した元男だなんて……。

信じ難いし認めたくはないが、一周目ン時の腹いせで犯したあの夜。あの時見たあいつの乱れた姿が頭から離れられなかった。しかも別の女を抱いてる最中にも思い出してしまうくらいにかなり重症だ。

女遊びはよくやってるが、恋なんてした事がなかったから、最初はわけがわからず内心ずっと困惑していた。

が、もう一度抱いて確信した。俺は不覚にもこいつに惚れちまったんだと。

ンなわけねぇだろ、俺はホモじゃねぇ、と否定していた自分に、脳内に居るもう一人の自分が言った。

『俺が惚れたのはあくまで今の女のラバックだ。あいつが自分を殺した男だった事なんて忘れて、自分のやりたいように。欲望のままに動

いちまえよ』
と、悪魔の囁きのように。認めてしまえと訴えたのだ。
これは決して誰かに相談出来る話ではない。というかまともな相談相手なんて身近に居ないような……いや、そこは考えないようにしよう。それだとなんか俺が可哀想な奴だと勘違いされちまう。
っと、危ねぇ。危うく話が逸れるとこだったな。
とにかく、誰にも相談出来ねぇ恋をしてしまった俺は自己解決するしかなく。そんなバカみてぇな話で『ねちねち悩むなんて俺らしくねぇ、好き勝手にやって欲しいモノを手に入れるのが俺だ』『他人の意見なんて知ったこっちゃねぇ。俺は今まで通り自分の欲望に従うんだ』と、開き直るようにしてこの想いを認めて受け入れ、前世での因縁だのなんだの、そんなのは関係ねぇと吹っ切れた。
その結果がこの現状。革命軍の全線基地が目的地の、片想い相手とその兄貴との三人旅。
道中、目立つ俺を留守番させる緑色兄妹が交代制で立ち寄ってきた村や街には既に俺の手配書があったらしいので、もう後戻りは出来ない。
革命だのなんだのには一切興味ねぇが、一周目と同じ事しても退屈だからな。こいつらに付いて行って反乱軍に入り、周りを掻き乱して遊ぶ方が有意義だし、あの親父も俺が敵として現れれば流石に驚くだろう。
世界各地を回れないおかげでマーキングのポイントの数が前回より圧倒的に少なくなる上、エンシン達を集められねぇっていうデメリットがあるが、せっかくの二度目の人生なんだ。わかりきった道を早足で進むより、知らねぇ道を歩いて遊びたい。
……だが正直、ラバックの兄リネットが俺にとってかなりの邪魔者だ。おかげでラバックとのスキンシップ（ラバックからしたらセクハラ）が全く出来ない。
でも今はそのリネットが作る飯に免じて我慢している。それは何故かというと、どうやらあいつら兄妹も俺と同じように裕福な家庭で育ったらしく、そこで良い飯を食っていたからなのか、あいつの飯は

意外と悪くないからだ。まぁ俺が宮殿で食っていた料理と比べるとそんなにではないが。
　ただ一つ不満を言うと、俺は野菜とかよりも肉をもっと食いたい。ちょうどそれを訴えてみたところ、
「確かに、肉料理は最近あんまり作ってないね……」
「だろ？だから明日にでも作ってくれよ」
「……わかった。じゃあ明日からはシュラさんとラバが食材を獲りに行ってね」
「そうそう、そうしてくれりゃ文句はな……は？」
「えっ」
　調理担当のリネットが言った言葉に、思わずラバックと一緒に唖然とする。
　なんでそうなるんだ!?という俺ら二人の心の声でも聞こえていたのか、リネットはこう続けた。
「だって調味料とか野菜はまだあるけど、お肉は無いんだもん。近くに街も無いから買えないし、戦える君ら二人が食材になる危険種を狩ってくれないと無理だよ」
「いや、だからってなんで俺も行かなきゃなんねぇんだよ!?そんなの言い出しっぺのシュラだけで良いだろ!?」
「ラバは彼が裏切る事を危惧してるんでしょ？なら見張りが必要じゃないか。かと言って僕は戦えないから足引っ張るどころかシュラさんを逃がしちゃうと思うし」
「ぐっ…!!た、確かに……！」
　リネットに珍しくまともな事を言われて狼狽えるラバック。
　悪巧みなんかしてないのに否定して貰えないのは多少傷付くが、前科や自分の立場的に仕方ないと思い、そこには触れないでおいた。
　そんな会話があって食糧調達を二人で担う事になり、翌日は簡易テントの設営を留守番のリネットに任せ、俺とラバックは危険種を狩るべく周辺を探索した。

「――……なぁダンナ。こういう時ってさ、どうしたら良いと思う？」
「……多分、止むまでここで待つしかねぇと思うぞ」
今夜野営する予定の場所から少し離れた森の奥。そこに潜む小さな窪みの洞窟で、俺とラバックは溜め息を吐く。
俺達が何故こんな場所に居るのかって？そりゃ簡単だ。食えそうな危険種を探そうと二人で近くの森を彷徨いていたところ、不運にも雨が降り出し、近くで雨宿りが出来そうだったここに急いで逃げてきたのだ。
いや、雨だけだったら濡れるのを我慢すれば良いから別に構わない。問題なのは、アドラメレクの怒りのように雷がゴロゴロと鳴っている事だ。
そんな状況下で下手に外へ出るのは危険だと判断した俺達は、この雷雨が止むまでここで待機する事にした。まだテントで待っているであろうリネットもバカではないので、俺らを探そうとという無茶はしない筈だ。
そこで突然、隣から「っくしゅん！」と可愛らしいくしゃみが聞こえた。
音の発生源を見ると、そこには少し寒そうに身動ぎながら鼻の下を指で擦るラバックの姿が。
「大丈夫か？」
「ん、大丈夫……。ちょっと寒いだけ」
と言ってる側からまたくしゃみをするラバック。
雨に濡れたせいで身体が冷えてしまったようだが、全く大丈夫そうには見えない。強がってるなのがバレバレだ。
俺なんかに心配されたくないとか、きっとそういった些細な理由なんだろうが、ここで風邪を引かれたら元も子もない。そう思った俺は無言でそいつの肩を抱き寄せる。
「っ!!?く、くっついてくるなこの変態!!」
「こうした方がまだマシだろ？あんま無理すんな」
「!!」
俺の気遣いに驚いたのか、ラバックの緑の瞳が大きく見開く。だが

すぐに俯いて、
「……ありがと」
間を空けてからボソリと呟いたその声は、なんとか聞き取れたがとても小さい。
礼を言われた事に今度は俺が驚いたが、こっそり顔を覗いてみれば、毛先から水滴が落ちていく髪の隙間から、ほんのりと頬が赤く染まっているのが見えた。
「……くっそ、可愛いなおい」
「は？何が？急にどうした？」
何でもない、と適当に誤魔化せば、身長差でこちらを見上げてくるラバックが訝しげに顔を顰める。
本人に言えば寒いからだと否定しそうだが、頬が赤くなっていたのは照れたからだと思う。というか絶対にそうに違いない。
急にデレるとかなんだその可愛過ぎる不意討ちは。反則だろ。つか元は男の癖にくしゃみも可愛いな畜生。なんでそんなに可愛いんだよお前は。それともこいつの仕草がなんでも可愛く思っちまう俺が可笑しいのか？いや、こいつに惚れてる時点で俺が可笑しいのは当然か。
天井を仰いで内心で一人悶えていると、またもやくしゃみの音が狭い洞窟の中で反響する。
再び見下ろしてラバックの様子を窺うと、少しでも暖を取ろうと俺の身体にぴったりとくっついてきた。
一瞬ドキリとするが、よく見るとそいつの濡れた服がうっすらと透けており、色気のないスポーツブラの形が浮かんでいたのが見えてがっかりする。正直そこはもうちょっと女らしい下着を身に付けていて欲しかった……。
しかし肌に張り付いた服は形の良い胸を主張していて、思わずその膨らみを直に揉みしだきたくなるような衝動に駆られる。
そこで俺はふとこう思った。最高に美味そうな肉はここにあるじゃないか、と。
危険種の肉なんか目じゃない。そんなものよりも目の前に居るこ

いつをそのまま食べてしまいたい。しかも今は邪魔なリネットの野郎は居ない。狭い空間で二人きりというチャンス。襲うに持ってこいのベストタイミングだ。ヤろう。ヤるしかない。
　そうと決まれば後は実行のみ。俺はラバックの濡れた服を鎖骨辺りまで一気に捲り上げる。
「なっ!?!!き、急になにしやがんだてめぇ!?」
　抵抗されるのは想定内。だが相手は細身の少女。両手を押さえるのは片手で事足りる。
「濡れた服着たままだと余計に冷えるからな。風邪引かねぇように全部脱がしてやろうと思ったんだよ」
「はぁ!!?バカ言ってンじゃねぇよ!素っ裸でいる方が風邪引くに決まってんだろうが!!ほんとはまた犯したいだけだろこの性欲魔人!!」
「まぁ本音を言うとそうなんだけどよ」
「ちったぁ否定しろやゴルァッ!!!」
　腕を封じられてもジタバタと暴れるラバック。そんな彼女の肩口に顎を乗せた俺はこう囁く。
「でもよ、男女が裸同士で抱き合えば、むしろ暑くなるだろ？」
「〜っ!!?」
　しっとりと濡れたスポーツブラの中に空いた片手を入れ、柔らかい胸をふにゃりと揉む。それだけでラバックの身体は面白いくらいに大きく跳ねていた。
「やっ、やだ!やめっ……あっ!」
　制止の声を聞かずに下着も捲ると、プルンと二つの色白い果実が顔を見せる。
「さぁて、どんな風に調理して食ってやろうかね」
　産まれたばかりの小鹿のように小刻みに震えるご馳走を前に、自分の唇をペロリと舐める。
　そして俺は、外で降り続ける雷雨が止むまで、その柔肉の味を全身でたっぷりと味わって堪能した。

「――……悪い、今回は流石にヤり過ぎた」
雷雨が止んだのと同時に、気を失うまで俺に犯されたラバックが目覚めて早々、強烈なビンタを俺に食らわせた。行為中に出来た背中の爪痕だけに限らず、頬に紅葉みたいな手形も付けられた俺は流石に反省して謝った。のだが、
「死んで詫びろ」
彼女の第一声はそれ。ただ、長時間喘いでいたせいで、その声はガラガラに枯れてしまっている。
その後結局食糧調達は諦め、俺がラバックをおぶってリネットの待つテントに戻って行き、俺らを心配していたあいつには「雨のせいでラバックが風邪を引いた」と嘘を言って誤魔化した。
だが一度は反省しても性欲には逆らえない俺は懲りず、その夜リネットにバレないようこっそりと寝袋に包まれて眠るラバックを夜這いして襲……えず。
俺の行動を先読みしていたラバックがテント前に仕掛けた吊るし上げ式の括り罠に掛かっては、翌朝になると逆さまに吊るされた状態のまま罵声を浴びせられるのだった。

再会を斬る

帝都を出てから約一週間近く経過した頃、馬を使わずに歩いて来た俺達は、漸くファーム山の麓にある山賊のアジト……いや、革命軍の前線基地に着いた。

大臣の息子であるシュラを連れてるせいで最初こそは疑われていたが、そこの代表が話を付けてくれたおかげでなんとか無事本部まで案内して貰えた。

まぁ、彼らとしては俺らを信用してくれたように見せ掛けて、目的がわからねぇから尻尾を出すまで一旦泳がしておこう、とか考えてたんだろうけどな。

そんで本部にも到着して、エスデスがナジェンダ軍を追ってくるかもしれないから警戒してくれと伝えたんだが……。

「こちらに向かっていたナジェンダ軍が、遠方に居た筈のエスデス軍に襲撃されたようです……」

待機していた部屋で聞いたのは、ナジェンダ軍が半壊したという報告。

どうやらエスデス軍を見張っていた反乱軍の偵察部隊が壊滅してしまったらしく、奴らがナジェンダ軍を追って来るという連絡が遅れ、ナジェンダさんの離反は前回と同じ結果になってしまった。

革命軍本隊は急いで重軽傷者を本部の医療室に搬送していく。だが救護班が人手不足だったようで、医学の知識を多少持っている兄さんが軽傷者の手当てを手伝いに行った。

革命軍を責めるつもりはない。ただこの結末を知っていたのに彼らに頼って何もしなかった自分を責めたい。でも、俺一人が行ったところで何が出来た？何が変わったんだ？と思う自分もいる。それでも自分への憤りや後悔が混ざって、もうどうすれば良いのかわからなくなった。

「らしくねぇ顔すんなよ、ラバック。どうせほっといてもナジェンダの姉ちゃんは助かるんだろ？」

気分を変えたくてなんとなく廊下を歩いていると、勝手に付いて来

たシュラが俺に声を掛けてきた。
「それはそうかもしれないけど……。俺は結果がわかっていたのに、何も変えられなかったのが悔しいんだよ。結局これ以外に良い策が思い付かずに他人に任せて……そのせいでまたこんな……」
今度こそ悔いのない人生を送る為に頑張ってきたのに、早速後悔してる。大切な人を護れなかった事に、心が折れそうだ。こんなんじゃあこの先の悲劇も全部覆えせないかもしれない…と、不安にもなってしまう。
「……はぁ～、めんどくせぇな。別にお前が全部悪いわけじゃねぇだろうが。何も知らねぇ奴らからしたら、勝手に落ち込んで自分のせいだとかグダグダ言ってる方がよっぽど迷惑だぜ」
苛つくように自分の頭をガシガシと掻くシュラに、思わず目を丸くする。
もしかして、俺を励まそうとしてるつもりなのだろうか…？そう思うと、つい吹き出してしまった。
「あ？何笑ってんだよ？」
「いや、あんたって俺と違って結構不器用なんだなと思って」
つっても、器用そうには全然見えないから意外とは思ってないけどね、と続けて。さっきまでの暗い気持ちを吹き飛ばすようにクスクス笑う理由を素直に話せば、今度はシュラが目を張っていた。
「……ったく、落ち込んでるかと思えば急に笑ったりって……ほんと表情ころころ変えて忙しい奴だな」
やれやれと呆れていたが、その表情はどこかホッとしているようにも見える。
さっきシュラが言ってた通り、いつまでもくよくよしてたらそれこそ周りに迷惑だが、もうちょっと他の励まし方があったと思う。でも彼らしいその対応のおかげでなんとか立ち直れそうだ。
そこでふと、俺は見覚えのある階段の前で立ち止まった。
「どうした？」
「……悪いダンナ、俺ちょっと用事思い出したわ」
ニッと不敵な笑みを浮かべてそう告げる。だがシュラはその笑顔

に興味を持ったのか、
「何だ？面白ぇ事でも思い付いたのか？だったら付いてくぜ」
「バーカ、お前には関係ねぇ事だっつーの。俺は今から相棒を回収してくるから、お前は部屋で大人しくしとけ」
『相棒』というワードで大体察したらしく、ああなるほど、と納得するシュラ。しかし、
「確かに俺には関係ねぇが、反乱軍の玩具にも興味あるからな。やっぱり俺も行くぜ」
そう言って見せたのはいつものゲス顔。
そんな彼にうげぇ、とあからさまに嫌そうな態度を取っても効果は無し。完全にまだ付いて来る気満々である。
これじゃあ何を言っても無駄か、と諦めた俺は仕方なくそのままシュラと一緒に階段を下りて行く。
「お、あったあった」
ぼんやりと覚えてる廊下を進んだ先に、他よりも一回り大きな扉が見えてきた。そこが俺の目的地である。
「ふぅん、警備とかいるのかと思ったが、誰もいねぇのな」
「まぁ今はナジェンダさんの件で忙しいからな。パニック状態で余裕ないんだろ」
「それもそうか。でも鍵くらいは掛かってるだろ？どうやって入るんだ？」
シュラの意見はもっともだ。しかし、
「器用な俺の手に掛かれば、帝具でもない限り鍵なんて余裕で開けられるぜ」
ふふん、と誇らしげに胸を張りながら俺が取り出したのは、ピッキング用の針金。
その先端を鍵穴に入れて数分程カチャカチャ鳴らしていると、漸くガチャリと重たい金属音が響いた。
「よっし、楽勝！」
「うっわ…マジかお前……」
暗殺者ってそんなスキルまで持ってるのかよ…と驚愕している

シュラを置いて、我先にと一直線に走って室内に侵入する。
「久しぶりだな、クローステール…!!」
部屋の奥に置かれた、とても懐かしいリールと赤いグローブのセット。その正体は、帝具、千変万化『クローステール』。生死の境で共に戦った俺の大事な相棒だ。
そう、お察しの通り、ここは革命軍に回収された帝具の保管室である。でも俺は他の帝具なんて一つも眼中に入れていない。それ程、クローステールとの再会を心の底から喜んでいるのだ。
「くぅーーーっ!!!!懐かしい!懐かしいなぁお前!!俺が来るまでちゃんと手入れされてたか!?」
クローステールを愛でるように、糸を纏めている本体であるリール部分に頬擦りをする。
「……俺さ、前回世界各地を回ってたんだけどよ…帝具に話掛ける変人を見たのはお前が初めてだぜ、ラバック」
「うっせぇ!!こっちはてめぇに捕まったせいであれから一度もこいつを見れなくて寂しかったんだよ!」
俺の行動にシュラが若干（？）引いてたのが気に食わず、忘れたくても忘れられないあの時の事を強く責めた。
前世でシュラに捕まった後、タツミの事もそうだが、没収されたクローステール（こ）もどうなったのかがずっと気掛かりだったから余計に感動しているというのに、わざわざ水を差さないで欲しい。
「つーかお前、ここの上層部にバレたらどうすんだよ？」
「ん？ああ、そン時は当然叱られるだろうけど、帝具の所有者になれば、すぐにでも帝具使いを戦力にしたがるあちらさんは軽い罰で済ませてくれるだろうからね。多分なんとかなるさ」
俺がそう豪語すると、シュラは、ほんとにそんだけで済むのか？と少し心配そうに呟く。珍しく慎重になっていたみたいだが、彼のその心配は杞憂に終わると後々知る。
その後は兄さんと合流し、ナジェンダさんが目を覚ましたと聞いたのでそのまま彼女の居る部屋に行って俺達兄妹とナジェンダさんはお互いの無事を喜び合い、他にも俺が自分が無力だった事での謝罪を

すると、心優しい彼女はそんな事はないと励ましてくれた。
しかし、勝手ながら帝具を手にしたという報告をしてこっぴどく叱られてしまったのは、また別の話だ。

そして、それからあっという間に年月が過ぎていき、義手を身に付けたナジェンダさんが戦線へと復帰し、ブラートさんやアカメちゃんを始めとしたかつてのナイトレイドメンバー達が遂に、帝都を脅かす殺し屋集団として、再びあの地に集うのだった――

ナイトレイド編
新たな出逢いを斬る

――帝都のとある貸本屋。そこは普通の書店に見えるが、裏では隠れアジトとして活用されている。外装も内装も前世と全く変わらない、ナイトレイドの憩いの場の一つだ。

そんな貸本屋のカウンターで、掻き上げた長い緑の前髪をピンで留めて眼鏡越しに本を読んでいるのは、表稼業としてこの店を経営している俺、ラバックである。

俺はエスデスに気に入られていたせいで帝国軍の奴らに顔を覚えられている可能性があるから本当はやらない方が良いんだけど、顔バレしてない他のメンバーにこの簡易拠点の管理を任せるには不安があるっていうか……。まぁ本音を言うと、この貸本屋で働くのが好きだったからもう一度やりたかっただけなんだけどね。

革命が成功したらこの貸本屋を全国チェーン店にするという昔からの……一周目の頃からの大きな夢も、今度こそ叶えたい。その為にも俺は今、兵士時代の顔見知りにバレないようにする対策として、皮肉な事にまた少し大きくなってしまった胸をサラシでキツく締め付け、更にはサイズ違いのダボダボな服を着て女性の象徴である胸を隠し、男を装っている。

……元々男だったのに男を装うってなんだよってツッコミたい気持ちは俺が一番わかってる。だから皆まで言うな、これでも真剣に考えた結果なんだよ…！

とにかく！きっかけはこの件についての会議中にすんごい面倒くさそうな態度で言ったマインちゃんの「そんなにやりたいなら男装でもすれば？」という発言だけど、帝都で活動する際は性別と名前を偽っていれば、最悪顔見知りに会っても他人の空似程度で済むんじゃないかという結論に至ってこのような男装をしているのだ。

因みにこの服や眼鏡は前世でも使ってたお気に入りで、サイズも当時と同じ。前世でもわりと細身な方だった筈だけど、こんな大きかっ

たっけ？って思うと、改めて更に小さくなった自分の身体を自覚して溜め息を吐いてしまうのも、最近の悩みの一つでもある。
　そんな密かな悲しい気持ちを抱きながらいつも通り働いていた今日この頃。この日は、思わぬ珍客がこの貸本屋に訪れてきた。
「いらっしゃーい……って、なんだ、兄さんか。おかえり」
「なんだ、って酷いなぁ……。店員だからって素っ気ない態度しないで、もっと可愛い笑顔でお兄ちゃんをお出迎えしてよー」
「やだよめんどくさい」
　呑気に笑って現れたこの貸本屋の店員は、俺の実兄、リネット。
　普段と変わらず他愛もない会話を交わすが、一つ違和感を感じた。その理由は、彼の後ろに見慣れない二人の若い男女の存在。
　一人は艶のある長い黒髪に花飾りを付けた女の子。もう片方の男は額に手拭いのような布を巻いているのが特徴的で、パッと見た感じはどちらも俺と同年代のようだ。
「兄さん、そこの二人は？」
「ん？ああそうそう！彼らの事で君にちょっとお願いがあるんだ！」
「……なにそれ。嫌な予感しかしないんだけど」
　ナイトレイドの中でも特に面倒事を起こすトラブルメーカーの一人であるこいつの事だ。どこかでまた何かやらかしてその尻拭いを俺にも手伝わせようとしてるに違いない。そう思ってジト目で見ていたら、彼は「まぁ話は最後まで聞いておくれよ」と言って、改めて喋り出す。
「この二人とはさっき知り合ったんだ。でね、二人は兵士になって田舎にお金を送る為に上京してきたらしいんだけど、帝国軍に志願しに行ったら断られちゃったみたいでさ……。だからさ、この子達をここで働かせてあげられないかな？」
「……は？」
　兄が何を言ったのか理解するまで、思わず数秒固まる。
「はあああああぁぁッ!!?」
　怒鳴り声に等しい絶叫が、店の周囲にまで響き渡り、近くの鳥達が一斉に羽ばたいた。

店の客や通行人がザワザワとどよめき始めたのに気付いた俺はハッ！とし、兄さんをカウンター裏へと連れて一緒にしゃがみ込む。
「何言ってンだよあんた!?ここがどういうとこだかわかってて言ってンのか!?」
「そ、そうだけどさぁ……なんか、初めて帝都に来た時の自分を見てるみたいで放っておけなくて……」
ひそひそと小さな声で話す俺と兄さんの会話は、恐らく誰にも聞こえていない。
この店で見知らぬ人間が働き始めたら、どうなってしまうか。それを考えるのは容易い。我らナイトレイドのロマンある秘密基地のような地下の簡易拠点がバレ、最悪の場合はナイトレイドだけではなく革命軍との関係性や情報が帝国に渡ってしまう恐れもある。
あと数日もすればあいつがナイトレイドに加わるというのに、このアホ兄貴はまた面倒事を増やす気か。
しかし店内で戸惑ってる様子の二人に目配せする兄さんは彼らと自分を重ねてしまっているらしく、折れてくれる気配が全くない。
「……あの、リネットさん。その人迷惑そうにしてますし、私達、別の仕事を探します」
そう言ったのは、黒髪の女の子。するとその隣に居た男がぎょっとして慌てる。
「なっ!!?いいのかよサヨ!?やっと帝都で働けるチャンスだったのに……！」
「イエヤスは黙ってなさい！せっかくご親切にしてくれたのにすみません、リネットさん。弟さんも、いきなり来て迷惑掛けちゃって本当にごめんなさい」
「えっ？いや、そんな迷惑だなんて……」
迷惑じゃない、と言ったら嘘になるが、女の子にこうして頭を深々と下げられるとこっちが悪いような気がしてしまう。
「ほんとに良いのかい？かなり困ってたみたいなのに……」
「大丈夫です。野宿なら慣れてますし、暫くはなんとかなると思います。ね、イエヤス」

「うぐっ…！はぁ…またあの寒空の下で寝なきゃいけねぇのか……」
兄さんが心配そうにするが、女の子は気丈に振る舞い、男も夜の寒さを思い出して身震いするも、仕方なく彼女の意見に賛成している様子。
だが、そのまま「失礼しました」と言って去ろうとしていく二人の背中がなんだか悲しそうに見えてきた俺は、
「ちょっ、ちょっと待て！俺はまだダメとは言ってないだろ!?」
と、まるで自分が悪者になったような謎の罪悪感に負けて、勝手に話を進めていた二人を思わず引き止めてしまう。
すると女の子は勢い良くこちらに振り向き、俺の顔とぶつかるんじゃないかってくらいに一気に距離を縮めてきた。
「働いて良いんですか!?ありがとうございます!!」
「えっ？あ、う、うん……っていうか近い近い近い……!!」
ギュッ！と両手まで強く握られて。キラキラした瞳で心底嬉しそうに言われたらもうＹＥＳと頷くしかないだろう。
にしても、よく見るとこの子結構可愛いな……。地下の存在がバレなきゃ良いわけだし、ここでバイトさせるのは悪くないかも……。
なんて内心で生まれ付きの女性好きが発動しつつも、問題が起きたらその時始末すれば良いかと殺し屋の身分を忘れていない自分もしっかりとそこに居る。
「はぁ、しゃーねぇな……。リネット兄さんからもう聞いてるかもしんないけど、俺は弟のクロース。ここで働くと言ったからにはただでは辞めさせねぇから覚悟しとけよ」
『クロース』というのは、俺の帝具、クローステールの名前から取った偽名だ。安直だけど、わりと気に入ってる。
ただ、偽名だけではなく、兄と一緒に名乗る度に妹だと言い慣れてしまったせいでそっちも間違えないように注意しないといけないのが結構大変だ。いつもごっちゃになって、自分で言っててわけがわからなくなる。
男装は自分の意思でやってるから自業自得だけど、俺の性別ってなんでこんなにややこしくなっちゃったんだろ…？

「私はサヨ。こっちは……」
「イエヤスだ。これから世話になるぜ、クロース」
改めて二人との自己紹介を済ませ、握手を交わす。
……あれ？そういやサヨとイエヤスって名前、どっかで聞いた事あるような…？
いつどこで聞いたっけ？それともまた違う何かとイントネーションが少し似てただけか？と考えてみるが、兄さんが微笑ましそうにニコニコ笑っているのに気が付き、その思考は露へと消えていく。
「良かったね、二人共。ラ……クロースも承諾してくれてありがとう。二人の事は僕が責任を持って面倒見るよ」
「はいはい、もう勝手にしてどうぞ。……でも、後で帰ったらみんなにこの事報告するからな」
軽くいなしてから二人に聞こえない小声で兄を咎めると、返す言葉もない彼は気まずそうに頬を掻きながら苦笑していた。
とまぁそんな感じで二人を貸本屋で雇う事になり、その後二人には、宛がないならこのバイト代で近くの宿に暫く泊まると良いよと伝えて、以降はそこからうちの店に通って貰う事にした。

そしてその数日後のとある月夜。赤く輝く満月を背に、俺達ナイトレイドが夜の任務を終わらせてアジトに帰還しようとしたその時。前世と同じように、姐さんがあいつを連れて来た。
「――今日から君も私達の仲間だ！ナイトレイドに就職おめでとう!!」
「なんなんだよこの展開ーーッ!!?」

新入りを斬る

「はぁ…今すぐ村に帰りたい……」

俺の名前はタツミ。重税に苦しむ田舎の故郷に仕送りする為に帝都へ来た筈だったんだが……旅の途中ではぐれた二人の幼馴染みを探さなきゃいけないのに、何故かひょんな事でとある暗殺者集団に仲間になれと言われ、無理矢理このアジトに連れてこられた。

「ここは訓練所という名前のストレス発散所だ。んで、あそこで戦ってる二人は…見るからに汗臭いリーゼントがブラート。そいつに必死に食らい付いてるのがラバックだ」

アジト内を案内しながらそう紹介してくれたのは、俺の金を騙し取った挙げ句に拉致ってきた張本人のおっぱ…じゃなくて、レオーネさん。

彼女が促す先に視線を向けると、体格差のある二人の男女が槍を交えており、その激しい攻防の熱気がこちらにまで届いていた。

すげぇ……!ブラートさん、だっけか?あの人の槍捌きもすげぇけど、それを全部防いでる女の子も相当な手練だ…!

逞しい肉体を主張するブラートさんの突きや凪ぎ払いなどの素早い技の切り替えには、無駄な動きがほとんどない。それでも負けじと防御に徹する彼女も一瞬の油断も隙も見せず、端から見て防戦一方でありながらもなかなか良い勝負に見える。

「ラバの奴、今日も朝から頑張ってるみたいだねぇ」

「えっ、あれ毎日やってるんですか?」

「ああ。あいつ、うちで一番ビビリなのに意外と負けず嫌いでね。ブラっちに勝つまで諦めるつもりはないってさ」

本人達の試合を眺めながら教えてくれたレオーネさんの表情はどこか誇らしげで、まるで妹の自慢をする姉のようだった。

「っと、もう決着が着いたみたいだぞ、少年」

そう言われて視線を戻すと、ちょうどその女の子、ラバックが持っていた槍が弾き飛ばされ、武器を失った彼女の喉元に矛先が突き付けられいた。

「……っだあぁーーー!!!ちっくしょう!!また一撃も当てられなかった!!」
「はっはっは!まだまだだな、ラバック」
その場で仰向きに倒れ込んだ敗者ラバックが、まるで駄々っ子のように暴れて「うがぁーっ!!」と心底悔しそうに叫ぶ。
「おーっす!今日も良い勝負だったねぇ、お二人さん」
「おっ、レオーネじゃん。さっきの見てたのか?」
レオーネさんが声を掛けに行くと、試合を終えて休憩に入ろうとしていた二人が俺らの存在に気付く。
「そっちの少年は……この間の奴か」
「?なんで俺の事を…?」
「その人はお前を抱えてた鎧男だよ」
「鎧……?あっ!あの時の!?」
ブラートさんとは面識がない筈なのに、と思いきや、怠そうに上体を起こしたラバックからそう聞いて驚く。
「少年、気を付けろ。そいつホモだぞ」
「!!?」
ちょうどブラートさんと握手を交わしていたその時、耳打ちしてきたレオーネさんの言葉で反射的に手を離してしまう。
「おいおい、勘違いされちまうだろ?なぁ?」
いや否定してくれよ…!!
何故か頬を染めたブラートさんに鳥肌が立つ。なんだか身の危険を感じるのは気のせいであって欲しいと切に願う。
そこでふと視界に入ったラバックに意識を向けてみると、彼女が真剣な眼差しで俺を観察するように、見定めるかのようにジッと見つめていた事に気が付く。
先程のマインとかいう刺々しい態度の女の子と同じで俺を仲間と認めない、とか言い出すのだろうか?と少し不愉快な気分になって顔を顰める。
けれどその子は何事もなかったかのようにニッコリとした笑顔で、
「ラバックだ。気軽にラバって呼んでくれ」

と、明るい声色で自己紹介を簡潔に述べ、意外にも歓迎してくれているようだった。
「さて、軽い自己紹介も済んだし、先に風呂借りるぜ、ブラートさん」
「ああ、俺はまだ自主練を続けるつもりだったからな。気にせずゆっくり浸かってくれ」
「サンキュ。んじゃ、また後でな、新入り」
「いや、だから俺はまだあんたらの仲間になるなんて言ってな……」
勝手に仲間認定されてる事に慌てて否定しようとするが、途端にふっと柔らかい微笑みを見せたラバックに思わずドキッとしてしまい、言葉が詰まる。
……が、
「あ、そうだ。先に言っとくけど、ナイトレイド女子の風呂を覗く時は死ぬ覚悟で挑めよ」
「はあぁ!?!!」
花が綻ぶような笑顔から一変。彼女の表情はゲスな笑い方に変わり、僅かに感じた俺の胸のトキメキは一瞬で消えていく。
なんで俺が覗きに行く前提で忠告されなきゃいけないだよ!?俺の外見ってそんなに印象悪いのか!?
いきなり疑われた事に納得がいかず、なんて失礼な奴なんだと内心愚痴る。
けれどその後レオーネさんにまでからかわれて、まだ何もしてないのに覗き魔だのなんだのと、俺は暫く変態扱いされる羽目になっていたのだった。

～ラバックｓｉｄｅ～
「――よう。待ってたぜ、ラバック」
「……こんなとこで待ち伏せしてんじゃねぇよこのストーカー」
タツミ達と別れて風呂場へと向かう途中。廊下で待ち伏せしていたシュラと遭遇する。
極力会いたくない奴の顔を見て舌打ちするが、ここ数年で慣れたら

しいシュラには効果がない。
「で、あいつはどうだった？」
「……残念だけど、他のみんなと同じみたいだよ」
　シュラが示す『あいつ』というのは、もちろんタツミの事。『どうだったか』という質問は、彼が俺らみたいに前世の記憶を受け継いでいるのかどうか。そしてその答えはＮＯ。他のメンバー同様、タツミも何も覚えていない様子だった。
「タツミも俺らの最期に関わってたからもしかして、とか思ってちょっと期待してたんだけどなぁ……」
　もし記憶が残っていたとしたら、俺はタツミの事を恨んでなんかいないって、一言伝えてやりたかったのに……。そんな些細な未練すら果たせないという現実に、一人湿った空気に浸ってしまう。
「でもま、例え覚えていたとしても、タツミの事だからかなり責任感じて俺に対して変に気ぃ遣っちゃいそうだしな……。ぎくしゃくした空気にならなくて良かった、って事にしとこう」
　ほとんどのナイトレイドメンバーが何も覚えていないのは残念というか、寂しいけど。辛い思い出が無いと考えれば、これはこれで良かったのかもしれない。
　だかこうして複雑な気持ちに溜め息を吐いたのはもう何回目だろうか。幸せが逃げちゃうからダメだと自分に言い聞かせつつも、無意識にまた一つ漏らしてしまう。
「こんなのはもう慣れただろうに、いつになく落ち込んでるみてぇだな。あいつとそんなに仲が良かったのか？」
「……ああ。タツミが来るまで同年代の同性はいなかったからね。あいつは俺の数少ない気の合う悪友（親友）だったよ」
　シュラの素朴な疑問に答えながら、遠い過去を思い出して懐かしむ。
「親友、ねぇ……。それだけなら別に構わねぇけど」
「……え、何？もしかしてお前もタツミに嫉妬してんの？やめろよ、そういうのはあんたのキャラじゃねぇって」
「だったらそいつの話ばっかすんなよ。今は俺と二人きりだろ？」

「だからやめろって言ってんだろうが気持ち悪い！」
シュラの口から放たれた『二人きり』という単語を聞いた途端に脳内ではにかむブラートさんの顔が浮かび、失礼ながらつい条件反射で自身の腕を抱き、同時に顔色も青く染まっていく。
「っていうか何度も言うけど、俺は例え世界が滅びようとお前を含めた野郎共を恋愛対象として見る気はこれっぽっちもねぇし、そもそもタツミには後々可愛い彼女が出来ちまうからお前が妬く必要はねぇよ」
まぁリア充爆発しろっていう意味での嫉妬はあるけどな!!そっちの意味だったら全力で同意するぞ！でも俺と仲が良さそうで羨ましいとかそんな乙女チックな理由で妬くのはやめてくれ。俺とタツミはそういう関係じゃねぇ、想像するだけで気持ち悪いわ……！
「けどそれも前回と同じとは限らねぇだろ？お前はこの俺様が認める女だからな、俺の敵が増えても可笑しくはねぇ」
「今は女の姿でも俺は男だ、女扱いすんな！」
「へぇ、じゃあお前が男だって言うなら俺も一緒に風呂入っても良いよな？」
「うぐっ…!!」
いやらしく笑うシュラの言葉に思わず狼狽え、半歩後退ってしまう。
でも否定しないとこいつなら本気でやりかねないと身の危険を感じた俺は威勢を張る。
「お、俺にも羞恥心ってのがあるんだよ！また覗こうとしたら今度こそ首吊りの刑にしてやるからな!?」
「おー、怖い怖い」
ガルル、と威嚇する俺を恐れる事なく、むしろ小馬鹿にするようなシュラの態度が腹立たしい。
「ちょっと、こんなところで何してんのよあんた達」
突然聞こえた声に振り向くと、そこにはシェーレさんを連れたマインちゃんが居た。
廊下のど真ん中で通行を妨げていた俺らに邪魔だと訴える彼女は、

シュラを見た途端に呆れ顔になる。
「あんたまたラバにちょっかい出してるの？ほんっと懲りないわねぇ……」
「てめぇには関係ねぇだろチビ」
「チビって言うんじゃないわよ悪人面」
「マイン、シュラ。喧嘩はダメですよ」
　元々相性の悪いマインちゃんとシュラが喧嘩を始めそうな空気に、困った様子のシェーレさんがおどおどしつつも間に入って宥めようとする。
　だがしつこく絡んでくるシュラにうんざりしてた俺としては有難い流れだ。
「聞いてよマインちゃん。こいつまた風呂覗こうとしてたんだぜ？」
「うわぁ、相変わらず最低ね……。いっそここで殺す？」
「それ賛成」
「ああ？やんのかてめぇら」
「あ、あのぉ…シュラも一応私達の仲間なんですから、ね？皆さん仲良く……」
「「こいつとだけは無理（です／よ）」」
　いくらシェーレさんの頼みでもそれは無理だ。奴と居るだけで不快なのに仲良くなんて出来るわけがない、と俺とマインちゃんの意見が見事に合致し、シェーレさんが苦笑する。
「シュラ、まだ覗くつもりでいるならあたしのパンプキンでその脳天撃ち抜いてやるわよ？」
「……ちっ、今回はやめといてやるよ」
　二対一では不利だと悟ったシュラは、女の敵に容赦はしないつもりのマインちゃんの脅しで漸く諦め、悔しそうにこの場を去って行った。
「いやぁ、助かったよマインちゃん。あのバカを追っ払ってくれてありがとね」
「別に。見てて不愉快だったから早くあたしの視界から消えて欲しかっただけよ」

ふんっ、とそっぽを向くマインちゃんは相変わらず素直じゃない。お礼を言うのも言われるのも苦手で、つい刺のある言い方をしてしまう彼女らしさは今も健在だ。
「そういえばラバ、タツミにはもう挨拶したんですか？」
「うん、ちょうどさっきね。今頃は兄さんのとこにでも行ってるんじゃないかな？」
そして姐さんに遊ばれているであろう、とからかわれるきっかけを作った俺は内心ほくそ笑む。
「ふふっ、これからまた賑やかになりそうですね」
「はぁ…なんでみんなして歓迎ムードになってんのよ。あたしはあんな田舎者なんて認めないんだからね」
「そう言うなってマインちゃん。せっかくの貴重な人員なんだぜ？シュラは無理でも俺らと同年代のタツミとは仲良くしなよ」
「まぁ流石にシュラ（アレ）程とは言わないけど……でもやっぱりあんな生意気な奴と仲良くする気はないわ」
生意気なのはマインちゃんも同じでしょ、と思って呆れるが、口にしたら俺が怒られるので黙っとく。
だがマインちゃんがタツミを毛嫌いするのは想定内。でもこれが後に恋人関係になるのかと思うとやはりタツミが憎い。
ん？タツミを憎んでなんかないってさっき言ったばっかりだろうって？それとこれはまた別だよ。俺のモテ男への憎しみは永久に不滅だからね。
まぁそんな俺の心中は置いといて。マインちゃんとシェーレさんの二人と別れた俺はそのまま目的地の風呂場へと再び向かった、のだが……。
「……念の為、罠でも張っとくか」
これまでに何度も風呂場に突撃されたせいで未だにあいつを警戒している俺はこの後、散々自分が行ってきた覗きスポット全体に帝具で罠を仕掛けた。
しかし周囲に張り巡らせた糸には最後まで誰も掛からず、俺の心配は杞憂に終わる。おかげで罠を張った労働と時間が無駄になり、ナ

ジェンダさんからの召集に遅刻しないよう入浴時間を短くせざるを得なくなってしまった。
「あーもう!!!なんで俺は毎回あんな奴に振り回されなきゃいけないんだよ!?」
姐さんを始めとした他の女性陣も懲りずに覗き行為をしてきた俺に対してこんな気持ちだったのかと思うと、殺さずに済んでくれていた彼女達の優しさを改めて思い知る。
でもやっぱり性欲に逆らえないのは女好きの元男として首を何十回も縦に振れる程理解出来るから超複雑なわけで。精神と肉体の性別が不一致である限り、誰にも理解されないこの苦悩は一生絶えなさそうだ。

奇襲を斬る

深夜、辻斬りを恐れる住民が家で大人しくしている就寝時間。警備隊達が慌ただしく走り回る音が遠くから聞こえる。

今回ナジェンダさんから与えられたナイトレイドの仕事は、『首斬りザンク』の討伐。その名の通り人の首を斬り続けている辻斬りの帝具使いとの戦いだ。

だが前世でアカメちゃんが葬った事を唯一知る俺は、今回も彼女達に任せておけば良いと少々気楽な調子でいた。

その慢心のせいで後々思わぬ不意討ちを受けると知らずに……。

「住民が外に出ないなら動き易いかと思ったが、これじゃあ首斬りザンクとやらは探せねぇな」

警備隊達に見付からぬよう路地裏で隠れている中、隣でつまらなさそうにぼやいたのは俺とタッグを組んでいるシュラ。

こいつは相方の援護どころか猪突猛進で動くその単独行動のせいで他のメンバーとあまり噛み合わず、おまけに本人が俺以外と組む気がないときて、普段から仕方なくこうして行動を共にしている。

「どうせ一周目みたいにアカメちゃんがザンクを始末するんだから、どっちにしろ俺らにやる事がないのは変わらねぇよ。暇だろうけど我慢しろ」

「ちっ、久々の帝具戦で思いっきり暴れられるチャンスだったってのに。結果がわかってるのもつまんねぇな」

離反前と比べて娯楽が少ない事に不満を抱くシュラの苛立ちは増す一方。顔バレや立場のせいで常に行動も制限されている彼のストレスも、そろそろ限界が近いのかもしれない。

「そんなにストレス発散したいなら、お前もブラートさんと練習試合でもしてみれば？あの『百人斬り』と戦える機会なんてなかなかないだろ？」

「それは断る」

俺の提案を青褪めた顔で即座に断ったシュラに、だと思った、と鼻で笑う。
ホモ疑惑があるブラートさんを極力避けるシュラの気持ちはよくわかる。でも今の俺ににとっては他人事。彼に怯えるこいつの姿を陰から見てざまぁ見ろと嘲笑うだけだ。
「……暇」
「だからって俺に抱き付くな、ウザい」
セクハラ常習犯（残念な事に俺限定だが）のこいつに抱き付かれるのは、不本意ながら大分慣れてしまった。
でも体格差のせいであまり抵抗出来ないこの体勢が好きではないのは変わらない。というかこいつに触られる事自体がやっぱり嫌だ。
今だってさりげなく腰を撫でてくるし、こいつへの嫌悪感が増していくのは当然の事だと思う。
「おい、いい加減にしろダンナ。触り方がキモい」
「最近タツミの奴ばっかり気にして俺に構ってくれねぇんだから、こんくらい良いじゃねぇか。久々に外でヤろうぜ」
「別に俺はタツミに構ってるわけじゃ……って、隙あらば脱がそうとしてんじゃねぇよこの変態ッ!!」
「ごふッ!?」
俺のズボンのベルトに手を掛けていたシュラの脇腹に、キツい肘鉄砲を一発食らわせる。
よろけた奴の腕から抜け出した俺はすかさず離れ、天敵に威嚇するように睨み付けた。
「ったく、こっちは触られるのを我慢してやってるんだから、てめぇもちったぁその性欲抑えろよ」
「あ？男ってのは女を抱くのが生き甲斐だろうが」
「童貞のまま死んで悪かったな!!」
一度も女性を抱く事なく最期まで初恋を大切にしていた俺にとって、童貞を侮辱するその台詞は禁句だ。
なのによりにもよってこんな奴に貞操を奪われたなんて……屈辱的にも程がある。

「あーくそっ！なんで童貞は卒業出来なかったのにあんな早い段階で処女を失ってるんだよ俺は!!これじゃあもうお婿に行けねぇじゃねぇか！」
「お前は将来俺の嫁になるんだから婿にはなれねぇだろ」
「誰がてめぇなんかに嫁ぐかハゲ!!」
「ああ!?俺様のどこがハゲてンだこのクソアマ!!」
こいつに嫁ぐのだけは死んでも絶対に御免だ。俺の人権を奪って弄ぶだけ弄んで、飽きたら捨てるという未来しか想像出来ない。そんな地獄みたいなとこに行くくらいなら死んだ方がマシだ。
しかしそうやって任務中にも関わらず騒いでいたその時、
「ッ!!?」
突如真上からゾクリとした不気味な殺気を感じ取り、シュラとは別々に飛び下がる。
そしてそんな俺らの間に降り立ったのは……。
「セリュー・ユビキタス……!?」
前世でシェーレさんを殺したイェーガーズの一員、セリュー・ユビキタス。生物型帝具の『ヘカトンケイル』を連れた彼女が、建物の屋上から俺ら二人を襲い掛かってきた。
何故ここに、と一瞬疑問に思うが、現時点のこいつはイェーガーズではなく警備隊の一人。ナイトレイドと同じくザンクを捜索していたのかもしれない。その途中で面が割れてるシュラを見付けてこちらを優先した、といったところか。
「顔の十文字傷…手配書と一致。ナイトレイドのシュラと断定！そして一緒に同行している女もナイトレイドの仲間と断定！」
ぐしゃりと握り締められた紙は、恐らくシュラの似顔絵が描かれた手配書だろう。
憎き相手に漸く出逢えた喜びなのか、小刻みに震える彼女は狂気に満ち溢れた歪な笑みを見せる。
「帝都警備隊セリュー・ユビキタス！絶対正義の名の下に悪をここで断罪する!!」
「……こりゃあ、かなり厄介な相手に会っちまったな」

直接会った事はないが、セリューの情報は前世でマインちゃんから聞いてる。セリュー自身の強さや、ヘカトンケイルの奥の手。そして何よりあの気配の消し方。

今まさに突き刺すような殺意を向けているというのに、相手に悟られずに襲撃してきたそれは俺達暗殺者と変わりない。だから全く気付けなかった。

「へぇ…ちょうど良い。さっきから暴れたくて仕方なかったんだ、久々の帝具戦といこうじゃねぇか」

冷や汗をかく俺とは対照的に、うずうずしていたシュラは戦う気満々な様子。既に臨戦体勢に入ってる。

本当なら奇襲を食らって崩れたこの陣形を直したいところだが、目を光らせるセリューの前では別の区域に居る仲間を呼びに行く隙も無さそうだ。

「しゃーねぇ…顔も見られちまったし、これも何かの縁だ。お前にはここで死んで貰うぜ、セリュー！」

キュルキュルと金切る音に近い音を鳴らしながら、指先の鈎爪から糸を放出させ身構える。

二周目の今とは関係がないとしても、一周目の彼女がシェーレさんを殺した事に変わりはない。復讐心を抱いているのはお互い様だ。

それに、ここでセリューを始末すればシェーレさんが死ぬ未来を変えられる。こうなった運命にむしろ感謝したい。

出逢う筈のなかった帝具使いとの死闘が、静かな夜の街中で幕を開けた。

正義と悪を斬る（前編）

お互い睨み合っていた中、先に動き出したのはセリュー……正しくはセリューの帝具、コロこと『魔獣変化ヘカトンケイル』だった。

仔犬の姿から巨大化したコロはまずシュラを狙い、鋭い牙を向ける。だがラバックが複雑な手の動きで素早く作り出した糸の壁が行く手を阻み、突っ込んできた勢いでコロの肉に糸が食い込む。

「その糸も帝具か！やはり貴様も凶賊、二人まとめて断罪してやる!!」

「ダンナだけならわかるけど、俺まで凶賊扱いされるだなんて心外だなぁ……。俺的にはあんたのその怖い顔の方がよっぽど悪役っぽく見えるけど？」

「正義を全うする私を悪だと偽る貴様らこそが悪だ!!凶賊と戦って殉職したパパとオーガ隊長の仇、必ず討ち取ってみせる!!」

「おいラバ！この姉ちゃんが話の通じる相手じゃねぇって前に自分で言ってただろ!?気ィ逸らそうとする余裕があるならもっとマシな策考えろよ！」

「あーもう！無茶言うなこの脳筋！こっちも必死なんだよ！」

シュラの言う通り、ラバックとしては自分との会話で少しでも彼から気を逸らせようと軽口を叩いたのだが、復讐心と歪な正義感に燃えるセリューには通じていない。現にラバックがコロと対峙している間にシュラがセリューへと技を繰り出し続けるも、トンファガンで上手く防がれていた。

しかし防御体勢でいるセリューは正面以外隙だらけ。そこを付け狙うラバックが糸を飛ばし、セリューの身体に絡めようとする。

だがセリューに糸が届く寸前、食い込んだ糸を無理矢理千切り再生したと同時に腕を生やしたヘカトンケイルが自身の腕を犠牲にして主人の身を庇い、ラバックは大きく舌打ちする。

「コロ、もう一度糸を引き千切れ！」

「キュゥウイ!!」

主人の指示に従う従順な帝具が筋肉質な腕に力を入れ、巻き付いた糸は再び引き千切られた。

「やっぱダメか…！これだから脳筋の相手は嫌なんだ！羅刹四鬼やイェーガーズの鎧野郎といい、なんで俺が戦う相手はこんな相性の悪い奴ばっかなんだよ!?」
「だが足止めには適してる。俺はあの姉ちゃんともうちょい遊んどくから、その玩具の相手は頼んだぜ！」
「あっ！おいこら!!勝手に行動すんなバカ!!」
セリューの元へと一直線に走り出すシュラをラバックが止めようとするが、大きく振られたコロの腕が道を塞ぐ。
「こんのっ…！躾のなってねぇ犬っころが！邪魔すんじゃねぇ!!」
上手く分断された事に苛立つラバック。夜の暗闇とコロの巨体が邪魔をするせいで先がよく見えず、これではシュラの援護が難しい。
「トンファガン!!」
ラバックがコロに苦戦する一方で、掛け声と共にシュラへと放たれる打突武器と銃を組合わせた特殊武器の銃弾。
しかし日頃から前任者だったナジェンダに続きマインにもパンプキンで撃ち殺され掛けてきたシュラはその軌道を見切り、臆する事なくセリューへと急接近していった。
「このおおぉっ!!!」
闇雲に射っているように見せかけて、セリューは敵の急所を狙っている。だが数多の技術の長所を取り入れたシュラの技の動きはセリューにとって見た事のないもの。予測出来ないそれに放たれたトンファガンの弾は全て躱された。
そして目前にまで近付いたシュラが殴り掛かろうとした瞬間、
「ダンナ！罠だ!!」
「!!」
ラバックの叫び声と同じタイミングで、セリューが口を大きく開けた。
「ぐぅッ!!」
発砲音と共に、赤い液体が飛び散る。
血が吹き出したのは、シュラの左肩だった。
彼がギリギリのところで避けようとした結果急所から外れ、間一髪

で即死を免れた。
「あっぶねぇ……。おかげで助かったぜ、
ラバ」
「どういたしまして」
「ちっ！死に損ないが!!」
より歪んでいく表情で歯軋りするセリューから、負傷した肩を右手で押さえるシュラは一旦距離を取る。
ラバックの声が無ければ確実に死んでいた。だが致命傷ではないものの、このまま出血が止まらなければ失血死する恐れがある。急いで止血をするべきだ。
けれどセリューがそれを許してくれるわけがなく、コロに追撃を指示する。
「させるかよっ!!」
シュラに向かってくるコロの前へ出て、糸の防御壁を両手で張るラバック。
しかし連続で繰り出される殴打の嵐は一撃一撃が重く、強い衝撃に耐えるラバックの足元が徐々に後ろへ下がっていく。
彼女が激しい猛攻に耐えられるのも時間の問題。もう一人も左腕を使えぬ今、自分の勝利はもうすぐだとセリューは確信する。
だがその自信が、セリューの身に危険を曝す。
「勝ったと思ったら大間違いだぜ姉ちゃん！」
「ッ!!?いつの間に!?」
ラバックの後ろに居た筈のシュラが、自分の背後に移動していた。
あの一瞬で一体どうやって、とセリューは思っただろう。だが指名手配されているナイトレイドの情報を持つ彼女はその理由をすぐに思い出した。彼は帝具シャンバラを使ったのだ。
傷を負った時……怯んでしゃがみ込んだその一瞬に、シュラは密かにマーキングを施していた。
まさに瞬間移動。対処が間に合わないセリューは諸に攻撃を食らう。
「吹っ飛べぇぇッ!!」

「ぐあああぁッ!!!」
まだ使える右腕で腹部を殴られたセリューが吹き飛び、地面に叩き付けられた。
しかし左肩の激痛によってシュラはその威力を最大限に出せなかったのか、セリューを仕止め切れなかった事に歯噛みする。
そして主人のピンチに気付いたコロが振り向こうとしたが、またしてもラバックの糸が邪魔をする。
「形勢逆転だな、セリュー!」
「くっ…!!」
シュラは負傷しているものの左腕以外は使える。しかもラバックはまだ傷一つないという圧倒的不利な状況。
このままでは悪であるナイトレイドに負けてしまうと直感したセリューは、意を決して口を開いた。
「(後でザンクを裁けなくなってしまうけど、やるしかない!)コロ、奥の手!!!」
周囲に居る者達の鼓膜を破かんとする雄叫びが街中で轟く。
想像以上の音にラバックとシュラは思わず耳を塞ぎ、立ち止まる。
……が、
「なぁーんちゃって」
「っ!!?」
糸で耳栓をしていたラバックが、してやったりと口角を上げる。
ラバックはコロの脇下に潜り込み、その死角からセリューに片手で束ねた槍状の糸を投げ込む。すると同時にセリューの勘が危険を察知し、彼女も己の脳に響く警鐘に従ってトンファガンを構えた。
そして次の瞬間――
「――がはッ……!!」
倒れたのは、槍を投擲したラバックだった。

正義と悪を斬る（後編）

一人音に対応出来ずにいたシュラは、信じられない光景に目を疑い絶句する。

相方が一瞬で壁まで吹き飛び、血反吐を吐いて地面に突っ伏した。そして標的を仕止め損ねた。ただそれだけしか理解出来なかった。

一瞬だった。本当に一瞬の出来事だった。セリューの胸に刺すつもりだった槍状の糸はトンファガンの弾が当たるも弾き返し、だが軌道を逸らされた今は彼女の脇腹に突き刺さっている。

そして槍が刺さった直後、あのままセリューの心臓を貫き即死させていれば機能が停止する筈だった狂化中のコロが、ラバックを容赦なく襲った。

瞬時に糸で防御しようにも即席の壁は容易く破かれ、正面から直撃してしまった。だが幸い、事前に自分の身体に巻き付けていた糸の防具のおかげで辛うじて息をしている。

「（やべぇ…身体が全く動かねぇ……ッ！）」

いくつか骨が折れ喀血するラバックのダメージはそれだけではない。壁に打ち付けられた際に強打したのか、頭から血を流す彼女の意識は朦朧としていた。

「はは…あははっ!!何が形勢逆転だ、正義は必ず勝つ！まずはその女からだ！踏み潰せええええェッ!!!」

高笑いするセリューの脇腹から溢れる血が、刺さった槍を伝って地面に落ちる。

それでも彼女は、死んででもナイトレイドを殺してやるという強い想いでコロへの指示を優先した。

～ラバックｓｉｄｅ～

ちくしょう…こんなところで……ッ!!

まだ死ぬわけにはいかない。やるべき事がこの先まだたくさんある。でもそれよりも、迫り来る死の恐怖が一番強かった。

視界がぼやける。全身が焼けるように熱い。またあの恐怖と痛みを味わうのは嫌だ。一度体験した死に怯える俺は心の底から助けを求める。

「ナ、ジェンダ…さ……」

死に際に思い浮かんだのはあの時と同じ。今も変わらない最愛の人。

ごめん、ナジェンダさん……俺、貴女の期待を、また裏切っちまうみたいだ……。

シュラの流した血も大分多い筈だ、恐らく俺を助けに来る余力もない。二度目の最期も呆気なかったなと苦笑して、己の死を迎え入れようと瞼を閉じる。

大丈夫、いずれまた受けるべき報いが前回より早く訪れただけだ。冷たい暗闇にいるのも、多分少しの間。何も恐れる事はない、そう自分に言い聞かせる。

……でも、

「死にたく、ない……」

心なしか、頬に何かが伝った気がした。

泥沼に沈むように薄れていく意識の中では、それが涙だと認識する事すら出来なかった。

～Ｎｏｓｉｄｅ～

「――シャンバラ!!」

コロの足が迫ったその時、彼はラバックの予想を裏切った。

出血が止まらない？そんなものは関係ない。そう言わんばかりに、シュラの身体は動き出していた。

コロにシャンバラを向け発動させる。その瞬間に現れた大きな陣が眩い光を放ち、コロを包み込んだ。

眩しさにセリューが目を瞑るが、次に瞼を開けた時には、相棒のコロがそこから消えていた。

「コ、コロ……？貴様、一体何をした!?」
「次元方陣シャンバラ……帝国軍の奴なら、そんくらいの情報は知ってるだろ？」
「っ!!」
「てめぇの玩具はもうここにはいねぇ。さぁ、ケリ着けようぜ！」
シャンバラの奥の手。マーキングの有無関係無しにランダムで対象をどこかに転送させる大技を使われた事で、動揺を隠せないセリューの額に汗が滲む。
お互い重傷で傷口から大量の血を流しており、どちらも今すぐ倒れても可笑しくはない状況。だが、
「帝具をまだ使用出来たのなら、何故一人で逃げなかった？悪らしく仲間を見捨てれば自分だけは生き残れるのに…！」
「……確かに、俺はてめぇが思ってるような極悪人だってのは認める。けどな、そんな俺でも、そいつの泣き顔には弱ぇみたいでよ……。ま、こんな事言ってもどうせわかんねぇだろうけどな」
この戦いに勝とうが負けようが、セリューがその理由を知る事はない。これ以上話す気のないシュラはいつでも彼女の攻撃に対応出来るよう姿勢を低くする。
再生能力を持つコロが居たのならセリューが勝っていただろうが、生憎その相棒はどこかに飛ばされた。これで勝敗は五分五分に見える。しかし、
「(くそっ、血ィ流してる状態で奥の手まで使っちまったから、正直かなりヤバいな……)」
失った血の量に加えて精神力を大幅に消耗するシャンバラを二度使用したシュラは肩で息をしており、その体力はもう限界に近かった。
自分の攻撃が相手に当たろうが当たらなかろうが、次の一手で決着が着く。両者がそう思っていた矢先、
「――が、あッ……!?!!」
突然、セリューが自分の左胸を握り締め苦しみ始めた。
何事かと目の前に居たシュラも驚くが、こんな芸当が出来るのは一

人しかいないと確信し、無意識に笑みが溢れる。
「まだ生きてるって信じてたぜ、ラバ!!」
「俺のしぶとさを…舐めんじゃ、ねぇよ……!」
シャンバラ発動時に放たれた光の眩しさに呼び起こされ、一時的に意識を取り戻したラバックが、息も絶え絶えな状態でありながらも地に伏したまま最後の力を振り絞るように槍に繋がった糸を引く。
「心臓に、糸を巻かれた気分は、どうだい？なかなかエグいだろ」
「き、さま……っ!!」
セリューに刺さっている槍の糸が体内で解けていき、その一本一本が心臓へと向かい締め付ける。
「残念だけど、これ以上喋ってる余裕は無さそうだ。先に地獄で待ってろ、セリュー・ユビキタス……!!」
ラバックの引いた糸が、セリューの心臓を無慈悲に砕く。
「こ、んな……うそ、だ……おーが、たい…ちょ……」
受け入れられない現実に絶望したセリューが最後に呼んだのは、師の名前。
憧れだった彼のように全ての悪を滅すると誓っていた彼女の夢は、またしてもナイトレイドの手によって途絶えた。
「へへっ……これで、シェーレさんが…死なず、に……」
「ラバ!!!」
止めを刺せた事に満足し再び気絶した彼女に、シュラが慌てて駆け寄る。
「おい!!しっかりしやがれ！てめぇがここで死んでどうすんだ!!」
前世では他者を弄び仲間の死すら興味を持たなかった彼は、初めて大切な人を失う恐怖を覚える。
死ぬな、目を覚ませと必死に身体を揺さぶり叫ぶ声に、愛する者は返事をしてくれない。
大勢の警備隊の足音が近くなり、もうすぐここに増援が来てしまうと悟ったシュラの焦燥は募るばかり。
大勢を相手に一人で、しかも手負いの状態で迎撃するのはどう考えても不可能。ラバックを抱えて逃げようとするも、彼にとっては負担

が大きく逃げ切れそうにない。シャンバラを使う体力も、とっくのとうに尽きている。
重体の彼女を見捨てれば自分だけは助かるだろう。けれど今の彼にはそんな選択肢はなかった。
ラバックと二人で勝利を掴んだ。なのに絶対絶命の状況がまだ続いている。万事休すかとシュラは諦め掛けてしまう。
……しかしその時、
「二人共、無事か!?」
彼らの元に駆け付けてくれたのは、アカメとタツミだった。
「ラバ!!?おい、そっちで一体何があったんだ!?」
満身創痍の二人を目にしたタツミが狼狽する。アカメもその顔に驚愕の色を表すが、冷静にラバックの容態を確かめた。
「……大丈夫だ、まだ息をしてる。だが急いで手当てしないと危険だ。タツミ、ラバを頼む」
「わ、わかった!」
指示されたタツミが急いで重体のラバックを担ぎ、アカメがシュラに寄り添い肩を貸そうとする中、シュラは都合が良過ぎる展開に呆然としていた。
「シュラ、立てるか?キツいなら私がおぶってやるぞ」
「いや、それは遠慮しとく。少しフラつくが、俺はまだ歩ける」
「そうか。なら急いでここを立ち去ろう。もう少しの辛抱だ、頑張ってくれ」
可愛らしい見た目に反して力持ちなアカメならシュラを抱えるのは可能かもしれないが、それは彼のプライドが許さない。
だがこうして仲間の有難みを思い知ったシュラはなんとも言えない気持ちが一気に込み上がり、俯いたその顔は思わず泣き出しそうな表情に。でも不思議と頬が緩んでいた。
「帰ろう、私達のアジトへ」

悪夢を斬る

――夢を、見ていた。

真っ白で何もない、けれど壁と天井が見えない広い空間。そこに俺は、一人ぽつんと佇んでいた。

一瞬、ここは死後の世界なのかと思ったが、何度か夢で見た事がある場所だと気付き、ああまたかとこれから起きる光景を覚悟して瞼を閉じる。

そしてもう一度目を開けると、遠く離れた場所に、ナイトレイドのみんなが居た。

早くみんなのところに行かなきゃという焦りが頭によぎって無意識に走ると、みんなは反対側に向かって歩き出す。けれど走る俺の足は段々沈むように重くなっていき、気付けば歩く事すら出来なくなっていた。

ダメだ、その先に行ってはいけない。戻ってきて……逝かないでくれ…！

いくら叫ぼうとしても、この夢の中では声は出ない。誰も足を止めてくれない。

やがてみんなは一人ずつ霧のように消えていき、残るは最後の一人だけ。

するとその最後の一人……直前まで一緒に居たのに、俺が止めなかったせいで逝ってしまったチェルシーが、こっちに振り向いた。

お願いだ、やめてくれ。また同じ事を繰り返すのは嫌だ。逝かないで……。

必死に懇願しても、その願いは叶わない。『ばいばい』と、声はなかったが唇の動きがそう呟き、彼女もみんなを追うように消えていく。

伸ばした手は届く筈もなく、独りぼっちになった俺はその場で蹲る。すると俺の悲しみに呼応するように、真っ白だった空間が真っ暗な闇に変わっていった。

しかし背後からの人の気配にふと気付いた俺は、振り返った瞬間に

また絶望する。
顔に十文字の傷跡が残った褐色肌の男。もう見慣れている筈なのに暗くて表情が見えないそいつは、黒いペンチを持っていた。
カチン、カチン、とペンチを鳴らしながら近付いてくるそいつに恐怖を覚えた俺は急いで逃げようとする。早く逃げなきゃまた捕まってしまう。
だが逃げようとした先には、刀を持った男が待ち構えていた。別方向に動こうとしても、地面から這い上がってきた屍達が俺の足を掴んで離さない。
殺される。そう直感した俺は、これが天罰なのかと悟る。同じ世界に再び産み落とされても、こうして未だに夢に出てきて俺を苦しめるのは、俺が今まで殺してきた奴らの怨念が生んだ呪いなんだ。
ならばもう受け入れるしかない。夢の中で何度も殺されて苦しんでも、俺の罪が消えるわけではないけど。でも抵抗する術は一つもないんだ。
逃げるのを諦めて脱力する俺に、刃が振り落とされた――。

「――っは！はぁ……はぁ……」
やっぱりあれは夢だった。全身から吹き出る汗と酸素を求める肺、そして鈍器で殴られた後のような頭の痛みと共に身体中が軋むように痛むのが、今が現実である証拠だ。
でも俺はまだ生きてる。助かったんだという安心感で、思わず涙ぐむ。するとその時、
「やっと起きたか、寝ぼすけ」
「!!」
声がした方へ向くと、そこには安堵の表情を浮かべるシュラの姿があった。
一瞬ビクリとしてしまったが、ここは夢の中とは違う。今はもう前世の彼とは違って敵ではないのだと思い出し、ホッとする。
「かなり魘されてたみたいだが、大丈夫か？」

「うん……昔の夢見てただけだから、大丈夫」
　これ以上心配掛けまいと平然を装い目を擦るが、余程酷かったのだろう。心配そうな表情をするシュラは、何も言わずに手に取ったタオルで俺の顔の汗を拭う。
「ありがと。……そういえば、そっちの怪我は…？」
「ん？ああ、こんぐらいの傷はお前が心配する程じゃねぇよ。タツミと一緒にちゃんと手当てされてるし」
「タツミ？もしかして、ザンクの討伐は……」
「そ。俺らが警備隊の姉ちゃんと戦かってる間に、お前の言う予定調和な結果に終わったってよ」
「そっか……それなら良かった」
　セリューとの戦いに夢中でザンクの存在をすっかり忘れてたけど、あちらでは何も問題がなかったみたいだし、シュラもタツミも無事で安心した。
「ただ、ヘカなんとかっていう帝具はまだ回収出来てない」
「えっ。まさかあの時使ったのって…？」
「どこに飛ぶか俺にもわかんねぇシャンバラの奥の手。とりあえずナジェンダの姉ちゃんに報告したら、スペ……なんだっけ？」
「五視万能スペクテッド」
「そうそれ。そのスペなんとかっつう帝具を届けるついでに、少人数の俺らじゃ探せねぇから本部の奴らにも協力を仰いでくるってよ」
　こいつの興味のないものに対する記憶力の乏しさは置いといて。ヘカトンケイルをその場で破壊出来なかったのはかなりの痛手だ。下手するとまた帝国側に取り戻されてしまう。
「はぁ、また予定が狂っちまったな……。今回は運が良かったけど、あれがまた敵として現れたらもう勝てる自信ねぇぞ」
「対策してたお前でもこのザマなだもんな。あの時は流石の俺も焦ったぜ」
「それはこっちだって同じだ。愚直特攻にも程があるっつうの」
「それはその……悪かった」
　ムッとしてお互い様だと訴えると、反論出来ないシュラは視線を泳

がせ、珍しく素直に反省した。
「それより、怪我の調子はどうだ？まだ起き上がるのはキツいだろうけど、何かやって欲しい事があったら言えよ」
「え？ああ、うん……。そういや、兄さんは居ないの？あのシスコンの事だから、ずっとここで俺の看病してくれてんのかと思ってたけど……」
「リネットの奴は大怪我したお前を見た途端にパニックになって、五月蝉かったからレオーネが黙らせて部屋に連れて行った」
「あ、そう……心配して損したわ」
またトラブルが起きたのかと思ったら、全く関係なくて乾いた笑いしか出ない。
あと黙らせたってのは多分物理でだろう。兄さんが殴られる姿が容易に想像出来る。全く、医者の癖に何やってんだか……。

～シュラｓｉｄｅ～
「そうだ、つい長話しちまったけど、お前が目ぇ覚めたってアカメ達に伝えねぇと……」
「あ、待って！」
椅子から立ち上がろうとしたその時、ラバックはまだ動くだけでキツいだろうにも関わらず無理して上体を起こし、俺の服を掴んで呼び止めた。
「その……あの時は、助けてくれてありがとう」
「!!……おう」
恥ずかしそうに伏せ目がちに礼を言われ、その可愛さに少し照れ臭くなってつい顔を背けてしまう。本当は自分も改めて礼を言わなきゃいけないのに、上手く言えずに相槌を打つだけになってしまったのも情けなく思う。
でもそいつはまだ俺に用があるらしく、手を離さない。どうしたのかと思い様子を伺うと、その手は僅かに震えていた。
「……怖かった。また、死んじゃうのかと思った」

やはり、あの時見た涙は俺の気のせいではなかったらしい。人一倍臆病なこいつは、一度経験した死を思い出して涙をポロポロと流し、怯えていた。
ラバックが俺に弱音を吐いたのは、ナジェンダが離反時に大怪我した時以来だろうか。でも今は当時よりも精神的にかなり参っているようで、普段頼りたがらない俺に縋って泣き始めた。
死ぬ瞬間の恐怖を知ってるのは、同じく二度目の人生を歩んでいる俺だけ。俺だけが、こいつの抱えている苦しみを理解出来る。だが慰め方を知らない俺は、どうしたらラバックが泣き止んでくれるのかがわからない。……それでも、
「……大丈夫、もうあんな目には合わせねぇから。次からは俺がちゃんと護ってやる。お前だけは、絶対に死なせない」
そう言って優しく抱き寄せると、ラバックは驚いた顔をする。しかし、
「っ！……護るとか、簡単に言いやがって……っ、そんな、ヒーローみたいな台詞…お前には、似合わねぇよ…！」
泣きじゃくりながらもそう嫌味を言って、潤んだ緑の瞳から零れる涙の量はむしろ増えていく。
その後もラバックは声を殺すようにして静かに涙を流し続け、彼女の気が済むまで俺も暫くそのままでいた。

――数分後。ラバックは泣き疲れたのか、また眠ってしまった。しかし先程と違ってその寝顔は穏やかであり、今は例の悪夢に魘される心配はなさそうだ。
「ヒーロー、か……」
再会して間もない頃に言われた、『たまには人助けもやってみれば？』というラバックの言葉が脳裏に浮かぶ。
昔からやんちゃばかりしていた俺が今更良い子ぶってももう遅い。でももし、ラバックの好きな漫画に出てくるような正義のヒーローになれたなら。他の誰も知らない物語で一度失った自分の仲間達を必

死に護ろうとするこいつの苦しみも、少しは楽にさせてやれるかもしれない。
今までは護りたいなんて感情はなく、ただこいつを惚れさせたい、俺のものにしたいだけだった。だが昨夜の一戦で死に掛けたこいつを見て、人間の脆さを改めて知った。壊す側ではなく、護る側として。『死にたくない』と泣きながら呟いたラバックの悲痛な声が、耳から離れない。何度も聞いては無視してきた言葉なのに、いつもと全く違う感情があったのを覚えてる。ラバックを死なせたくない。助けなければ。そんな知らない感情ばかりが溢れ、気付けば身体が勝手に動いていた。
好きな奴の為とはいえ、ガラでもない事をしたのは自覚してる。この俺が人助けなんて、昔の俺が聞いたら笑うに違いない。いや、離反してる時点で既に笑われてるか。
でも親父とか革命とか、そんなのはもうどうでもいい。怖がりで泣き虫なのに強がりなラバックを護れるなら、命でもなんでも捧げてやる。その為にも、俺はこいつのやりたい事を全力で協力しよう。
「お前が望むなら、ヒーローでもナイトでも、なんにでもなってやるよ、お姫様」
自分には全く似合わないキザな台詞を、目の前に居る眠り姫に向かって呟く。
元男の姫なんて聞いた事がない。けどたったの一人の……俺が護ってやりたいお姫様なんだ。
「……なんて、らしくねぇよな。お前に会ってから俺も随分と頭が可笑しくなっちまったな」
そう言いつつも、その声色は自分でも驚く程明るい。無意識に笑みまで浮かべてしまうくらい、ラバックの事が好きなんだなと改めて自覚した。
「……ぷふっ、聞いたかアカメ、タツミ。お姫様だって」
「うむ。これでやっとシュラも仕事にやる気を出してくれたみたいで安心した」
「いや、そうだけど多分そういう話じゃないと思うぞアカメ…？つか

姐さん、これって盗み聞きってやつじゃあ…？」
部屋の外から、何かひそひそ話す声が聞こえた。
瞬時にそれを察知した俺は血の気が引くのを感じながら恐る恐る振り向く。そして引き吊った顔でその先に居た三人と目が合うと、羞恥と怒りで顔を赤くし、
「お前ら、いつからそこに……！」
「い!?バレた!?」
『お前が望むなら、ヒーローでもナイトでも、なんにでもなってやるよ、お姫様』ってところからかな」
焦るタツミとは対象的に、俺の真似のつもりなのかイケボで律儀に教えるレオーネにカチンときた。
「……今すぐ忘れろ」
「やだね。だって面白かったんだもん」
「じゃあてめぇらはここでぶっ殺す!!!」
怒りの声と同時に走り出すと、レオーネ達は咄嗟に逃げ始める。だがタツミだけが若干出遅れていたので、まずはそいつから狙って行く。
「まずはてめぇから殺してやるタツミ!!待ちやがれェ!!」
「ちょっ!!?なんで俺が真っ先に追われるんだよおぉぉ!!?」
「ラバックに気に入られてるてめぇは最初から気に食わなかったんだよ！覚悟しろォ!!」
「理由が理不尽過ぎる!?」
ひいいいぃーっ!!と悲鳴を上げるタツミを追い続ける俺は、レオーネとアカメを見失うも後から見付けてタツミ共々拳骨を食らわせた。
だがラバックにもあの独り言を聞かれていたのを知るのは、まだ先の事である。

感謝を斬る

あれから暫く経ち、まだ完治とまではいっていないが、ラバックが漸く動けるようになった頃。今日の俺はタツミと一緒に任務をする事になっていた。

そしてちょうどアジトを出ようとした時、

「あ、居た。おいシュラ、タツミ。これ忘れてるぞ」

ひょっこりと現れたラバックが、弁当らしき包みを俺ら二人に渡してきた。

「おー、悪ぃ悪ぃ。危うく昼飯抜きになるとこだったぜ」

「俺も完全に忘れてた。わざわざ持ってきてくれてありがとな、ラバ」

「礼なんていいよ。でもそれ食ったら後で感想聞かせろよ。弁当どころか料理自体かなり久々だから、いまいち自信ないんだよね」

……今、こいつはなんと言った？

自分が作ったと言ってるに等しい台詞を聞いて、思わず耳を疑う。普段はリネットかアカメが飯や弁当を作るが、今日はラバックの手料理、だと…？……ダメだ、嬉し過ぎてニヤけちまう。

「……おい、何ニヤついてんだよダンナ。鏡で自分の顔見てみろ、すっげぇ気色悪ぃぞ」

「いや、お前の手料理なんて初めてだからな。これが愛妻弁当ってやつか」

「は？勘違いすんな。タツミの分もあるだろ」

「え、両方俺のじゃねぇの？」

「ちょっ!?俺の弁当まで食うつもりだったのかよあんた!?そういうのはアカメだけにしてくれ！」

「まぁ今のは半分冗談として」

「残りの半分は本気かよ!?」

俺の冗談を真に受けて抗議するタツミに、悪かった悪かったと適当に言ってあしらう。

「ラバック、一体どういう風の吹き回しで俺らの弁当を作ったんだ？今日は槍でも降るのか？」

「うっせぇな……こないだの礼みたいなもんだよ。ほら、タツミも怪我してたのに俺を運んでくれたんだろ？だから今はこんぐらいしか出来ないけど、感謝の気持ちくらいはちゃんと伝えないとなって……。でもいらないならその辺にでも適当に捨ててくれ」
予想外過ぎて訝むと、照れ臭そうにしながらそう言われた。可愛過ぎかこのツンデレ娘。
「こんな貴重なもの捨てるわけねぇだろ。お前の手料理なんて一生に一度食えるだけで奇跡なんだからその味を忘れないように大事に食うわ」
「お前のその俺に対する信仰心みたいなやつはなんなの…？マジでキモいよ…？」
本音を言っただけなのになんかすげぇドン引きされた。弁当を作ってくれるなんて優しいと思ったら急に辛辣でちょっと傷付く。
「まぁいいや。用はそんだけだから、俺はそろそろ部屋に戻るよ」
そう言ってラバックはひらひらと手を振り、自室へと戻って行った。そしてそれを見送った俺とタツミも貰った弁当を荷物に入れ、その中身を開ける瞬間を楽しみにしながら仕事に向かう。

「――……久々に作ったとは思えねぇなこれ」
標的とその警備の確認を終えた昼時。自信なさげだった割にしっかりしている弁当の中身に、俺とタツミは驚いた。
小振りのハンバーグやミートボールなどといった俺の好きな肉料理に加えて副菜のサラダを添えられたそれは、健康重視で物足りないリネットや、逆に胃が破裂しそうな程ボリュームのあるアカメが作るそれと違って偏りがなく、ちゃんとバランスを考えて作ってくれたのが伝わる。味付けも文句なし。むしろ毎日食べたいくらいだ。
流石ナイトレイド一の器用自慢を自称するラバック。料理もこんなに上手いとは、きっと将来良い奥さんになるに違いない。
「はぁー、あいつどうやったら俺の嫁に出来っかな……」
「シュラって基本そればっか言ってるよな……。ずっと気になってた

んだけど、どういうきっかけでラバの事好きになったんだ？」
「ん？そうだなぁ……一目惚れ、かもな」
「かも？」
「初対面の時は顔が好みだってすぐ思ったが、当時はこういう恋愛感情とか知らなかったからな。その時点で好きになったのか、まともに会話するようになってからなのかは自分でもわかんねぇんだ。だから、気付いたら好きになってた、ってのが正しいな」
「へぇ……恋ってそういうもんなのか？」
「さぁな。人それぞれなんじゃねぇの？ま、どちらにせよいずれお前にもわかるさ」
　ラバックが言ってた未来通りならな、と内心で呟きながら。
　タツミは、そうかなぁ？と考えるが、自分にはまだ難しいと判断してそれ以上の思考は諦めたようだ。
　タツミの未来については全く興味ない。だが前回ラバックと出会うきっかけをくれたこいつには、多少は感謝してなくもない。
「にしても、シュラ達が離反した時の話も聞いたけど、好きな子の為だけに親を裏切ったってすげぇよな。俺にはそんなの考えられねぇ。……もしかして、元々父親を恨んでたとか？」
「いや全然。むしろあのクズっぷりに憧れてたぜ」
「憧れ……」
　信じられない、と言いたげな顔をするタツミ。そりゃそうだ、俺の親父は帝国を腐らせた悪の親玉みたいな存在なのだから。
　だがその息子である俺はそんな親父の強大さに憧れを抱いた。逆らう者を排除し、恐怖を与え全てを支配し、一つの国を思うがままにしている親父の事を。力こそが全てだと俺に教えた親父を越えれば、俺は一人前になれると思っている。
　しかしその野望は今は後回しだ。それよりも優先したい事が出来てしまったから。
「まぁ、うちの場合は親父があれなおかげで色々狂ってるからな。普通の家とは感覚も違ぇんだよ」
「……じゃあ、なんで離反を？」

「それはさっきお前が言っただろ?ラバックの為だってな」
とは言ってみたものの、タツミは納得してない様子。どんな理由があっても迷いなく身内を裏切るという考え自体が理解出来ないらしい。でも多分、それが普通というものなのだろう。
「それよりお前の箸全然進んでねぇぞ。残すなら俺が全部貰う、寄越せ」
「いやいやまだ食ってから!ってかラバの手料理だからってマジで俺の分まで取ろうとすんなよ!お前はアカメか!?」
これ以上この話しても時間の無駄だと思った俺は箸が止まってるのを指摘し、タツミの唐揚げを盗もうとするも阻止される。だが大食いのアカメと一緒にされたのは心外だ。
とまぁおかずを取り合ってギャーギャー騒ぎながら食事をした後は難なく任務をこなし、俺とタツミは真っ直ぐアジトへと帰還した。

「おっ、帰ってきたか。おかえり」
アジトに帰ってすぐ出迎えてくれたラバック。弁当の感想が気になってそわそわしてるのがわかり易くて可愛らしい。
「ただいま。ラバの弁当美味かったぜ」
「そう?なら良かった。まぁ今回のはリハビリみたいなもんだったからな。次作る時があったらもっと美味いの作ってやるよ」
誉められたのが余程嬉しかったのか、ラバックは自信なさげだったのが嘘かのように腕を組んでふふんと胸を張る。
だがそこでアカメが俺とタツミに近寄り、こう耳打ちをしてきた。
「ラバはああ言ってるが、本当は何度か失敗して自信を失ってたんだ。でもお前達への感謝の気持ちを形にしてちゃんと伝えたいからって、諦めずに頑張っていたぞ」
「!!へぇ、そうだったのか……」
怪我もまだ治り切ってないのに、自分（とついでにタツミ）の為に努力して作ってくれたと知り、より一層嬉しさが込み上がってくる。
「わざわざ俺らの為に頑張って作ってくれたなんてな。お前も結構健

気なとこがあるんだな、ラバック」
「べ、別にそこまで苦労したわけじゃねぇし！こんぐらい楽勝だっての！」
「ははっ、やっぱラバってシュラには素直じゃないよなぁ。愛情の裏返しってやつ？」
タツミがそう言った瞬間、ラバックが無言の腹パンを食らわせた。
「な、なんで…!?なんで今殴られたんだ…!?」
「五月蝉ぇ、てめぇは暫く黙ってろ」
拗ねたようにぷいっと背を向けてしまったラバックの耳がほんのりと赤くなる。だがそれに気付いたのは、彼女の努力を隣で見ていたアカメだけだった。

嘘を斬る

はじめまして、私はサヨ。私と幼馴染みのイエヤスは帝国兵士になって故郷に仕送りをする為に帝都に来たのだけど、わけあって今はメインストリートの一角にある貸本屋、『ＢＯＯＫ　Ｎｉｇｈｔ』で働かせて貰ってるわ。

そんな私達は今日、怪我で一ヶ月程休んでいた店主の復帰を喜んで祝っていた。

「よっ、やっと戻ってきたな、店長！」

「クロース、復帰おめでとう。怪我をしたってリネットから聞いてたけど、もう大丈夫なの？」

「ああ。傷の痛みはもう大丈夫。でもまだ完治したわけじゃないから運動は程々にね、ってさっき兄さんに言われたばっかだよ」

「君が何度注意しても無茶ばっかするから僕は口を酸っぱくして言ってるんだよ？お説教が嫌なら心配させるような事はしないで」

「ほらまた始まった」

自分の兄であるリネットの説教にうんざりする店主、クロースはやれやれと肩を竦める。いつも通りの日常に戻ったような光景に、私とイエヤスも楽しげに笑う。

クロースの怪我は、不運な事に帝都で偶然ガラの悪い人達に絡まれて出来てしまったものらしい。やっぱり以前から思ってはいたけど、この街は治安が悪過ぎる。暗殺集団のナイトレイドはまだ一人も捕まってないらしいし、最近はもう聞かないけど、先月までは首を斬る辻斬りも出没したって噂もあったし……怖い話ばかりだ。

そんな街で暮らす自分達も他人事のように考えないで気を付けなきゃと思いつつ、未だに連絡が取れないタツミの安否がとても心配だった。

「サヨちゃん？難しそうな顔してるけど、どうかした？」

「えっ？う、ううん、なんでもないわ。ただ、クロースを襲ったのが噂の辻斬りじゃなくて良かったと思って……」

「……そか。心配掛けちゃってごめんね？」

本当に申し訳なさそうに苦笑するクロースにまた謝られて、謝まって欲しかったわけじゃないのに、と少し後悔した。
クロースは、恩人であると同時に私達の大切な友達だ。もちろんこの仕事と彼を紹介してくれたリネットも。でもあの二人は私達に隠し事をしてる。実際、兄のリネットは弟のクロースの名前を間違えそうになる事がたまにあるので、二人の名前は偽名の可能性が高いのだ。
それでも私達は二人が良い人だって信じてる。いや、信じたいから、何も疑ってないフリをしてる。この関係が続く限り、ずっとこのままでいるつもりだ。
「さて、駄弁ってないでそろそろ仕事を始めようか。今日の客寄せは常連への挨拶がてら俺がするから、サヨちゃんは兄さん達の手伝いをしてあげて」
「わかったわ。でもクロースはまだ病み上がりなんだから、体調に変化があったらちゃんと言ってね」
「うげ、サヨちゃんまで兄さんみたいな事言うの？信用ないなぁ……」
「私とリネットはただ心配性なだけよ。貴方の事は信用してるから安心して？」
「……まぁ、それなら良いけど」
信用してる、と言ったその時、クロースはどこか悲しそうな顔をしていた。けれど私はそれに気付かないフリをする。
彼らの秘密を知ったら、二人は黙って私達の前からいなくなってしまいそうな気がして……それが嫌で、辛らそうにしながら何かを必死に隠そうとしてる友達の事を、何も知ろうとせずに『信じてる』と言ってしまうのは、狡いだろうか？
そんな酷い私を知らずに仲良く接してくれるクロースは、またいつものように笑顔を作って仕事を始める。
彼が外に出て行った途端に、近所の人々や店の常連と挨拶を交わす声が聞こえてきた。久しぶり、最近見なかったけど大丈夫か、などといった知人達からの心配の声も。
「ふふっ、やっぱりクロースはみんなに愛されてるわね」

「そりゃあ常に明るくて気の利く奴だからなぁ……。俺もポジション的にはあいつと同じなのに、なんでこうも扱いが違うんだ？」
「あんたの場合はただのバカだからよ」
「ンだとぉ!?このイエヤス様のどこがバカっていうんだよ!?」
「自分で様とか言ってる時点でバカ丸出しじゃない。知り合いだと思われたくないから私から離れて頂戴」
「酷っ!?つか俺今日レジ担当だからな!?持ち場離れろって言うのかこの女!?」
「相変わらず仲良いねぇ、二人共」
　本棚を整理していたリネットが私達を見てクスクス笑う。幼馴染みのイエヤスと仲が良いのは認めるけど、微笑ましそうにされるとなんだか気恥ずかしい。
　しかし営業中なのに雑談していたその時、常連のお客様が入店してきた。
「おいーっす。邪魔するぜー」
「やぁレオーネ。また酒瓶を持ってきたみたいだけど、ここは居酒屋じゃないっていい加減覚えようね」
「つれない事言うなよリネット！お前も飲んでみれば酒の良さがわかるって！」
「生憎お酒は苦手だから僕は遠慮するよ」
　飄々とした様子でリネットの肩を組む女性はレオーネさん。容姿が良く露出が多い服を着ている彼女は、昔からリネット達と仲の良い常連らしい。
「レオーネさんいらっしゃい。今日もお酒飲むんですか？」
「まぁね。でも今回は連れも居るから、少し控えるつもりだよ」
「そうですか……って、あれ？」
　レオーネさんが視線でその連れを促したのでそちらに目を向けると、そこにはクロースとその隣にもう一人……懐かしい顔があった。
「……タツミ？」
「ん？……サヨ？」
　私と目が合った途端にきょとんとした顔をするその人物は、間違い

ない。帝都に来る途中ではぐれたタツミだ。
　すると彼の声にイエヤスも気付いたようで、慌ててレジから離れてこちらに集まってきた。
「誰かと思ったらタツミじゃねぇか！今までどこ行ってたんだよお前！」
「イエヤス!?お前も無事だったんだな！」
　漸く果たせた感動の再会。喜びを分かち合うように熱い握手をする彼らの間に私も入り、
「……バカ、心配したんだから」
「うん、俺も凄く心配だった。また会えて嬉しいぜ、サヨ」
　こつん、とタツミの胸に当てた私の拳の力は弱々しい。でもタツミはそんな私の頭を優しく抱き締めてくれた。

「……そこのお二人さん、うちの店でイチャイチャしないでくれませんかね」
「っ!!?」
　突然、横からぬっと現れたクロースに驚き、咄嗟にお互い離れる。ただクロースはニコニコとした笑顔なのに目が笑ってなくてちょっと怖い。
「イ、イチャイチャだなんてそんな…!?」
「そ、そうだぜラバ！俺達はただの幼馴染みで……いだっ!!?」
「幼馴染みだぁ!?姐さん達だけじゃなく幼馴染みとかいう超羨ましいシチュエーションまで体験してるのかよてめぇ!!許さん!!もう許さんぞお前ェ!!」
「……ラバ？」
「あっ……」
　タツミの頭を叩いた直後に肩を掴んで激しく揺らすクロースが大声で騒ぐせいで危うく聞き逃しそうになったけど、タツミがクロースの事を『ラバ』と呼んだのに気付いたイエヤスが呟いたその瞬間。騒いでいた二人がしまった、と焦りの色を顔に浮かべた。
「……なぁ、クロース。俺ずっと思ってたんだけどさ……お前の名

前って、やっぱり偽名なのか…？」
　遂にイエヤスが訊ねてしまった禁断の秘密。真実を問われたクロースは……。
「……流石に、これ以上は騙せないか」
　諦めたように溜め息を吐き、嘘を肯定した。
「ご、ごめんラバ！俺、つい……！」
「いいよもう。元々兄さんがしょっちゅう間違えそうになったりしてたせいで勘付かれてたっぽいし」
「いやぁ、そのぉ……だって、ねぇ…？なんでもないです僕のせいですごめんなさい」
　言い訳しようとしたリネットがクロースに睨まれた事によって早口で謝罪する。しかも滝汗まで流していてとても情けない。
「まぁ、結局これも俺の我が儘だしな。付き合ってくれていただけでも有難いし、今回は許すよ。……イエヤスの言った通り、クロースは偽名だ。今までずっと騙しててごめんな、二人共」
「……ラバ。俺のせいで嘘がバレちゃったのにこんな事聞くのもあれだけど……二人に、全部話しても良いか？」
　観念したように白状するラバックに、タツミが真剣な表情で何かを訊ねる。
　それを聞いたクロースは顔を上げ、鋭い目付きで彼を見つめた。
「……良いのか？俺らの話を聞いたら、あの二人も簡単には故郷に帰れなくなるぞ？」
「それは……でも、このまま話さなかったら、二人と敵対する事になるかもしれないだろ？」
　いつもの優しい笑顔の面影がない、突き刺すようなクロースの殺気に思わず私とイエヤスは慄く。けれどそれを向けられたタツミは一瞬狼狽えながらも、臆する事なくクロースを真っ直ぐ見据える。
　故郷に帰れない？私達がタツミ達と敵対するってどういう事？
「……大事なお話中悪いんだけどさ。ここだと誰かに聞かれちまうから、奥の部屋に移動しないか？続きはそこで話そうぜ」
「……それもそうだな。このまま黙秘しても気まずいままだろうし、

二人にも俺らの秘密を教えるよ」
そう言って店の奥へと促すレオーネさんとクロース。タツミとリネットも黙って二人に続く。
彼らの嘘と秘密。その真実を知ったら、私達の関係は変わらずにいられるのだろうか。そんな不安を抱えながら、私とイエヤスは付いて行った。

真実を斬る

「――……ここから先の事は誰にも言うなよ、いいな？」
店内の奥にある在庫部屋の隅。ラバがその床にあった隠し扉を開けると、地下に続く階段が現れた。
「すっげぇ！秘密基地みてえだ！」
「こういうのってロマンがあって良いなぁ…！」
「そ、そうかしら…？私はちょっと怖いわ……」
イエヤスと一緒になって子供のように目を輝かせる一方、サヨはその先の暗さに怯える。
「下は暗いから降りる時は気を付けてね」
「そうそう。あとこの先はサヨちゃんが一番最初に行った方が良いよ」
「え!!?なんで私!?」
「だってサヨちゃんはスカート履いてるし……俺らが下に居ると中見えちゃうよ？」
「!!先に行くわ！」
ラバに指摘されたサヨが顔を赤くして階段を降りて行き、ラバも彼女に続いてく。
「なんかクロースがサヨに紳士的な対応するなんて意外だなぁ。あいつ俺と同じスケベ野郎なのに」
「その気持ちはわからんでもないけど……まぁ、ラバは女の子の事よくわかってるからなぁ」
「？」
ラバは同性が好きみたいだから、未だに彼女を男だと思い込んでるイエヤスの意見はよくわかる。まぁラバが男だろうが女だろうが、サヨからしたらただのセクハラだと思われていそうだが。
つか名前ややこしいな。ラバは手配書が回ってるわけでもないのに、なんで名前や性別まで偽ってるんだ？何か理由があるとしても、そこまでしてこの店を経営したかったのだろうか？
この先に行けばその秘密もわかるかもしれない。そう思いながら

俺も下へと降りようとした。……が、
「うわぁ、思ってたより暗い……なッ!!?」
「ん?どわぁッ!!?」
足元がよく見えず、不覚にも階段を踏み外してしまった。しかも落ちた先にはラバが居て、彼女を下敷きにしてしまう結果に。
「二人共大丈夫!?」
「いってて…俺は平気……。それよりごめんラバ、怪我はねぇか?」
「う、うん…大丈……」
先に降りていたサヨが心配の声を上げ、俺は薄暗い中慌てて上体を起しながらラバに怪我はないかと問うが、彼女の声は途中で途切れる。
どうしたのだろうか、と疑問に思ったのも束の間。その原因は、床に付けていたつもりだった俺の手が、ラバの胸を思いっきり掴んでいたからである。
「えっと……これは、その……」
サラシを付けて隠しているとは聞いていたが、直に触ってしまえばその柔らかさは女の子のものだとはっきりわかる。意外と大きいな、なんて頭の隅では考えながらも、全身からはダラダラと汗が流れていく。
すると硬直していたラバはみるみると顔を真っ赤にし、
「い、いやあぁぁぁーーーッ!!」
「ぶふぇッ!!?」
バシィーンッ!!と俺の頬を強く叩いた。
「ラバ!!?何かあったの!?」
妹の悲鳴を聞いたリネットが急いで降りてくる。しかし追撃で横腹を蹴られて転がる俺の下から自力で脱出したラバは、
「姐さぁぁぁーーん!!」
「おおっと!?どうしたラバ?」
真っ先に心配して来てくれたリネットを素通りし、後から来た姐さんに涙目で抱き付いてその豊満な胸に顔を埋める。
それがかなりショックだったのか、彼はその場で固まってしまっ

た。
「うっ、ひっぐ……タツミが…タツミが俺の胸触ってきたぁ…！」
「おいおい、遂にシュラだけじゃなくてお前までラバにセクハラし始めたのかタツミ？好きな子虐めは感心しないぞー」
「ち、ちがっ!!誤解だよ姐さん！あれは不可抗力で…！」
「タツミくぅーん？今、うちの妹に何をしたって？」
「ひぃっ!!?」
ふふふ、と不気味な笑顔でナイフを取り出したリネットにビクリと肩を揺らす。
ヤバい、シスコンに殺される…！だがそう悟ったその時、
「今のって、誰の悲鳴だ…？」
「まさか、クロース…？妹って…？」
流石にさっきの悲鳴は男の声とは到底思えなかったのだろう。困惑するイエヤスとサヨは、姐さんに泣き付いたままのラバを見つめていた。

「――えーっと……まずクロースの本当の名前はラバックで、実は女の子。しかもここに居る全員があの殺し屋集団ナイトレイド…？」
「あー、ダメだ、色々あり過ぎて頭が付いて行けねぇ……。つか俺らとあんま歳変わんねぇのに帝国兵士から暗殺者にって、クロ……じゃなくてラバックの経歴すげぇな」
店の地下にあったナイトレイドの隠れ家。机を挟んだ二つのソファーに左からサヨ、俺、イエヤスと、その正面にラバ、姐さん、リネットの順で座っている中、俺達の正体を明かされた二人は頭を抱えていた。
因みにラバの名前だけでなく性別までバレるきっかけを作ってしまった俺はラッキースケベの件も含めて深く反省し、つい先程ラバに土下座したのだが、未だに怒った顔のままそっぽを向かれている。更にリネットがずっとニコニコした笑顔で俺を見てるのも物凄く怖い。いやほんとマジで怖いです許して下さい…！

「帝都の悪政が酷いのは噂で知ってるけど、それに対抗してる反乱組織にタツミが関わっていたなんてね……」
「世間って意外と狭いんだなぁ。誰にも頼らず自分達でーって意地張らずに素直にリネット達にもタツミを探すの手伝って貰えば良かったぜ」
「それは俺もさっき思った。まさか二人の店で働いてるとは思いもよらなかったよ」
「……お前ら冷静だな。話聞いたらもっと動揺すると思ったのに」
「これでもまだかなり動揺してるわよ。ただ殺し屋とは言っても、貴方達が根っからの悪い人じゃないって信じてる……ううん、信じたいから冷静を装ってるの。だって、私達友達でしょ？」
「!!……うん。ありがとう、サヨちゃん」
　正面に座るサヨに手を握られながらそう言われたラバが、泣き笑いにも見える素の笑顔で礼を言い、その手を握り返す。
　ラバとリネットは二人をずっと騙し続けてきたけど、とても良い奴らだ。だからきっと今まで相当な罪悪感があったに違いない。でもそんな二人だからこそサヨも信じようとしてくれてるんだと思う。
　だがその感動の空気をぶち壊すように、姐さんの冷たい口が静かに動いた。
「それで？君らは私達の秘密を知っちゃったわけだけど、これからどうする？もし革命軍に協力しないなら、今ここで消されるかもしれないよ？」
「っ!!姐さん！」
　二人を消すという姐さんの発言に、俺は感情的になって勢い良く立ち上がる。しかし、
「……私は革命軍に入るわ」
　迷いのない目で、サヨがそう言った。
「ナイトレイドはあくまで悪者を倒す殺し屋なんでしょ？帝国兵士に志願しようと決めた時点で人を殺すのは覚悟してるし、理不尽な理由で罪のない人達を殺してしまうのと比べたらこっちの方が良いわ」
「いや、そんなあっさり決めちゃって良いのかい？悪者を倒すからっ

て、僕達は別に正義のヒーロー集団じゃないんだよ？」
「わかってます。でも村が苦しんでるのは今の帝国のせいなんでしょ？それを一度壊して再構成した新しい国が貧しい人々を救ってくれるのなら……私は迷いなく協力するわ」
サヨの意見にはイエヤスも賛成のようで、俺の横でうんうんと頷く。
「ま、そういう事だから俺らもそのナイトレイドに入るぜ。このままバイト生活を続けても村への仕送りがキツいし、しっかりした仕事も見付かって一石二鳥だ」
「サヨ…イエヤス…！」
これで二人が帝国軍に入って俺達と敵対する、なんて最悪の未来が免れた。大切な幼馴染みが味方になってくれた事に心底安堵する。
すると最初からこの結果をわかっていたかのように満足気な笑顔を浮かべる姐さんが、やれやれと呆れた仕草をしつつも嬉しそうに弛緩した表情を浮かべるラバとリネットにアイコンタクトを交わし、三人同時に立ち上がった。
「それじゃあ、そうと決まれば早速二人をアジトに連れて行かないとね。また仲間が増えたってボスに報告だ」

自覚を斬る

「あの～、サヨさん？なんで俺はこんな格好をしなきゃいけないんでしょうか？」

サヨちゃんとイエヤスをナイトレイドに迎えてから早数日。アジトで一緒に住む事になった二人が漸くここに慣れてきた頃、サヨちゃんに呼び出された俺は何故か着せ替え人形にされていた。しかもご丁寧に髪型やメイクも衣装に合うものに変えて遊ばれている状態だ。

目の前の姿見に映るスリットの深い緑のチャイナドレスに二つのお団子頭をした自分の姿に、意外と似合ってんじゃん、なんて満更でもない事を思う反面、羞恥と太股の違和感に我慢ならず早くいつもの服に着替えたくて仕方なかった。

「うんうん、やっぱりこれも良いわね！ラバったら元が可愛いから何着ても似合うわ～！って事で次はこっちをお願いね！」

「褒めればなんでも着ると思わないでくれないかな!?あとメイド服は若干トラウマだからやめて頂けると助かるんですが!?」

「そうなの？じゃあこのナース服を……」

「じゃあって言いながら脱がそうとしないで!?そんな丈の短いスカートも絶対無理だからね!?見えちゃったらどうすんの!?」

「大丈夫大丈夫！今ここには私とラバしか居ないから！」

「そういう問題じゃねぇよ!!」

一人でギャーギャー騒ぐ俺の話を聞いてるのか聞いてないのか、サヨちゃんはナース服片手に俺の着てる（正確には着せられた）チャイナ服を脱がそうと部屋の壁際まで追い込む。このチャイナ服も充分過ぎる程恥ずかしいが、ナースはそれ以上に嫌だ。

「てかさっきからずっと思ってたんだけどそのコスプレ衣装どっから持ってきたの!?」

「貴女が今着てるチャイナ服はシェーレから借りてきたものよ」

「ああ、それなら納得……って、メイドとナースは!?その流れならさっきのロリータ服はマインちゃんだろうけどその二着が意味わかんねぇよ!?」

「これは私がラバに着せたくてこないだわざわざ買ってきたの。だからほら、着て？」
「えっ、俺の為に…？じゃなくて！そんな可愛くお願いされてもイヤなもんはイヤだ!!そういうのはマインちゃんやアカメちゃんの方が似合うからそっちに頼んでくれ!!」
　上目遣いで自分の為と言われて一瞬キュンとするもすぐさま我に返って抵抗する。それでもサヨちゃんは、
「それはそうかもしれないけど……。貴女、普段も男の子っぽい格好してるじゃない。しかもこんなダサいTシャツばっか。だからたまにはこうして女の子らしい可愛い服を……」
「だったらせめてコスプレじゃなくて普通の服にしてよ！いきなりこれは流石にハードル高過ぎだろ!?てか今ダサいって言った!?これ可愛いじゃん!!」
　女らしさの欠片もない俺を可愛く変身させたいというサヨちゃんの期待……ではなく願望を込めたキラキラした目にぐっと堪えて抗議し、ついでに現在彼女の足元に放置されている自分のTシャツを指差しその良さをアピールする。
　首切られてるのに笑ってる熊とか面白くない？よくよく見ると可愛い笑顔だよ？それがダサいだなんていくら大切な友人でも失礼しちゃうね。それにあのシリーズ取り扱ってる店は俺の知ってる限り一件しかないけどつまり超レアなんだぜ？そんなの集めたくなっちゃうだろ！
　なんて誰にも理解されない趣味を熱弁している間に、ジリジリと距離を詰めてきたサヨちゃんが俺の脇のジッパーに手を掛ける。だがその瞬間、救世主が現れた。
「ラバ、サヨ！ボスからの召集が掛かっ、た…ぞ？」
　急いでノックも無しに扉を開けた救世主もといアカメちゃんが、俺達二人の状況を見て硬直する。そしてそんな彼女が漸く口にした言葉は、
「……ラバ、これはどういう状況だ？お前はシュラと付き合ってるんじゃ…？浮気は良くないぞ」

「はあああぁ?!!んなわけないでしょ!?笑えねぇ冗談はやめてくれよアカメちゃん!!」
「あら?違うの?」
「なんでサヨちゃんまで驚くの!?俺があんなゴミクズストーカーと付き合うわけないじゃん!?なにこれデジャヴ感じる!?またアレとの関係を勘違いされるとか人生最大の恥だよ畜生ッ!!!」
いつぞやの騒動を彷彿とさせるかのようなとんでもない誤解に目眩がする。セリューの件以降、あいつの事は仲間として認めてやらなくもないとは思い始めているが……。
いや、そんな事よりなんでアカメちゃんはあんな事言い出したの?失礼な話だけど君ってコイバナに興味あったっけ?あの花より団子なアカメちゃんの口からあんな言葉が出るとは信じ難い。そんな疑問を目で訴えれば、視線に気付いたアカメちゃんはこう答えた。
「ラバが大怪我してから、シュラに対する態度が以前より優しくなってるだろう?こないだもまた弁当を作ってやったりとか」
「いや、それはただ借りがあったからで……」
「だからきっと吊り橋効果とやらでお前達は両想いになったに違いないとレオーネが言ってたから、私はてっきり遂に交際を始めたのかと……」
「……は?」
違うのか?と首を傾げるアカメちゃんの言葉を聞いて間抜けな声が出る。吊り橋効果?なんだそれは?と思考を巡らせるがその答えは本で得た浅い知識の中で見付けた。
しかしそんなものは都市伝説にしか過ぎない、と思ったのはほんの一瞬で。よくよく考えてみると実際ここ最近何故かシュラの顔をまともに直視出来ない。更にはあいつに助けて貰った時やその後抱き締められた時の記憶、そして半分寝ていた際に偶然聞いてしまった彼の独り言を思い出してみれば、不覚にも顔に熱が集まってしまっていた。
「はっ?えっ?いや、んなバカな話あるわけ……お、俺が好きなのはナジェンダさんで……あんなストーカーに助けられたからって、そんな

……えっ？」
おいおい、嘘だろ？なんでシュラの事考えるだけでナジェンダさんを想っていた頃みたいに心臓バクバクいってんの俺？これが吊り橋効果？よりにもよってあいつに？男だし前世で俺をあんな目に合わせた相手だぞ、冗談にしちゃあキツ過ぎないか？誰か嘘だって言ってくれよ!?
「……サヨ、結局レオーネの言ってた事は正しいのか？」
「うーん…多分大体は合ってるけど、これは両想いというより両片想いかしらね。でもあの様子からしてほぼ正解だと思うわ」
「そんなのが正解であって堪るかァァァーーッ!!!」
言われるまで気付けなかった認められない衝撃の事実に絶望し思わず叫ぶ。するとそれを聞いて駆け付けて来たのか、
「おいどうしたラバ!?なんかあったのか!?」
「～～～ッ!!?」
噂をすればなんとやら。慌てて部屋に入ってきたのはシュラ本人で、喉から心臓が飛び出るんじゃないかってぐらい驚いて声にならない悲鳴を上げる。
しかもただでさえアカメちゃんのせいで変に意識しちゃってる俺はそいつの顔を見ただけでもパニック状態なのに、彼女と同じく俺を凝視するシュラの反応で自分の格好を思い出してしまい、
「み、見んなバカァァァーーーッッッ!!!」
と真っ赤な顔でまた叫んで、気付けばシュラの顔面を拳でぶん殴っていた。

～ナジェンダｓｉｄｅ～
「――ナジェンダさん好きです大好きです愛してます」
アカメに呼びに行かせたラバとサヨが漸く会議室に来たと思ったら、一直線に飛び付いてきたラバが私の胸に顔を埋めながら壊れたように私への愛の言葉を述べていく。可愛い妹分に大好きと言われるのは嬉しいが正直怖い。

「……アカメ、そっちで一体何があった？」
「ああ、実はさっき……」
「待ってアカメ。ここで話したらめんどくさい人が暴れてややこしくなっちゃうわ」
説明しようとしたアカメをやけに真剣な表情で制止するサヨが、首を傾げるリネットを一瞥しながら考える仕草をする。もしやまたシュラがラバにちょっかいを出して何かやらかしたのか？
「……ボス、ちょっと良いですか？」
「ん？なんだ？」
「実はかくかくしかじかで……」
「……マジか」
「マジです」
ラバに抱き付かれたまま動けない私に寄って耳打ちするサヨから聞いた話はとんでもない内容だった。なるほど、これは確かにリネットに聞かれたらヤバい。ラバが錯乱状態なのも納得いく。
まさかあのラバが遂に春を迎えるとは……。相手がシュラなのは癪だが、今夜は赤飯だな。そう一人で頷きつつラバの頭を撫でてやれば、彼女は気持ち良さそうにうっとりしながら頬擦りをしてきた。お前は猫か。
でもさっきのヤバそうな雰囲気はなくなったのでそこは安心した。かと思えばラバはハッとして、
「す、すみませんナジェンダさん！俺今なんか失礼な事を…!?」
正気に戻った様子で慌てて離れ、羞恥で赤らんだ顔を何度も下に向けて私に謝る。これはこれでまだパニック状態ではあるが、先程のと比べれば断然マシだ。
そんな彼女に大丈夫だと告げて再び頭を撫でると、ラバは何故か更に頬を赤く染め、
「ほんと、ナジェンダさんが男だったら良かったのに……」
なんて小声で言って悩ましそうな溜め息まで吐かれ、私は物凄く複雑な気持ちになった。
えっ、私ってそんなに女らしくないのか？普段からイケメンだの男

前だのとよく言われるが、それは流石に傷付くぞ…？

目の前で幸せそうにぽわぽわしてるラバとは対象的にどんよりと沈む私の心中は、会議の存在を思い出してどうにか誤魔化す事にした。時には現実逃避も必要だ。さぁ、仕事に集中するんだ私。さっきのは全部忘れろ、いいな？

会議を斬る

暫くして落ち着いた頃。結局廊下で伸びてるシュラは放置し、ナジェンダさんが三つの悪いニュースを告げると、周りのみんながどよめいた。

一つは地方の暗殺チームと連絡が取れなくなり、全滅した可能性がある事。二つ目はエスデス将軍が北を制圧し帝都へ戻ってきたという知らせ。そして最後の一つは、ナイトレイドを名乗る偽物が良識派の文官達を次々に殺している事。

シェーレさんが何の問題もなく生き残りマインちゃんも無傷でいる事以外、ここまでは全て前世の記憶通り。しかし、

「今回はこの中で最も護衛に向いてるラバックにも向かわせたい……が。お前はまだ傷が完治していない。それとわかっているとは思うが、万が一お前がエスデスに見付かったら余計厄介になるから暫く帝都には行くな」

「りょーかい。俺もあの女とはもうなるべく会いたくないですしね。素直に留守番して治療に専念します」

そう、今の俺はヘカトンケイルから受けた傷が思ってたより長引いてしまって、まだ本調子で戦えそうにないのだ。その為無理をして仲間の足を引っ張るわけにもいかないので、悔しいがここはナジェンダさんに従って留守番する事にした。

当然、店もまた休んで、帝都での諜報活動は兄さん達に任せるしかない。エスデスに出逢ってしまった時点でこうなるのはわかっていたけど、復帰したばかりなのに非情に残念だ。

「もしかしてラバが変装してまで生きてるのを隠してた昔の知り合いって、その人の事？」

「うん、あとその周辺の奴らとかね。なんか肝が据わってるとかなんとかで気に入られちゃったらしくて、兵士時代は毎日のようにナジェンダさんのとこから引き抜こうとされたりで散々苦労したよ……」

「へぇ～、帝国最強の将軍にスカウトまでされた事あんのかよ？やっぱラバって意外とすげぇんだな」

質問してきたサヨちゃんに苦労話の一部を語ると、その横でタツミとイエヤスが感心していた。
俺は純粋に凄いと誉められたのがくすぐったくもありつつ上機嫌になり、つい天狗になってドヤ顔をする。
「まぁこれでも俺は生まれ付き天才で昔からナジェンダさんの補佐として付き従ってる有能だからね。優秀な人材を探してる美女に求められるのは仕方ねぇさ！」
「悪ぃ、前言撤回。お前のそういうとこほんとすげぇムカつくわ」
「お前って顔は意外と可愛いけどすぐ調子に乗ってウザい態度取るよな。そこが勿体ない」
「調子に乗り易いのはあんた達も一緒でしょうが」
蟀谷に青筋を作るタツミとイエヤスが俺の長くなった鼻を真っ二つに折るように本音をぶつけてきて、人の事を言えない二人にサヨちゃんが突っ込む。
でもこうして俺の天才っぷりに嫉妬されるのはちょっぴり良い気分だったりするので、タツミやイエヤスにどれだけ罵倒されようと痛くも痒くもない。いくら喚いたところで所詮は負け犬の遠吠えだ。つっても、あの超級危険種みたいな女王様にまた追っ掛けられんのはごめんだけどな。
「話を戻すぞ。狙われてるであろう文官の候補は二人に絞られている。今回の任務のメンバーは、まずはアカメとシェーレにマイン。もう一人の護衛対象はブラートとリネット、そしてタツミに任せる」
俺達の無駄話が終わったと判断し咳払いして話を戻すナジェンダさんが、前世では既に脱落していたシェーレさんや負傷して参加出来なかったマインちゃん、ここに居なかった兄さんを含めた六人を護衛任務に選抜する。残りは留守番だ。……が、反対派が一人居た。
「はい、一つご意見良いですか？僕はアカメちゃん達と一緒のメンバーが良いです。男しか居ない空間なんて地獄過ぎて仕事に集中出来ません」
手を挙げて真剣にそう主張するのは、男しか居ない環境を拒むリネット兄さん。同じく女好きの俺にはその気持ちはよくわかるが、そ

んな馬鹿馬鹿しい意見が通じるわけがなく、
「そうは言われてもな……。お前達のチームが行く任務先は巨大豪華客船の竜船。貴族や富裕層が集まる場所だから、礼儀や作法を学んでるお前が行った方が自然に溶け込めるだろう。ブラートもインクルシオの奥の手があるし、少なくともお前ら二人は外せない」
「うええっ!!?よりにもよってそこ固定なんですか!?じゃあせめてタツミくんをマインちゃんとチェンジして下さ……」
「悪いけど私はシェーレとコンビ組んでるから。そのお誘いはお断りよ」
「マイン…!」
「あーあ、フラれちゃったね、兄さん」
「あ゛あ゛ぁーーーッ!!!」
言い終わる前にマインちゃんに断られ絶望し、五月蝉い叫び声と共に崩れるようにして膝を折る兄さん。更に彼女の隣ではシェーレさんが感激していた為フラれた感が一層増しており、俺はざまぁみろと内心嘲笑う。
だが俺と一緒なのがそこまで嫌なのかと密かにタツミがショックを受けてるのには気付いていない様子。サヨちゃんばっかじゃなくてそっちの後輩達にも優しくしてやれよ。
「マインにフラれたからってそんな落ち込むなよリネット。例え華が無くても、俺がその寂しさを埋めてやるぜ」
「い、いえ全然!全然大丈夫なのでご遠慮させて頂きますッ!!」
肩をポンと叩くブラートさんと目が合わないよう兄さんは青褪めた顔を全力で逸らし断る。
任務期間中に自身の貞操が失われないか恐れている彼の為にも、ブラートさんの頬がほんのり染まってるように見えるのは気のせいだという事にしよう。そう、俺はなんも見ちゃいない。ブラートさんが兄さんに熱い視線を送ってるなんてきっと気のせいだ。
まぁそれはさておき。俺の本音を言うと本当は三獣士と戦う事になる竜船組のところには顔バレしてないマインちゃんか姐さんを加えて欲しかったんだが、理由もなくそんな提案をしたところで無駄

だ。
かと言って急に前世の話なんかしても安易に信じて貰えないだろう。仮に信じて貰えたとしても、それを話したらシュラが敵だった過去も喋る事になって、当時の記憶を持つあいつをみんなに黙ったまま仲間に加えてしまった俺の信用問題にも関わるから迂闊に言い出せないのが現状である。
結局、普段頼りない兄さんが活躍してくれるのを祈るしかない。一度裏切られた神様にまた祈るなんて皮肉ではあるが、これは自分の兄を信じて祈っているのだと自分に言い聞かせる。
あれでも天才である俺の兄。妹の俺が有能過ぎるだけで、基本的な護身術はもちろん、ナイフなどといった武器の扱い方もベテランの俺達が叩き込んでやったので彼自身は全く戦えないわけでもない。あと戦闘向きではないが帝具も所持してるし、余程の強敵でない限りはそこそこ役に立ってはいる。
といっても周りが強過ぎるおかげで兄さんは任務に居ても居なくてもあまり変わらない空気に等しいが、そこは本人の名誉の為黙っておこう。
それに、前世でのブラートさんの死因は毒。なのでナイトレイド設立時に薬師として毒の知識も備えていた兄さんの協力の元、ナジェンダさんやみんなの許可を得て暗殺に使う微量の毒物を毎日食事に混入して身体に無理矢理耐性を付ける特訓もしている。
ただし、相手の使う毒が兄さんですら知らない未知のものだった場合は無意味だが。あれはあくまで保険に過ぎない。だから最終的には兄さん頼り。三人が無事に生きて帰ってくるには、あの中で唯一のイレギュラーな存在である彼に頑張って貰うしかないのだ。

ガールズトークを斬る

「なぁラバ、今日シュラと何かあった？」
　会議後の夜。入浴時間にそれを訊く為に来たと言っても過言ではない姐さんが隣に座って開口一番にそう訊ねてきた。まぁ会議室に集まった時の俺の様子は明らかに可笑しかったから、周りが気にしてしまうのは無理もないだろう。
「別に何もないよ」
「本当にそうか～？お前、実はシュラに惚れちまったんだろ？サヨから聞いたぞ～。やっぱ私の予想は当たってたみたいだな」
「ち、違う！誰があんなクソ野郎に惚れるか!!何度も言うけど俺は昔からナジェンダさん一筋なのっ!!」
「うわー、わっかり易い反応……」
　勢い良く立ち上がり全力で否定するが、熱くなった顔のせいで姐さんは信じてくれない。これはきっとお湯の熱さが原因だというのに。
　危ないところを助けられただけで惚れる程俺はチョロくない。あの頃の恋心があんな奴に塗り潰されるなんて事はあっちゃいけないんだ。
「ラバ、変な意地張ってないでさ、もう素直に認めちまえよ。あいつの顔見るだけでドキドキしちゃうからボス一筋とか言って自分に暗示掛けてるんだろ？お前のボスへの愛はラブじゃなくてただの敬愛だって、ほんとはわかってんじゃないの？」
「ち、違うもん…！」
「そんな真っ赤な顔で違うって言われても説得力ないぞ～？」
「うううぅ～～っ!!」
　なにも反論出来ずに恥をかく俺は赤面したまま再び座り、今度は口元までお湯に浸かる。
　男だった俺が大嫌いなあいつを好きになるなんて有り得ないんだ、絶対に認めて堪るか。俺のナジェンダさんへの愛は今も変わらずラブなんだ。
「あ～もぉ～！照れちゃって可愛いなこのツンデレさんめ！」

「は!?ちょっ、だ、だから違うって！急に抱き付いてこないでよ姐さん！」
　ニヤニヤ笑う姐さんに突然抱き付かれ、彼女の両手が俺の膨らんだ胸を包んで揉み始める。
「やっ、やだっ！姐さ……くすぐったいからやめっ…やめてってば！」
「ぐへへ、なかなか良い身体してるじゃねぇかお嬢ちゃん」
「何そのキャラ!?なんで女好きの俺が逆に襲われてんだよ!?こんな展開可笑しいだろ!!」
　お湯の中で暴れる度に立つ水飛沫の音が周囲に響く。必死に抵抗しながら叫ぶが、姐さんは手を止めてくれない。
　また女性に襲われるなんて、これではまるでエスデスの時の二の舞ではないか。けれどそう思ったその時、予想外な人物がここに現れた。
「ちょっと！さっきから五月蝉いわよあんた達！外に居る男共にまでそんな会話聞かれたらどうすんのよ!?」
　バァーンッ!!と勢い良く戸を開ける音に吃驚して振り返れば、そこにはタオル一枚の姿のマインちゃんが。その後ろには彼女に手を引かれる眼鏡無しのシェーレさんも一緒に居て、戸が壊れてないか心配してあわあわしている。
　これには流石の姐さんも驚いて動きが止まり、獣に食われる運命から無事に逃れられた俺は助かった安心感で思わず泣き出してしまった。
「うわあぁーん!!助かったよマインちゃーん！危うく姐さんに食われるとこだったよぉー！」
「ご、ごめんてラバ！さっきのは冗談だから泣くなって！ほら、私の胸貸してやるから！」
「許す!!」
　まさか泣かれるとは思ってなかったのか狼狽える姐さんが腕を広げたと同時に、躊躇なくその豊満な胸にダイブする。
「チョッロ!!?あんたそれで良いの!?」
「チョロくて結構。俺はこのマシュマロボディの誘惑には逆らえない

んだ!!」
「はいはい、ラバはお姉さんのおっぱいが大好きだもんなぁ～」
そう言ってマインちゃんの突っ込みに返す俺の頭を撫で始める姐さん。
だか俺も胸を弄られたんだからと仕返しで柔らかいそれを揉んでみるが、姐さんは涼しい顔。俺のやり方が下手クソだとでも言われてるかのような謎の敗北感や悔しさ、恥ずかしさが勝ったのですぐに諦めた。
「あれっ？でもマインちゃんが風呂入るのってこの時間だっけ？まだ早い筈だよね？」
「そうだったかしら？あんた達が長風呂してただけじゃないの？」
そう言ってふてぶてしい態度で姐さんとは反対側の隣に座ってくるマインちゃんと、それに続いて気持ち良さそうに浸かるシェーレさん。
いつの間にか両隣で挟まれてるが、まるで逃がさないとでも言われてるような気がするのは俺の気のせいだろうか？否、気のせいであって欲しい。
「とか言って本当は私と同じでラバを心配して来たんだろ？相談相手になってやろうとか、そんな感じに違いない」
「んなっ!!?べ、別にそんなんじゃないわよ！あんたと一緒にしないでくれる!?」
「ふふっ、マインは優しいですからね。私も人の事を言えませんけど、会議中もラバの事をずっと気にしてましたよ」
「シ、シェーレは黙ってなさい!!」
少し顔が赤くなったという事はどうやら図星の様子。更にシェーレさんにまで暴露されたけど、やっぱり彼女には強く当たれないらしい。
っていうか三人共俺を心配してくれてたのか。てっきり姐さんは俺をからかって遊ぼうとしてただけなのかと思ってたけど、そういう事なら悪い気はしないな。……さっきのセクハラは別だけど。
「それより！結局ラバは何に悩んでるわけ？あたしに何か出来るなら

協力してあげなくもないけど？」
「あはは、マインちゃんは相変わらずだね。まぁつっても大した事じゃ……」
「シュラの事が好きになっちゃった～って話でしょ？ちょうど私もそれ聞いてた途中なんだよねぇ～」
「はぁ…やっぱそうなのね。あんなのを好きになるなんて、ラバも相当変わり者よね」
「もしかして恋バナってやつですか？私恋愛経験なんてないので、そういう女の子らしいお話が出来るの羨ましいです～！」
「だから違うって何度言えばわかってくれるの!?もうやだこの会話!!」
　俺の声を遮った姐さんの言葉に溜め息を吐くマインちゃんと嬉々とするシェーレさん。いくら違うと喚いても三人揃って聞く耳を持ってくれない。
　一体どうすれば違うって信じてくれるんだよ…？すぐ恋バナに発展するガールズトーク怖い。
「全く、そんなにシュラを好きになるのが嫌かね？確かにあいつは悪いとこばっかだけどさ、良いとこも少しくらいあるでしょ？」
「あれの良いところって例えばどこよ？」
「喧嘩が強いとか、案外顔が良いとか？」
「他は？」
「……さぁ？」
「ほら!!やっぱ悪いとこしかないじゃん!!百歩譲ってそこそこ実力のあるイケメンなのは認めてやるけど、俺があんなストーカーに惚れる要素なんて無いに決まってるでしょ!?」
　あれの良いところなんて何一つも思い浮かばない。せいぜい強いイケメンってだけで、むしろ俺の敵。女の子にモテる野郎共は全員死ね。
「でもシュラってああ見えて意外と優しいところもありますよね？この前とか私の無くした眼鏡を一緒に探して見付けてくれたんですよ～」

「シェーレ、あいつが優しくするなんて事は有り得ないんだからその時は大体裏があると思うわ、次から気を付けなさい。あんな奴に善意なんてあるわけないでしょ」
「まぁあいつも不器用だからなぁ。マイン程じゃないけど、優しくしてるつもりが相手にとっては皮肉になってたりするんだろうね」
「はぁ!?あたし程じゃないってどういう意味よレオーネ!!って、ラバ？」
姐さんに噛み付くマインちゃんがこちらを向いた途端、彼女は俺を見てきょとんとする。
「……ラバ、お前すっげぇ顔真っ赤だけど大丈夫か？」
「ファッ!!?な、ななんの事かな!?べ、別にあいつに優しくされてなんかねぇし！慰められてなんかないからな!?」
「うん、まだ聞いてもないのにわざわざ自白してくれてありがとな。とりあえず一旦落ち着こっか？」
茹で蛸みたいにカーッと赤くなった顔を指摘された事によってテンパって自爆してしまう。その原因はさっきの会議前のように再びあれを思い出し意識してしまったせいだ。
赤子をあやすようによしよしと姐さんに頭を撫でられ、しまいにはシェーレさんまでこっちに来て撫で始めた。なんだこの状況、普段なら喜ぶところなのに全然嬉しくない。恥ずかし過ぎて穴があったら入りたい。
「でもこれ、リネットが聞いたら怒っちゃいそうですね。シュラとはいつも喧嘩してるから余計に……」
「あのシスコンなら絶対キレるだろうねぇ。まぁそん時は私達で説得してやろうぜ、可愛い妹の幸せを願ってやれって」
「そうね、レオーネの説得でもダメだったら協力してやっても良いわよ。ずっと喚かれても迷惑だもの」
「ねぇ、俺があれに惚れてる前提で話すのやめてくんないかな？この話もうやめよ？俺先に出るからね？」
湯に浸かりながら長話していたからのぼせてきたと伝えると、姐さん達はそれなら仕方ないと言って風呂場からの退出を許してくれた。

だが三人はまだガールズトークを続ける気なのか上がろうとする気配は全くない。のぼせても俺は知らないからな？その話を中断するなら今の内だぞ？なんて呟いても知らんぷりされてしまった（シェーレさんに限っては普通に聞こえてなかっただけだと思うが）。

「――あーやだやだ。なんで女子ってすぐ恋バナに発展させんのかねぇ？」

脱衣所を出てすぐキッチンに行き、若干苛ついたようにタオルで髪を乱暴に拭きながらコップに注いだ水を一気に飲む。

ちゃんと乾かせってまた兄さんに叱られそうだけど、この時間帯は自室に籠ってるだろうから関係ない。それより今はこの変な気持ちをどうにかしたいのだ。

「つたく、あんな奴のどこが良いってんだよ？ただの執着心の強い悪質ストーカーだろうが」

って口にして悪態をついてみたが、その顔はまだ熱い。

「……いや違う、これは風呂上がりだからだ。やっぱいつの間にかのぼせちゃったんだようん」

……俺は一体誰に言い訳してるんだろうか？姐さん達に？自分に？考えれば考える程わけわかんねぇ。もうどっちでも良いや。

混乱した脳が正常に働いてくれない今、何を考えてもこのもやもやした気分は晴れない。むしろ明日の件も相俟って自分に嫌気が差し悪化してしまっている。

「あれ？ラバじゃん。こんな時間に何やってんだ？」

「ああ、タツミか。見ての通り風呂上がりの水分補給だよ」

夜食でも食べに来たのか同じくキッチンに訪れてきたタツミの質問に答えれば、彼は俺の格好を見て納得した。

「ってか、ちゃんと髪乾かせよ。風邪引くぞ？」

「チッ、お前は兄さんか」

「なっ!?い、いくら俺がお節介だったとしても舌打ちまでしなくたって良いだろ!?」

心配して軽く注意しただけなのに、と嘆くタツミ。思わず八つ当たりしてしまったのをすぐに自覚した俺は反省し、バツの悪い顔で謝った。
「ラバ、今日はどうしたんだよ？会議の時もだったけど、なんか変だぞ？悩みがあるなら相談してくれ。俺に出来そうな事があれば協力するからさ」
「……うん、ありがと。お前も全然変わってなくてほんと助かるよ」
「？」
多分タツミのこういう純粋な笑顔と優しさにみんな惹かれてるんだろうな、と。遠い記憶と全く変わらない彼のおかげで不思議と荒れた心が落ち着き、釣られるようにして俺も笑みが溢れる。
誰かが困ってる時は察しが良く相談にも乗ってくれて、しかも何も知らないとはいえ二周目の今も俺が男だった時と変わらずにふざけ合ってくれる親友。嫉妬する事も未だにたくさんあるけど、なんだかんだ言ってこいつと一緒に居る時間が一番安らぐような気がする。
「へへっ…流石は俺の一番の親友であり戦友、だな」
「えっと…？さっきから何ブツブツ言ってるんだ？よく聞こえないからもうちょいはっきり喋ってくれ」
「お前の顔見たら苛々が吹っ飛んだって話」
「はぁ？なんだそれ？バカにしてるのか？」
「そういう意味じゃねぇよ。……明日の任務、全員無事に生き残って帰ってこいよ」
「？おう」
そう言ってすれ違いざまにタツミの肩を軽く叩き、夜のキッチンを一人去って行く。
みんなにやる気を出して貰う為にも、明日は朝早くに起きて美味い弁当でも作ってやろう。今の俺には祈る事しか出来ないけど、どうか、彼らが全員無事に生き延びてくれますように。何度繰り返そうとこの道を選ぶ俺だって人間なのだから、そのくらい願ったってバチは当たらないよな？神様。

獣を斬る（前編）

広い海へと繋がる大運河を渡る豪華客船、竜船。その甲板で華やかな衣装を身に纏う富裕層の船客達に紛れて護衛任務を行う俺達は最初三人一緒に居たが、透明化が切れそうになった兄貴が隠れられそうな場所へ移動した為、今はリネットと二人きりだ。

しかし突如流れ始めた謎の演奏によって周囲の人間達が次々と倒れていき、気付けばリネットまで倒れ掛けていた。

「大丈夫かリネット!?しっかりしろ！」

「くっ……！耳を塞いでも聴こえるとは、かなり厄介だね……！となると他に対策は……」

既にフラついてる俺よりもこの演奏の効果を受けてしまっているのか、リネットの目がだんだんと虚ろになっていく。

突然の出来事に状況が呑み込めずに困惑してると、遂に敵が現れてしまった。

どこに隠れていたのか体格のある男がこちらに迫る。その大男は重圧感のある大きな斧を手にしており、そいつが例の偽者だと瞬時に理解した。

「てめぇが偽者のナイトレイドか」

「おっ、そっちは本物さんかい！こりゃあ良い」

そう言って奴は剣をこちらに投げ渡す。意図がわからず困惑していると、そいつは最強になる為に戦って経験値を得たいだなんてふざけた事を言いやがった。

リネットは催眠でほとんど動けず、兄貴も別行動中で不在。なら俺が一人でやるしかない。

「てめぇなんざ俺一人で充分だ!!」

「良いぜぇ、その威勢の良さ！すっげぇぶっ壊し甲斐がある!!」

先手必勝。男に躊躇なく走り出すと、そいつは斧を高く掲げ振り落としてきたので咄嗟に横に転がって躱す。

「つぶねぇ!!とんでもねぇ怪力だなこいつ……！当たったら即死じゃねぇか！」

「ほぉ、音にやられた身体でよく避けれたな。こりゃ益々良い経験値が取れそうだ！」
愉快にゲラゲラ笑う男は楽しそうにしているが、こっちは全然面白くない。自分の居た位置の床が抜けてるのを見てゾッとする。
あの威力はかすっただけでもただでは済まないだろう。だが兄貴やアカメに比べたら動きは遅い方だ。気を抜かない限りはフラつく身体でも辛うじて避けられる。
ただ問題はどうやってここから場所を変えるか。このままでは戦えない状態のリネットを巻き込んでしまう。
そう心配して彼の居た場所に目配せする。……が、彼はそこに居なかった。
「ッ!!?リネット!?」
まさか、と敵に視線を戻すと、動けなかった筈のリネットは大男に体当たりしていた。
「ああ!?なんだてめぇ!?（こいつ、気配もなく俺の背後を…!?それに催眠に掛ってた筈じゃ…!?）」
「タツミくん！僕が抑えてる内に斬るんだ!!長くは持たないから早く！」
いつだったか俺がマインに促した時のように全身で敵を拘束して抑えるリネット。よく見るとその左手の小指は可笑しな方向に曲がっており、自ら指を折った痛感で催眠状態から脱したと窺える。
男は当然抵抗し、彼を引き剥がそうともがき暴れる。俺の時よりも体格差があるだけでなく、危険な帝具を所持してる相手なのにも関わらず行動したリネットの勇気は相当なものだ。
彼の命掛けの勇姿に応えるべく雄叫びを上げながら敵へと突っ込んで行く。しかしあと一歩のところで、その男はニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
それを見て危険を察知した俺が反射的に後退すると、二挺に別けた斧の片割れがこちらに投げられ、回避し切れず脇腹に浅い傷を負ってしまった。
「チッ、勘が良いみてぇだな。焦ってる演技がバレたか」

「ぐあっ!!」
「リネット!!」
苦戦してたように見えた拘束を呆気なく解いた男がリネットを蹴り飛ばす。即席の作戦は通用しなかったどころか逆に利用されるところだった。
「もう終わりかぁ?だったら今度は俺の番だぜぇ!!」
「くっ…!逃げろリネット!!」
一番近くに居るリネットを狙って斧を振り上げる大男。仲間の危機に思わず叫ぶが、蹴り飛ばされたままの彼は何故か全く動こうとしない。
まさかまた催眠に掛かってしまったのでは?しかしそれは杞憂に終わる。
「ッ!!?」
リネットの不気味な微笑が、敵の動きを止めた。かと思えば、男はその手から武器を落とし、突然起きた自身の異常に困惑し始めた。
「な、なんだこれ…!?なんで身体に力が入らねぇんだ!?てめぇ、俺に何をしやがった!!?」
「ああ、やっと効果が出たみたいだね。でも安心して、僕は貴方に触っただけで特に何もしてないよ。ただ触って、その〝身体の時間を速めただけ〟さ」
「!!?」
可笑しな事は何もないと言いたげに微笑むリネットの言葉に、俺も敵も狼狽する。
「時間を、速めただと…?どういう事だてめぇ!一体どんな帝具を使いやがった!?」
「どんな帝具かって?良いよ、冥土の土産に教えてあげる。僕の帝具はこれ。秒針変動(びょうしんへんどう)『タイムリング』っていう時計の付いた指輪型の帝具なんだけどね、異名通り時計の針を進めたり戻したりするんだ」
タネ明かしをしようと起き上がったリネットが見せたのは、右手の人差し指に填められた銅の指輪。その指輪の中心には小さな時計が付いており、狂ったように現在も異様な速度で秒針が進んでいる。

「この秒針は触ったモノの時間を示してて、こんな風に直接触れたモノの時間を操れる。つまり、さっき僕が体当たりして抵抗された際にこっそり服の裾から素肌を触わった時点で貴方は歳をいくつも取り続け、武器すら持てなくなる程筋力も衰え始めて敗北が確定したのさ」
「時間を操るって……そんなの可能なのかよ!?」
「うん。遠い場所に瞬間移動する帝具も存在するくらいだしね、他にもこういうのがあっても多分可笑しくないんじゃないかな？因みに生き物の逆再生は出来ないから死人の蘇生は不可能だし、今更僕を殺しても貴方の残り少ない寿命は元に戻らないよ」
「こ、のっ……！」
シュラのシャンバラが空間転移に対して、リネットの帝具は対象の時間操作。帝具誕生から千年の刻を経ても人間には到底理解出来ない未知の領域を自在に操る二人の帝具は似て非なるものだが、どちらも対抗する術がない。
知らぬ間にリネットの術中に嵌まってしまった大男は有り得ない速さで痩せ細っていき、髪も白くなってハラハラと抜け落ちていく。筋肉質だった体格の良い身体は枯れるように失い、そいつはもう既に皺だらけのただの老人へと変わり果てていた。その異常過ぎる光景に、味方である筈の俺でさえ戦慄してしまう。
「ほら、もう随分痩せこけて醜い姿になっちゃったでしょ？今の貴方は急速な老化のせいで立つ事すら出来ないってわかる？まだ短い人生だったろうけど、身体だけは何十年も経って衰えていく感覚はどうだい？」
男をそんな姿にした犯人のリネットは憐れみの表情でその男を眺めながら問い掛ける。だが質問された男は座り込んだまま微動だにせず、一言も言葉を発さなくなっていた。
「あ、もしかして顎と舌もダメになってもう喋れない？ごめんね、これでも最速で時間を進めてるんだけど、じっくり苦しみながら殺されるのは辛いし屈辱的だよね……。ほんとは僕もこの殺し方好きじゃないんだ。だからせめて、一思いに止めを刺してあげるよ」

そう言ってせめてもの慈悲としてナイフを取り出したリネットが、無抵抗な老人と化した男の喉を躊躇なく斬る。多分、あのまま身体を腐らせて寿命が尽きるまで死を待つよりはマシな最期だっただろう。
「……これで一人目の討伐完了、っと。それじゃあタツミくん、敵はまだ複数潜んでるかもしれないから、早くブラートさんを探して合流しよっか」
「お、おう」
ふぅ、と緊張感を解くように詰まっていた息を吐いて、けれど慎重に兄貴との合流を促すリネット。先程まで別人のようだった彼が普段の調子に戻ったのを感じた俺も漸く震えが止まり、安堵で胸を撫で下ろす。
「……流石にタツミくんもさっきのは見てられなかったよね、怖がらせちゃってごめん。でも僕は昔から鍛えてる君達みたいな肉体的な強さを持ってないから、こういう殺り方をしないと生き残れないんだ。慣れてくれとは言わないけど、こんな僕を嫌わないでいてくれないかな…？」
「えっ？い、いや…確かにさっきのはちょっと怖いと思ったけど……だからってリネットを嫌ったりなんてしねぇよ。俺はお前が優しいのを知ってるし、人殺しを楽しむような奴じゃないってのもわかってる。だからもう気にすんなって」
おぞましい殺し方のせいで嫌われないかと怯えるリネットが俺に謝る必要はない。だってもし俺がその手段を使うとしたら、根っからの悪党には朽ち果てるまで犠牲者達の分も苦しめと言って慈悲を与えないでいるかもしれないから。リネットみたいにあんな敵にさえも同情出来る自信は俺にはない。
「……ありがとう。タツミくんもみんなと同じで優しいね。昨日は女の子とチェンジして欲しいなんて言っちゃってごめんよ。今回君と一緒に仕事が出来て良かった」
「ああ、俺もリネットの事がやっと少し知れた気がして嬉しいぜ。でも仕事はまだ終わってない。アジトに帰るまでが任務だ！」
「あははっ、それってアカメちゃんの受け売りかい？まだ暗殺者に

なったばかりのひよっこなのに、言うようになったねぇ」
と、リネットが笑ったその時。再び新たな敵影が現れた。
「「ッ!!」」
突如出現した人影は二つ。細身な長身の老紳士と、間逆に低身長の幼い子供。先程倒した大男と同じ格好をしているという事は、彼らもナイトレイドの偽者。俺達の敵だ。
だが油断している内に奇襲を仕掛けられた俺達は気付くのが遅れてしまい、二人同時に殺られると悟った。しかし、
「──待たせたな二人共ォォオーーッ!!」
まるでヒーローのように参上した兄貴が、敵二人を吹き飛ばし俺らのピンチを救ってくれた。
「兄貴!!良かった、無事だったんだな!」
「ふっ、俺を誰だと思ってるんだタツミ?俺の熱いハートは催眠ごときに負けねぇよ!お前らこそ、俺が居ない間によく敵を一人倒したな!」
鎧の帝具、インクルシオを纏った兄貴はこちらに振り向き、グッと親指を立てて俺らを激励する。赤く滲んだ包帯を巻いた脚を見たところ、彼もリネットと同じような方法で催眠を解いたようだ。
「──流石は百人斬りのブラート……いや、正確には、百二十八人斬ったな」
「「!!?」」
安心していたのも束の間。兄貴に吹き飛ばされた筈の一人が全くダメージを受けてない様子で立ち上がり、俺達の元へ歩み寄ってくる。
しかも話を聞くとその老紳士は兄貴の兵士時代の元上司だったようで。彼が噂のエスデス将軍の部下だと名乗った今、感動する筈の再会が敵同士という最悪な形になってしまっていた。
しかしそんな中、空気を読まずにシリアスブレイクをしたのはリネットだった。
「……んん?そういやこの人、どっかで見た事あるような…?」
「…?」

「えっ、そうなのかリネット？」
「ちょっと待ってて下さい、今頑張って思い出してみます」
「ヤベェ状況なのに緊張感無さ過ぎないかあんたら!?悠長にそんなどうでも良い事考えてる場合じゃないだろ!!」
老紳士を見てうーんと唸るリネットと興味津々な兄貴に思わずツッコむ。だが老紳士はリネットに対して見覚えがない様子。
なんだ、リネットの見間違いか……と思いきや、
「……ああーっ!!?思い出した！この人数年前に本屋で偶然目が合ったＳＭ系の百合漫画を手に取ってたおじさんだ!!」
「「……は？」」
ハッとしたリネットが指を差してそう告げた直後、辺り全体が冷え切った気がした。
そして指を差された本人はというと、
「……」
この通り否定も肯定もせずに無言である。
「ゆ、百合漫画…？リヴァ、あんたマジでそうなのか…!?」
「……私が女性同士の恋愛物語が好きで何が悪い？」
悲報、兄貴の元上司が百合好きである事を認めました。
「くっ！一体いつからそんな趣味を…！あんたには見損なったぜ！」
「問題そこかよ兄貴!!?普通ここは帝国に加担してる事を重視するべきだろ!?」
「神聖な百合を侮辱するな愚か者ッ!!全ての少女淑女は我が主、エスデス様のものだ!!」
「この人も何言ってんだ!!?これじゃあいつまでも収拾付かねぇ！助けてくれリネット!!」
「……ごめんタツミくん、僕そっちの人達に関わりたくないや」
「いやいやあんたの撒いた種だろ!?どうにかしろよ!!」
「無理」
「即答すんなっ!!!」
ダメだ、なんかすげぇカオスになってきた。俺もツッコミで叫び続けるだけで疲れ始めたぞ。マジでなんなんだこの状況…？

「いったた……んもう、なんかリヴァまで騒いじゃってるみたいだけど、早くこいつら仕留めないと……」
唯一会話を聞いてなかった様子の小柄な敵が、周囲の騒がしさに目を覚ました。
それにすぐさま気付いた俺は、笛を吹こうとしたそいつの動きをいち速く阻止する。するとその武器同士のぶつかり合った音を合図に、言い争っていた兄貴達も漸く戦いを再開させた。
「(あっちはブラートさんの元上司……将軍クラス相手じゃあ僕が行っても荷物になる。となると、これは帝具無しのタツミくんに加勢した方か良いね)助太刀するよタツミくん!」
「!!おう!助かるぜリネット!」
「はっ、一対二か。ま、雑魚が何匹増えようがこの僕には敵わないだろうけどねっ!」
三対二という戦況で小柄な敵と対峙してる俺に加勢するべきだと判断したリネットが、俺に続いてその少年にダガーを振るう。だが俺達の攻撃は全て躱され、とても負傷してるようには思えないほどそいつは素早かった。
「流石あの噂のエスデス将軍直属の帝具使い……ラバから聞いてた通り、かなり強いね…!」
「ラバ…?…!!お前、まさかあの女の…!?」
反撃に応戦しながら思わず言葉を溢したリネット。するとラバの名前を聞いた少年が、その表情に怒りや憎しみといったような激情を露にする。
「こいつ、ラバを知ってるのか…?」
「知ってるもなにも、あいつは生意気にも僕らのエスデス様に好かれていた癖に、その想いを何度も踏みにじったからね!死んだって聞いた時は清々したしエスデス様も興味を失せてくれたけど、あの女に似てるお前の顔を見てたらまた苛々してきた…!お前だけは絶対に殺してやる!!」
素朴な疑問を口にしたら、そいつは逆恨みに等しいラバへの憎しみを吐き捨てた。リネットに関しては完全にとばっちりだ。

「えぇー…これってもしかしなくても僕狙いかい…？僕、タツミくんのフォローに徹するつもりだったんだけど……」
「ごちゃごちゃ五月蝉いなぁ!!お前は黙って僕に殺されちゃえ!!」
「そうはさせるかよ!!」
　面倒臭そうな態度を取るリネットに、敵が問答無用に攻撃を仕掛けてきたので今度は俺が庇う形で彼を援護する。
「タツミくんナイス！って、うわぁ!!?あっち凄い事になってる!?」
「え？…うおぉっ!!?マジだ!?」
　驚愕するリネットに釣られて視線を兄貴達の方向へと向けると、そこには兄貴とデカい水の竜に乗ってる老紳士のおっさんが睨み合っている姿が。俺ら二人と対峙してた少年も思わずそっちを見て驚いていた。
「あはっ、水が豊富な所ならリヴァが勝つね！」
「へっ、兄貴が勝つに決まってるぜ！」
「リヴァだね!!」
「兄貴だね!!」
　ぐぎぎ、とお互い歯軋りしながら交えた武器に体重を掛け、どちらが勝つか言い争う。その隙にリネットが少年の顔に手を伸ばそうとする……が、
「僕の顔はただでは触らせないよっ!!」
「チッ！バレたか！」
　最初から彼の目的を見抜いていたかのように身体を逸らし、そのまま後退して距離を置く少年。するとそいつは笛を構え、再び演奏を始めようとしていた。
「しまった！止めねぇと…！」
「っ！タツミくん待っ……」
　演奏を阻止するべく少年に飛び込もうとした瞬間、ふとリネットの声が途絶える。
　それがなんだか不審に感じ、咄嗟に足を止めて振り返ってみると……直前までそこに居た筈のリネットが、どこにも居なかった。
「リネット…？おい、どこ行ったんだよ!?どこに居るんだリネット!?」

何が起きたのかわからず混乱していると、背後で少年が面白可笑しそうにケラケラ笑い始めた。
「あっはは！まず一人脱落ー！あのお兄さん、リヴァの不意討ちで面白いくらい呆気なく海に落っこちちゃったね！僕が殺したかったのに残念～！あれじゃもう死んじゃってるだろうね！」
「嘘、だろ…？リネットが、海に…？」
少年の言葉に一瞬唖然としてから、ハッとなって慌てて海を覗きに行く。
だがそこに映っているのは揺れる水面だけ。リネットの姿なんてどこにもなかった。
「リヴァてめぇ…！俺に攻撃を当てるフリをして、本当は最初からリネットを…!!」
「ああそうだ。気付くのが一足遅かったなブラート」
心底悔しそうに血が滲むまで拳を握り締める兄貴に、老紳士は静かに、淡々と答える。
「先程あの青年がダイダラを殺したのは我々もこの目で見ていてな。肌に触れただけで身体を腐らせる帝具を扱う彼は、お前達の中で一番の脅威だと感じた。だから先に排除させた貰ったまでだ。さぁ、今度こそ次はお前の番だ、ブラート！」
「……ああ良いぜ、受けて立つ。リネットの仇は、この俺が必ず討つ!!」
憤怒に身を震わせる兄貴が、老紳士の挑発に乗って再び槍を構える。
かく言う俺も、仲間の命を奪われた怒りに燃えて少年へと向き直す。
「わぁ～、こっわい顔～。もしかして仲間を殺された復讐心に燃えちゃってる感じ？でも僕そういう熱苦しいの嫌いなんだよねぇ～」
「黙れ外道が。てめぇらだけは絶対に許さねぇ…!!」
さぁ、第三ラウンドの始まりだ。

獣を斬る（後編）

リネットが海に落ちてから数分。ブラートとリヴァの激しい攻防が続く中、唯一帝具を持たぬタツミもニャウとの戦いに苦戦を強いられていた。

そしてリヴァがブラートに再び大技を繰り出そうとしたその時。

「――ッ!!?」

海から打ち上げられた大量の水が、途中で動きを止めた。そんな奇怪な現象に、水を操る本人も理解が出来ず困惑する。

「なんでなんで!?リヴァの水が止まるなんて有り得ないじゃん！一体何が起きてんの!?」

「……!!まさか、まだ生きて…!?」

リヴァの嫌な予感はすぐに的中した。目の前にある船の手摺に、見覚えのある指輪を填めた手が伸ばされた事によって。

「ふふっ……こんな広い海に落とすなんて、よくもやってくれたね。危うく本気で遭難するとこだったじゃないか、このクソジジィ…！これだから過激派の百合厨は嫌いなんだよ…！」

まるでゾンビのように、ずるりと身体を引き摺って船に上がってきたのは、先程リヴァの攻撃で海に吹き飛ばされたびしょ濡れのリネットだった。しかもその顔と震えた口調は珍しく苛立ちを露にしていて、普段温厚な彼も流石にご立腹の様子だと窺える。……全く無関係な百合厨への怒りに関してはただの八つ当たりだと思うが。

「リネット!!良かった、生きてたんだな！」

「うん、ギリギリ急所外したおかげでなんとか生きてるよ。でも全身が超痛い中で全力で泳いだり帝具使ったせいで、体力はもうほとんどないけどね……。しかも服も髪もびしょびしょでほんと最悪だよ」

力なく笑うリネットは痛む身体に鞭を打って立ち上がろうとするが、上手く脚が動かず再び床に膝を付ける。息も肩でしている状態だ、無理もない。

リヴァの水が止まったのは、敵味方全員が死んだと思い込んでいたゾンビことリネットの仕業。海に落ちた事で海水に触れたという判

定になったらしく、結果その水を扱ったリヴァの攻撃は時間を巻き戻されようとしていた。
「ふっ、だが貴様が出来るのは刻を少しずつ戻す事のみ。私のアクアマリンが発動し続けている限り、完全に止める事は出来ない！」
「そうですね……。でも勘違いしないでくれません？僕の目的は、貴方の時間を完全に止める事じゃない。少しでも、貴方の動きが遅くなればそれで充分なんですよ」
「!!」
リネットの意味深な発言を聞いたリヴァは、彼の真の目的に気付く。……が、時既に遅し。
「後は頼みましたよ、ブラートさん」
「ああ、任せろリネット。ここでお前の仇を取ってやるぜ…!!」
リヴァが防御の姿勢に切り替える前に、ブラートは彼に副武装のノインテーターを突き立てた。
しかし、斬られたリヴァもただでは死なない。
不利な戦況にも関わらずニヤリと笑みを浮かべた彼に、ブラートはこれまでにない程の危機感を感じた。
「血刀殺ッ…!!」
「ッ!?!!」
リヴァの傷口から吹き出た血潮が、ブラートを襲う。
そう、これも水の一種なのだ。それを瞬時に把握したブラートは、いくつかの弾数を喰らいながらも自慢の槍捌きで急所を防ぐ。
けれど奥の手である血刀殺の威力は水と比べものにならず、多少当たっただけでインクルシオが強制的に解除されてしまった。恐らく、先程までの攻防でも大きなダメージを蓄積していたせいでもあるのだろう。
「ふっ…我が奥の手でも、インクルシオを剥がすのが精一杯だったか。……だが！」
よろめくリヴァの悪足掻きはまだ終わらない。なにせ彼は、自身の扱う水に仕掛けられていたタイムリングの効果が切れている事に気付いていたのだから。

「なっ…ッ!?!!水はリネットが止めていた筈じゃ…!?」
時間の流れに逆らっていた筈の海水が、再び動き出す。ブラートは油断して気付かなかった。リネットの意識が、いつの間にかなくなっていた事に。
そしてリヴァの操る海水は細い槍となってブラートに向かい、咄嗟に防ごうと振り回した彼の剣の真下を器用に潜り、その腹部から背中までを貫く。
「がッ…!!」
「兄貴ッ!!!」
ニャウとの戦いで負傷したタツミがフラつきながらも立ち上がり、ブラートの元へと急いで駆ける。
槍と化した水はすぐに溶け、ブラートの血と共に床に溜まり混ざっていく。結果傷を塞ぐものがなくなり、出血量は更に増していった。
「これで漸く、一矢報えたな……」
致命傷を受けながらもずっと立っていたリヴァも遂によろめき、手摺に寄り掛かる。
「申し訳ございません、エスデス様……私は、ここまでのようです。……後は任せたぞ、ニャウ」
その言葉を最後に、三獣士のリーダー、リヴァはその身を海に投げ捨てた。最期まで主に命を捧げた彼の姿は、タツミもその記憶に焼き付け、一生忘れる事はないであろう。
だが戦いはまだ終わっていない。彼は何故再び水を動かせたのか。それはタイムリングが機能していなかったからだ。ならば何故、タイムリングの機能が突然停止したのか。その理由は、リネットに迫る影にあった。
「あっははっ!!これで今度こそダイダラの仇を討てる!簡単に死んで残念だと思ってたけど、おかげでまだまだ楽しめるね、お兄さん!」
タイムリングの針を何度も動かした上でリヴァからのダメージを喰らったリネットの精神力や体力はもう限界だった。しかし意識を手放した原因はそれだけではない。奥の手で自身を強化させたニャウが、簡単に殺さぬよう手加減したが今度こそ彼に一撃を与えたから

である。
「まずはリヴァの仇からだ！お兄さんはその後にゆっくり、あの憎たらしい女に似た顔の皮を剥がしてあげるよ……！」
歪んだ笑顔のニャウはターゲットをリネットからタツミとブラートの二人に変える。
だがブラートは生身で受けた傷で動けない。今戦えるのは帝具を持たぬタツミのみだ。
「……タツミ、お前にこれを授ける」
「…？これって、兄貴の…？」
血を吐くブラートがタツミに渡したのは、帝具インクルシオを呼び出す鍵の剣。彼はタツミに自分の帝具を譲渡し、知らずに前世と同じ行動を繰り返したのだ。

……その後の数分も満たない時間は、一周目の出来事とほとんど同じ。違うのは、ナイトレイドの三人が無事に生還した事だけである。

――タツミがインクルシオを受け継いだ日の夕方。アジトに帰還した彼らは他の仲間と共に医務室に居た。
「――……ごめん、ブラートさん。僕なりに最善を尽くしたけど、やっぱりダメだ」
死者零の任務達成に喜びを分かち合っていたのも束の間。医務室では重傷を負ったブラートの治療を、リネットが自分も傷だらけでありながらも試みていたのだが……。
「脊髄の神経の損傷が、想像してたよりも遥かに激しい。……これじゃあもう、貴方は一生立つ事すら出来ない」
仕事どころか私生活にも支障がある程の深い傷は、医者を名乗るリネットにも治せなかった。
そもそもブラートがあの傷で生き残れたのは、意識を取り戻してすぐに帝具を使って寿命を数年縮ませてでも彼の時間を少しずつ慎重に進め、ライオネルのリジェネレーターのように人間の本来持つ再生

力を無理矢理引き出して止血したリネットのおかげだ。けれど脚に繋がる神経の損傷は、そんな荒治療すら通用しない。どんな手を使っても、ブラートがその脚で立つ事はもう叶わないのだ。
「ごめん、兄貴。俺のせいで……俺があいつを足止め出来なかったせいで、兄貴の脚が…！」
「泣くなタツミ。確かに脚が動かねぇのは不便だが、あれで死んでなかっただけマシなんだ。だからそんな落ち込むんじゃねぇよ」
「でも、でもよぉ…！」
　ニャウを一早く倒せなかった事に責任を感じていたタツミは悔しさに涙を滲ませる。そしてその隣に居るリネットも、自分があの時気絶せずにリヴァの拘束を維持していればと後悔していた。
　そんな彼らを見兼ねたラバックは、
「……ブラートさんの言う通りだぜ、タツミ。俺達は裏の世界で生きる暗殺者。いつどこで誰が死んでも可笑しくねぇんだ。今は、こうしてお互い生きて顔を合わせられる事を喜ぼうぜ。……一番最悪な未来は、免れたんだからさ」
　まだ誰も、一人も欠けていないこの奇跡に感謝しつつも、彼女は相変わらずな理不尽さに密かに腹を立たせていた。しかしそれは当然の報いなのだと思えば仕方のない事。寿命が縮んでも今生きてるだけマシだと割り切るしかない。
「なぁリネット。これって義足とかも無理なのか？ボスの義手みたいにさ。両足は確かにキツいかもだけど、義足なら……」
「……残念だけど、それは無理だよレオーネ。問題は脚じゃなくて、そこに繋がってる神経なんだ。脊髄の神経は現在の技術で治せた記録がない。しかも自然に治るものでもないから、タイムリングの荒業をやっても効果がない」
　医療の知識が豊富なリネットでも治す方法を知らない。レオーネの提案も意味を成さず万事休す。それなのに、
「脚がもう動かねぇなら仕方ねぇよ。でもだからって俺は絶望しない。立てねぇってだけで、仲間に支えて貰えりゃ生きていけないわけじゃねぇんだ。それに、俺が戦えなくても、お前達っていう希望があ

るからな」
　ブラートは落ち込んだ様子を一切見せず、むしろ自分の事のように悲しむ仲間達を励ます。
　しかし、ナイトレイドで一番強い彼の期待に自分は答えられるのだろうか、と不安に思う者も居た。それは尊敬する彼から帝具を託されたタツミだ。そんなタツミに、ブラートはこう続けた。
「タツミ。そんなに自分を信じられねぇなら、お前を信じる俺を信じろ」
「!!」
「お前が迷ったら俺が必ずまた殴りに来る。だから安心しろ、離れていてもお前の傍には俺の魂がある。お前を信じろ！俺が信じるお前を信じろ!!俺の目に狂いはなかったって、お前自身が強くなって証明するんだ！俺から受け継いだ熱い魂で漢を見せろ、タツミ！」
　期待に応えようとプレッシャーを感じるのではなく、俺を信じて強くなれと鼓舞するブラートの熱い言葉は、タツミに大きな自信を与えた。
「兄貴……俺、兄貴を信じてもっと努力するよ！強くなって、兄貴のインクルシオを使いこなしてみせる！俺は兄貴が信じてくれた自慢の弟子だって、胸を張って言えるように…！」
「ああ、よく言った！それでこそ俺の一番弟子だ!!」
　グッと互いの拳を突き当て合う彼らの師弟関係は、師のブラートが戦線から抜けても今後も揺らぐ事はないだろう。周りの全員が皆そう実感した。